ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告81

富山城跡発掘調査報告書

－城址公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（1）－

2016

富山市教育委員会

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告81

富山城跡発掘調査報告書

－城址公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（１）－

２０１６

富山市教育委員会

例　言

1　本書は、富山市本丸地内に所在する富山城跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、富山市（建設部公園緑地課）が行う城址公園整備工事に伴い実施した。

3　発掘調査は、建設部公園緑地課の依頼を受け、教育委員会埋蔵文化財センターが実施した。一部の調査は、埋蔵文化財センター監理のもと公園緑地課から民間発掘調査会社に委託した。詳細は各章の第1節に記した。

4　本書に収録した発掘調査の概要は次のとおりである。

・2006年度工事立会（本丸土橋）

現地調査期間　2007年1月17日～1月29日

調査面積　68㎡

調査担当者　古川知明（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）

・2007年度発掘調査（本丸東辺土塁）

現地調査期間　2007年10月16日～11月27日

調査面積　112㎡

調査担当者　古川知明、伊集守道（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）

・2008年度発掘調査（本丸）

現地調査期間　2009年2月23日～3月31日

調査面積　118㎡

調査担当者　野垣好史、蓮沼優介（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）

・2010年度発掘調査（本丸南辺土塁）

現地調査期間　2011年3月2日～3月30日

調査面積　87㎡

調査担当者　野垣好史、小林高太（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）

・2011年度発掘調査（本丸東辺土塁）

現地調査期間　2011年6月28日～7月19日

調査面積　25㎡

調査担当者　藤田慎一（株式会社上智富山支店）

監理担当者　野垣好史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）

5　整理作業は、各現地調査終了後から順次開始し、平成27（2015）年度に本報告書作成を行った。報告書作成のうち、挿図・図版作成、編集、遺物写真撮影の一部、印刷作業は有限会社毛野考古学研究所富山支所に委託して実施した。

6　本書の執筆は、第1・2・5・6・7章を野垣、第3・4章を古川、第8章を古川・野垣が行った。各章の自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社パレオ・ラボ、株式会社アーキジオが執筆した。文責は文末に記した。編集は古川・野垣と常深尚（有限会社毛野考古学研究所富山支所）が行い、納屋内高史・宮田康之（富山市埋蔵文化財センター嘱託）の協力を得た。

7　本書に掲載した絵図史料の使用については、富山県立図書館の許可を得た。

8　本書に収録した調査は、これまで現地説明会や刊行物等においてその成果の概略を公表したものがある。これらと本書に相違がある場合は、本書の記述をもって現時点での認識とする。

9　現地調査から報告書作成において、埋蔵文化財センター職員の協力のほか、次の各氏・機関よりご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する（五十音順・敬称略）。

上野幸夫、浦畑奈津子、遠藤和子、大野　究、加藤達行、木越隆三、北垣總一郎、久々忠義、久保尚文、黒崎　直、小久保啓一、佐伯哲也、坂森幹浩、佐々木達夫、鈴木景二、高岡　徹、髙田　徹、滝川重徳、冨田和気夫、中井　均、仁ヶ竹亮介、西井龍儀、萩原大輔、深井甚三、藤田邦雄、本田秀生、宮田進一（故人）、森村紀代、森村健一、石川県金沢城調査研究所、小谷城郷土館、富山県立図書館、富山市郷土博物館、富山市佐藤記念美術館

10　出土遺物・原図・写真は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

1　方位は座標北、水平水準は海抜高である。

2　公共座標は、日本測地系を使用した。これは2002年度の試掘調査以降、城址公園内に設置された石垣改修計画用基準点を継続利用して、全体位置座標を構築しているためである。

3　遺構は、種別を示す以下の記号と番号の組合せで標記する。番号付けは調査区ごとに行った。

ＳＤ（溝）　ＳＥ（井戸）　ＳＫ（土坑）　ＳＰ（ピット・柱穴）　ＳＸ（不明遺構）

4　遺物番号は、本文・実測図・観察表・図版ともに対応する。

5　遺構・遺物実測図の縮尺は各図中に示した。

6　挿図中のトーンは次のとおりである。その他のものについては各図において個別に示した。

□：焼土　▨：地山　□：整地面　■：油煙

7　引用・参考文献は最後にまとめた。ただし、自然科学分析については各節の末尾に掲載した。

8　本書では、天正13年（1585）の富山城破却までを中世富山城、慶長10年（1605）～14年まで前田利長期を慶長期富山城、寛文元年（1661）改修以降を富山藩政期富山城と呼称し、後者二期を総称するときには近世富山城とした。

9　富山城の曲輪名称については、「二の丸」「二ノ丸」「二之御丸」「二ノ曲輪」等の表記があるが、本書では「二ノ丸」に統一した。三ノ丸・西ノ丸についても同様とした。

10　遺物の表現のうち、中近世の土師器については、「土師器皿」・「かわらけ」と二通りあるが、これは執筆者の考え方によるもので、同一の内容を指している。

目　次

例言・凡例
第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　城址公園整備工事に伴う調査歴 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 6
第３章　2006年度工事立会（本丸土橋） …… 12
　第１節　調査の方法 …… 12
　第２節　遺　構 …… 12
　第３節　遺　物 …… 14
　第４節　小　結 …… 14
第４章　2007年度調査（本丸東辺土塁） …… 15
　第１節　調査の方法 …… 15
　第２節　基本層序 …… 16
　第３節　遺　構 …… 16
　第４節　遺　物 …… 30
　第５節　自然科学分析 …… 41
　第６節　小　結 …… 52
第５章　2008年度調査（本丸） …… 56
　第１節　調査の方法 …… 56
　第２節　基本層序 …… 57
　第３節　遺　構 …… 57
　第４節　遺　物 …… 66
　第５節　自然科学分析 …… 83
　第６節　小　結 …… 92
第６章　2010年度調査（本丸南辺土塁） …… 97
　第１節　調査の方法 …… 97
　第２節　基本層序 …… 98
　第３節　遺　構 …… 98
　第４節　遺　物 …… 104
　第５節　小　結 …… 107
第７章　2011年度調査（本丸東辺土塁） …… 110
　第１節　調査の方法 …… 110
　第２節　遺　構 …… 111
　第３節　遺　物 …… 115
　第４節　自然科学分析 …… 118
　第５節　小　結 …… 122
第８章　総　括 …… 124
引用・参考文献 …… 126
写真図版
報告書抄録

図　目　次

第１図　城址公園整備工事に伴う調査位置図（1：2,500）……2
第２図　富山平野の地形分類図（1：200,000）……5
第３図　富山城・城下町の調査位置図（1：6,000）……7
第４図　万治年間富山旧市街図……10
第５図　2006年度工事立会位置図（1：1,200）……12
第６図　2006年度調査区平面図・断面図（1：60）……13
第７図　2006年度調査出土遺物（1：3）……14
第８図　2007年度調査区位置図（1：1,000）……15
第９図　基本層序概念図……16
第10図　2007年度調査区遺構平面図（１）近代（1：100）……17
第11図　2007年度調査区遺構平面図（２）中世２期（1：100）……17
第12図　2007年度調査区遺構平面図（３）中世１期（1：100）……19
第13図　2007年度調査区遺構平面図（４）平安時代（1：100）……19
第14図　2007年度調査区南壁断面図（1：40）……21・22
第15図　2007年度調査区東壁断面図（1：80）……23
第16図　2007年度調査区北壁断面図（1：80）……23
第17図　2007年度調査 SK01・02実測図（1：40）……25
第18図　2007年度調査遺構断面図（1：40）……27
第19図　2007年度調査 SX01断面図・炭化物分布図（1：40）……28
第20図　2007年度調査出土遺物（１）（1：2，1：3）……31
第21図　2007年度調査出土遺物（２）（1：3）……33
第22図　2007年度調査出土遺物（３）（1：3）……35
第23図　2007年度調査出土遺物（４）（1：2，1：3）……36
第24図　炭化種実……43
第25図　動物遺体……44
第26図　昆虫……45
第27図　木製品の顕微鏡写真（１）……48
第28図　木製品の顕微鏡写真（２）……49
第29図　木製品の顕微鏡写真（３）……50
第30図　「富山縣廳構内一覧」（富山県史）上の発掘調査位置……52
第31図　土塁断面復元模式図……52
第32図　富山城・城下町における埋没樹木出土地と河川痕跡……55
第33図　2008年度調査区基本層序（1：20）……57
第34図　2008年度調査区上層面遺構全体図（1：80）……58
第35図　2008年度調査区ＳＤ１・ＳＫ１平面図・断面図（1：50）……59
第36図　2008年度調査区下層面遺構全体図（1：80）……62
第37図　2008年度調査区北壁・整地層断面図（1：50）……63・64
第38図　2008年度調査区整地層掘り込み・包含層遺物出土状況図（1：80）……65
第39図　2008年度調査区土坑・ピット平面図・断面図（1：50）……66
第40図　2008年度調査出土遺物（１）（1：3，1：4）……69
第41図　2008年度調査出土遺物（２）（1：2，1：2，1：4）……70
第42図　2008年度調査出土遺物（３）（1：3）……71
第43図　2008年度調査出土遺物（４）（1：2，1：3）……72
第44図　2008年度調査出土遺物（５）（1：3）……73
第45図　2008年度調査出土遺物（６）（1：2，1：3，1：4，1：8）……74
第46図　2008年度調査出土遺物（７）（1：2，1：3，1：4）……75
第47図　瓦の酸化アルミニウム(Al2O3)－二酸化ケイ素(SiO2)分布図……89
第48図　出土瓦と偏光顕微鏡写真……91
第49図　遺構変遷図（1：250）……92

第50図　明治期の富山県庁(旧本丸御殿)……94
第51図　2010年度調査区基本層序（1：20)……98
第52図　本丸天守台の位置……98
第53図　2010年度調査区全体図（1：300）……99
第54図　2010年度調査Ａ区平面図・断面図（1：50)……100
第55図　2010年度調査Ｂ区平面図・断面図（1：50)……101
第56図　2010年度調査Ｃ区平面図・断面図（1：50)……102
第57図　2010年度調査出土遺物（1：2，2：3）……105
第58図　本丸南辺・東辺土塁に描かれた塀……107
第59図　本丸南辺の土塁変遷模式図……108
第60図　明治期の土塁……109
第61図　現在の土塁……109
第62図　2011年度調査区全体図（1：60)……112
第63図　2011年度調査区断面図(北壁・東壁・南壁）（1：40)……113
第64図　2011年度調査区断面図(西壁）（1：40)……114
第65図　2011年度調査出土遺物（1：3，1：4）……116
第66図　暦年較正曲線図……119
第67図　ボーリング調査位置……120
第68図　採取土壌柱状図……120
第69図　ボーリング地点の調査前状況……121
第70図　ボーリング採取試料……121
第71図　ボーリング調査状況……121
第72図　北壁・南壁の盛土分類（1：60)……122
第73図　本丸東辺土塁の横断面(2007年度調査区南壁－2011年度調査区北壁）（1：80）……123

表　目　次

第１表　城址公園整備工事に伴う調査一覧　……3
第２表　富山城・城下町における調査一覧　……8
第３表　2006年度調査遺物観察表……14
第４表　2007年度調査遺構一覧表……29
第５表(1)　2007年度調査遺物観察表　土器・陶磁器・土製品　……37～39
第５表(2)　2007年度調査遺物観察表　木器……40
第５表(3)　2007年度調査遺物観察表　石器……40
第５表(4)　2007年度調査遺物観察表　金属器……40
第６表　炭化種実……41
第７表　昆虫同定結果……45
第８表　樹種同定結果……47
第９表　2008年度調査遺物観察表……76～82
第10表　測定試料及び処理……83
第11表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果……83
第12表　分析した瓦の特徴……84
第13表　瓦胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴記載……87
第14表　瓦胎土中の粘土および砂粒の特徴……87
第15表　岩石片の起源と組み合わせ……88
第16表　瓦胎土の蛍光Ｘ線分析結果……88
第17表　富山城・城下町出土の焼塩壺……95
第18表　2010年度調査遺物観察表　……106
第19表　2011年度調査遺物観察表　……117
第20表　放射性炭素年代測定及び暦年較正結果　……119

図　版　目　次

図版01　2006年度調査　遺構・遺物
土橋工事区域（北から），明治期土坑検出
1地区通路面（硬化面）検出状況，1地区土層断面
2地区硬化面検出状況，3地区土層断面
3地区溝状遺構（南から），3地区土層断面，遺物
図版02　2007年度調査　遺構(一)
調査着手前，H=8.9mでの土塁痕跡平面（西から）
近代板組遺構SK01・02（東から），SK01検出状況（東から）
SK01東西土層（南から）
図版03　2007年度調査　遺構(二)
SK01内部板組（南から），SK01土層（東から）
SK02土層（東から），SK01杭1，SK01杭2，SK01杭3
SK01礫充填状況，SK02南北土層（北東から）
図版04　2007年度調査　遺構(三)
SK02杭1設置状況（北東から），SK02南壁（板・杭）
SK02東端土層（南西から）
SK02西壁・SK01 板敷（北東から），SK02北壁（板・杭）
SK02杭1，SK02杭5，SK02杭1抜取後状況
図版05　2007年度調査　遺構(四)
H=8.5ｍでの土塁痕跡平面（北半）
H=8.5ｍでの土塁痕跡（南西部）
土塁基底面直下の遺構・南壁土塁断面（北東から）
南壁東端土塁斜面部土層（土塁基底面まで 北から）
図版06　2007年度調査　遺構(五)
南壁西端土塁斜面部土層（土塁基底面まで 北から）
調査区北壁土塁断面(南西から)，乱杭跡検出状況(南から)
柱穴SK09断面(柱痕 南から)，柱穴P28底部に残る木杭根
図版07　2007年度調査　遺構(六)
南壁土塁断面（白線マーカーが基底部下面 北から）
調査区南壁中央土塁基底部のくぼみ断面（北から）
SK05断面・遺物出土状況(北から)，土坑SK04遺物出土状況
土坑SK11底面焼土・木炭，土坑SK06断面（北から）
SK18（右）・P40，SD01完掘状況（北から）
SD05完掘状況（北から）
図版08　2007年度調査　遺構(七)
くぼ地SX01（北から），くぼ地SX01底面木葉堆積状況
くぼ地SX01漆椀出土状況，くぼ地SX01笄出土（○印）
くぼ地SX01近景（北から）
図版09　2007年度調査　遺構(八)
調査区東壁土層断面（西から）
SX01・SK10重複部土層断面(南から)，SE01井戸完掘状況
SE01井戸土層断面（南から）
平安時代溝SD08（東から），くぼ地SX03（北から）
SE01上部で確認した掘り方（南から）
図版10　2007年度調査　遺構(九)
平安時代くぼ地SX02完掘状況（西から）
地山上面の水田痕跡（南東隅壁面 北西から）
南壁中央地山掘下げトレンチ土層
北壁地山掘下げトレンチ土層，地山上部に食い込んだ弥生土器
図版11　2007年度調査　遺物(一)　縄文土器・弥生土器・古代須恵器
図版12　2007年度調査　遺物(二)　古代土師器・かわらけ(中世土師器)
図版13　2007年度調査　遺物(三)　珠洲・中近世陶磁器・砥石・墨書土器
図版14　2007年度調査　遺物(四)　漆椀・笄
図版15　2008年度調査　遺構(一)　上層面全景(南東から)
石組水路ＳＤ１(北東から)
図版16　2008年度調査　遺構(二)　石組水路ＳＤ１(西から)
石組水路ＳＤ１西端部(東から)
石組水路ＳＤ１屈曲部(南から)
ＳＫ１遺物出土状況(東から)
図版17　2008年度調査　遺構(三)　下層面全景(南東から)
図版18　2008年度調査　遺構(四)　整地層検出状況(北東から)
整地層土層断面(南から)
整地層土層断面（南から）
ＳＫ２完掘状況（南から）
ＳＫ４完掘状況（南から）
ＳＫ６完掘状況（東から）
ＳＫ７完掘状況（南から）
火輪出土状況（南東から）
図版19　2008年度調査　遺物(一)　ＳＫ１出土遺物
図版20　2008年度調査　遺物(二)　ＳＫ６・ＳＫ７・ＳＤ１出土遺物
図版21　2008年度調査　遺物(三)　整地層掘り込み出土遺物(１)
図版22　2008年度調査　遺物(四)　整地層掘り込み出土遺物(２)
整地層・撹乱出土遺物，焼塩壺
図版23　2008年度調査　遺物(五)　包含層(上層面-下層面間) 出土遺物
図版24　2010年度調査　遺構(一)　Ａ区全景(西から)
Ａ区東壁土層断面（北西から）
図版25　2010年度調査　遺構(二)　Ｂ区全景(南東から)
Ｂ区ＳＫ５・６（南東から）
図版26　2010年度調査　遺構(三)　Ｃ区全景(西から)
Ｃ区東壁土層断面（北西から）
図版27　2010年度調査　遺構(四)　Ｃ区石積遺構ＳＸ１(北から)
Ｃ区石積遺構ＳＸ１(西から)
図版28　2010年度調査　遺物　出土遺物
図版29　2011年度調査　遺構(一)　調査区全景(東から)
北壁土層断面（南から）
図版30　2011年度調査　遺構(二)　南壁土層断面(北から)
西壁土層断面（東から）
図版31　2011年度調査　遺物　出土遺物

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

富山城跡は、平成５年３月発行の『富山市遺跡地図（改訂版）』に埋蔵文化財包蔵地として登載された。このときの包蔵地範囲は、現在の富山城址公園を中心とした本丸・西ノ丸・二ノ丸を含む約90,000㎡であったが、平成10年の文化庁通知における近世遺跡の取扱いを受け、平成12年４月に改訂した『富山市遺跡地図』で城下町主要部までを含む範囲に拡張した。その後、平成25・26年度の範囲変更で城下町を分離し、外堀で囲まれた本丸、西ノ丸、二ノ丸、三ノ丸、東出丸を「富山城跡」（市№.2010442）とした。現在の包蔵地面積は343,000㎡である。

富山城の旧本丸・西ノ丸にあたる富山城址公園は、昭和30年代に整備されたが、その後、施設の多くが老朽化し、樹木の生長等により大木が密植状態となるなど公園機能の低下が目立ちはじめた。富山市では公園機能の回復を目的に、平成10年度に「城址公園整備基本計画」を策定、平成13年度に基本設計がなされた。その後、中心市街地活性化の観点から観光拠点としての活用を図る機運が高まってきたことを踏まえ、平成16年に基本計画の見直し、基本設計が行われた。このなかで公園全体を大きく５つのゾーン（歴史・文化、芝生広場、お堀、親水広場、遊びの広場）に分け整備することが示された。平成17年度からは駐車場、石垣の解体修理など本格的な整備が実施された。平成19年度には最重要エリアである歴史・文化ゾーンに富山市のシンボル空間となる環境を創出する方針により、池泉や庭等を備えた現代和風庭園の整備、旧千歳御門の移築、石垣新設等の周辺整備をすることとなった。松川周辺エリアを除く、本丸・西ノ丸・南堀範囲は、平成26年度をもって一定の整備が完了した。松川周辺エリアは、平成24年度に「城址公園（松川周辺エリア）整備基本計画」が策定され、今後整備が予定されている。なお、以上の整備工事は、国土交通省の社会資本整備総合交付金を活用して実施されたものである。

整備工事との調整を図るため、埋蔵文化財センターでは平成14年度から城址公園の埋蔵文化財の所在状況を調べる試掘確認調査を実施した。その結果、地下駐車場がある本丸中央部を除くほぼ全域で比較的良好に遺跡が残存していることが明らかになった。また、試掘確認調査と並行して、平成14年度から20年度に本丸鉄門石垣・搦手石垣の測量調査を行った。これは、建設部公園緑地課において崩落の危険性がある石垣の解体修理が計画されたことに伴うものである。測量は地上型スキャン式レーザースキャナーを用いた三次元計測により、積み直しの際の立体的復元に対応できるようにした。試掘確認調査と石垣測量調査の成果は、『富山城跡試掘確認調査報告書』2004、同2006、同2007、同2008、同2009として刊行している。

試掘確認調査の結果を受け、整備工事を担当する公園緑地課と埋蔵文化財の保護措置について協議を重ねた。工事期間が長期に及び、計画の見直しもたびたび生じたことから、計画がおおよそ固まり次第、年度毎にその都度協議を行った。遺跡への影響が最小限となるよう工事計画を変更しつつ可能な限り遺跡の現状保存に努めたが、保存が不可能な箇所については発掘調査および工事立会による記録保存を行うこととなった。また、平成18・19年度に行った本丸鉄門石垣と搦手石垣の解体修理の際は、石垣内部の発掘調査と解体石材の調査を行った。

以上の発掘調査・工事立会は、公園緑地課からの依頼を受け、埋蔵文化財センターが行った。一部の調査は公園緑地課から民間発掘調査会社へ委託し、埋蔵文化財センターがその監理にあたった。

第２節　城址公園整備工事に伴う調査歴

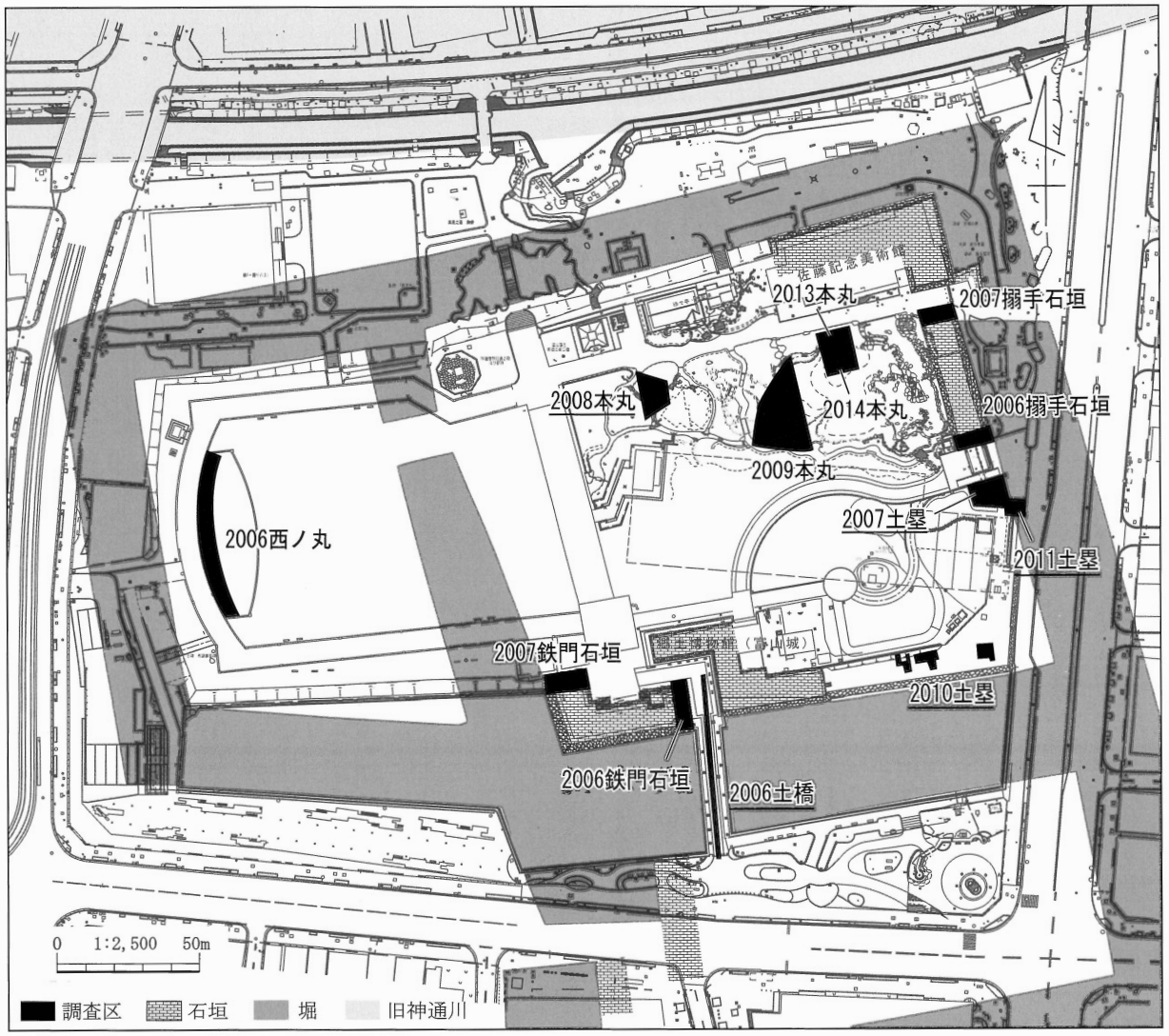
城址公園整備工事に伴う調査は第１図、第１表のとおりである。本書はこれらの調査のうち５調査区についての成果を収録する。

前節に記したとおり、整備工事に先立って平成 14 年度から城址公園全域を対象として試掘確認調査を実施した。また、郷土博物館増築計画に伴う試掘調査を平成 17 年度に、碌々亭移築に伴う試掘調査を平成 24 年度に実施している。

本格的な発掘調査・工事立会は平成 18 年度から行った。工事対象地は城域のうちの本丸・西ノ丸である。原則として対象地が面的な場合は発掘調査とし、管工事など掘削面積が狭小な場合は工事立会対応としたが、面的な対象地でも遺跡への影響が少ない場合や工事との関係で発掘調査対応が困難な場合には工事立会とした。対象とする時期は原則として近世以前であるが、特に重要なものや近世以前の遺構に絡んで存在するものについては近代以降も調査を行った。

平成 14(2002)～20(2008)年度　城址公園整備計画に伴う事前の試掘調査を継続的に行った。また、本丸石垣のレーザー測量を実施した。

平成 17（2005）年度　郷土博物館増築計画に伴う本丸天守台付近の試掘調査を行った。



第１図　城址公園整備工事に伴う調査位置図（発掘調査と主な工事立会のみ図示。下線は本書で報告する調査。）

平成 18（2006）年度　本丸鉄門西石垣東面、搦手南石垣南面の解体修理に伴い、石垣内部の発掘調査と解体築石の石材調査を行った。石材調査は、実測図作成・石割図作成等を行った。本丸土橋の電気管埋設工事に伴う立会（第 3 章）を実施した。また、本丸東部の千歳御門移設工事に伴う工事立会を行った。

平成 19（2007）年度　18 年度に続き石垣の解体修理に伴う鉄門西石垣北面、搦手南石垣北面の調査を実施した。また、本丸東辺土塁上に石垣を新設することに伴う発掘調査（第 4 章）を実施した。

平成 20（2008）年度　本丸北西部で池泉整備工事計画に伴う調査を実施した（第 5 章）。

平成 21（2009）年度　20 年度調査区の東側、本丸の北中部で池泉整備工事に伴う調査を行った。

平成 22（2010）年度　西ノ丸で管路掘削工事に伴い工事立会を実施した。また本丸南辺の土塁上において調査を実施した（第 6 章）。

平成 23（2011）年度　19 年度に新設した石垣の東側に新たに石垣を付設するための調査を行った（第 7 章）。

平成 24（2012）年度　本丸、西ノ丸において下水道埋設・側溝設置に伴う工事立会を行った。また、本丸北部において碌々亭移築に伴う試掘調査を実施した。

平成 25・26（2013・2014）年度　本丸北東部において池泉整備に伴う調査を行った。　（野垣）

第 1 表　城址公園整備工事に伴う調査一覧

調査年度	調査箇所	調査原因	調査区分	調査面積（㎡）	備考	報告書
2002	本丸、西ノ丸、本丸石垣	城址公園整備	試掘調査、石垣測量	—		富山城跡試掘確認調査報告書 2004・2007
2003	本丸、西ノ丸、本丸石垣	城址公園整備	試掘調査、石垣測量	—		富山城跡試掘確認調査報告書 2004・2007
2004	本丸、築堤、本丸石垣	城址公園整備	試掘調査、石垣測量	—		富山城跡試掘確認調査報告書 2006・2007
2005	西ノ丸	城址公園整備	試掘調査	—		富山城跡試掘確認調査報告書 2006
2005	本丸天守台周辺	郷土博物館増築計画	試掘調査	—		
2006	本丸、二ノ丸内堀	城址公園整備（堀改修）	工事立会	—		
2006	本丸北部	城址公園整備	試掘調査	—		
2006	本丸鉄門西石垣、搦手南石垣	城址公園整備（石垣解体修理）	工事立会、石垣石材調査	—		
2006	西ノ丸	城址公園整備（ステージ建設）	発掘調査	278		
2006	本丸	城址公園整備	試掘調査、石垣測量	—		富山城跡試掘確認調査報告書 2007
2006	本丸土橋	城址公園整備（電線管工事）	工事立会	—		本書
2006	本丸東辺土塁	千歳御門移築	工事立会	—		
2007	本丸鉄門西石垣、搦手南石垣	城址公園整備（石垣解体修理）	工事立会、石垣石材調査	—		
2007	本丸、築堤、本丸石垣	城址公園整備	試掘調査、石垣測量	—		富山城跡試掘確認調査報告書 2008
2007	本丸東辺土塁	城址公園整備（石垣新設）	発掘調査	112		本書
2008	本丸、本丸石垣	城址公園整備	試掘調査、石垣測量	—		富山城跡試掘確認調査報告書 2009
2008	本丸	城址公園整備（池泉整備）	発掘調査	118		本書
2009	本丸	城址公園整備（池泉整備）	発掘調査	370		
2010	西ノ丸	城址公園整備（下水管工事等）	工事立会	—		
2010	本丸南辺土塁	城址公園整備（石垣改修）	発掘調査	87		本書
2011	本丸東辺土塁	城址公園整備（石垣改修）	工事立会	—		
2011	本丸東辺土塁	城址公園整備（石垣新設）	発掘調査	25	㈱上智富山支店委託	本書
2012	本丸、西ノ丸	城址公園整備（電線管工事等）	工事立会	—	㈱エイ・テック委託	
2012	本丸	碌々亭移築	試掘調査	—		
2013	本丸	城址公園整備（池泉整備）	発掘調査	65.95	㈱イビソク北陸支店委託	
2014	本丸	城址公園整備（池泉整備）	発掘調査	64.22	㈱エイ・テック委託	
2014	本丸	城址公園整備（下水管工事等）	工事立会	—	㈱エイ・テック委託	

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

富山市は、2005年の市町村合併により、富山県の中央部から南東部まで県域の三分の一近くを占める広大な市域となった。北は富山湾、東は立山連峰、西は丘陵・山村地帯が連なり、南は岐阜県境に接して広大な森林が広がる。

富山城跡は、富山市北部の中心市街地に位置する。旧本丸、西ノ丸、二ノ丸は富山城址公園として整備され、公園内は博物館や美術館が建つほか、桜の名所等にもなり、市中心部における観光拠点となっている。旧三ノ丸、東出丸は明治期以降の開発により都市化が進み、現在地上に往時の面影はほとんど残っていない。

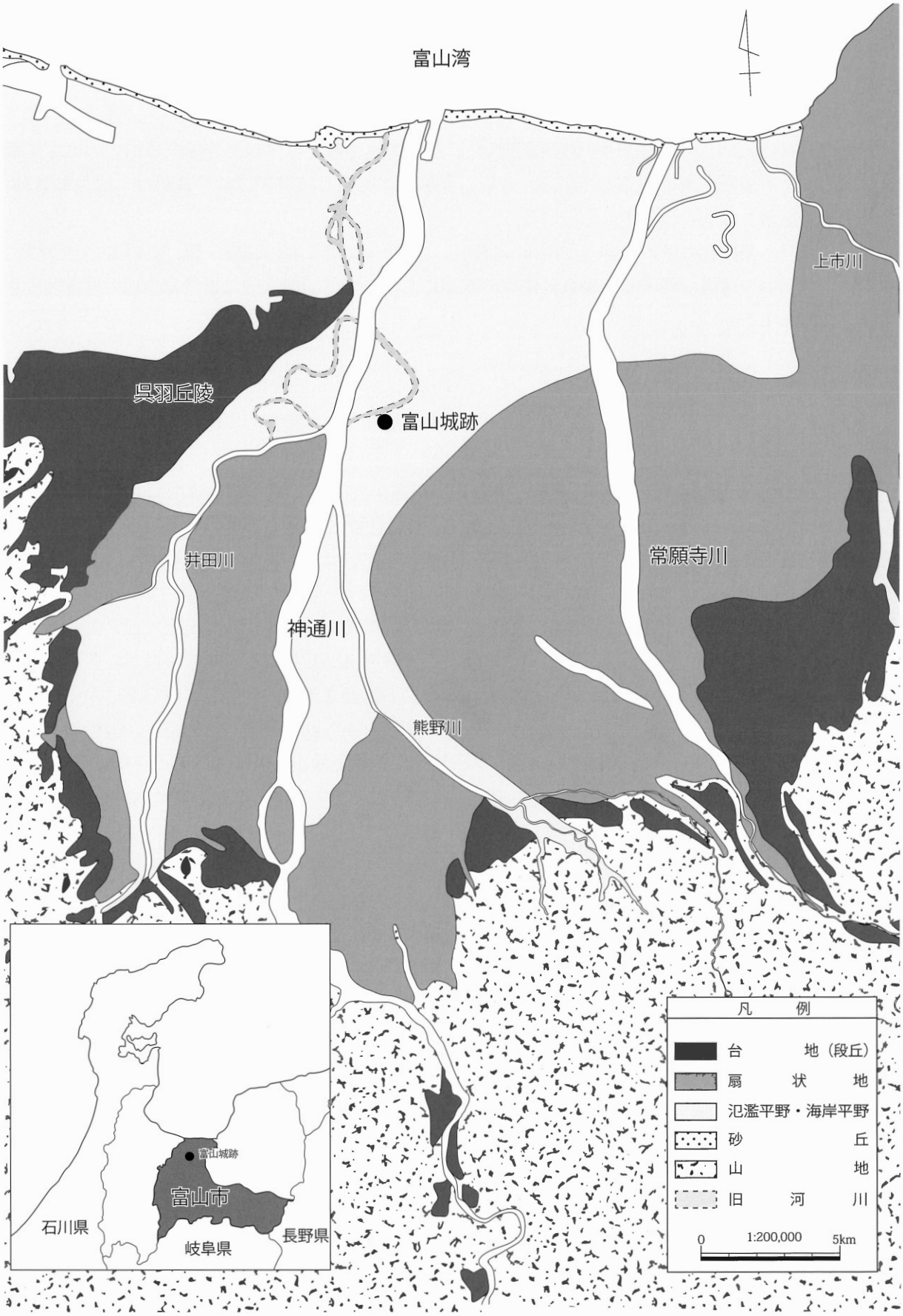
富山県の平野は、県域の中央を南北に延びる呉羽丘陵により東西に分けられ、それぞれ「呉東平野」、「呉西平野」と呼び慣らわされる。呉東平野は、さらに東から黒部平野、新川平野、中部平野に細分され、富山城跡がある富山市中心部はこのうちの中部平野に位置する。この中部平野を狭義の意味での富山平野と呼ぶ場合もある（新越中風土記刊行会 1978）。以下本書で、富山平野とする場合はこの狭義の意味で用いる。

富山平野は、東側は新川平野と接し、西側は呉羽丘陵で限られ、常願寺川、神通川からなる扇状地と氾濫平野が発達する。特に常願寺川は県南東部の山岳地帯に水源を持ち、上流には立山カルデラの大崩壊地があることから莫大な量の砂礫が供給され、広大な扇状地を形成する。急流河川で、流域はしばしば洪水被害に見舞われ、その被害は富山城下を含む市街地にも及んだ。富山城はこの常願寺川の扇端付近に位置している。立山連峰や常願寺川水系からの伏流水が、扇端に位置する富山城付近で豊富に湧き、周辺の発掘調査でも井戸を多く検出している。

一方、富山城は神通川右岸に位置し、歴史的に神通川との関係も深い。富山市街地以北は複数の旧流路が認められ、自然堤防が発達している。現在、神通川は富山城の西側をまっすぐに北流するが、江戸時代以前は蛇行し、富山城のすぐ北を湾曲して流れていた。洪水が頻繁に生じたことから、明治期から昭和初期にかけて流れを直線的に変える馳越工事が行われた。旧河道は廃川地となって埋め立てられ、県庁や富山市役所等が建つ市の中心部となった。旧河道は規模を縮小して、現在松川としてその名残をとどめている。富山城の東側は神通川の支流、鼬川が流れ、富山城は西・北を神通川、東を鼬川に囲まれた要害の地にあった。

また、富山城外堀跡の南を東西に延びる現在の平和通りは、江戸時代の北陸街道であり、富山城の南東で飛騨街道の起点と交わる。経済・交通面において越中の要である地点に富山城は位置している。

現在城址公園となっている本丸・西ノ丸は標高約10mの旧神通川の自然堤防上にあり、周囲の市街地から１～２m程度高い場所にある。これまで発掘成果から本丸北西部あたりが最も標高が高く、そこから西・南・東に向かって緩やかに下ることが判明している（富山市教委 2004・2009）。南側に位置する二ノ丸、三ノ丸、城下町はやや低い標高８～９mに展開する。三ノ丸、城下町の標高は、南よりも北、東よりも西が低い傾向があり、全体としては南東から北西に向かって低くなる（國香 1995）。立地環境に対応して、本丸・西ノ丸はしまりの強い砂礫質土からなり、南側の三ノ丸・城下町域は水分の多い粘質土・シルトを主体とする。



第２図　富山平野の地形分類図

第２節　歴史的環境

富山城・城下町周辺における歴史と発掘調査成果を概観する。

富山城・城下町の埋蔵文化財包蔵地については、外堀で囲まれた本丸・西ノ丸・二ノ丸・三ノ丸・東出丸を「富山城跡」、外堀南側の北陸街道沿いに並ぶ武家屋敷・町屋敷と外堀東辺沿いの武家屋敷を「富山城下町遺跡主要部」としている。また、築城前にあたる室町期以前の遺跡は「総曲輪遺跡」とし上記２遺跡とは別の包蔵地としている。

本節における発掘調査区の呼称（「2010a 調査区」など）は、第２表の調査一覧、第３図に対応する。中世富山城以前の遺構を検出した調査区位置の記述にあたっては、便宜的に近世富山城の曲輪名称を用いることとする。

(1) 室町時代以前の様相

近世富山城・城下町遺構面の下層から築城前の遺構・遺物を一部確認しており、築城前から集落形成があったことがわかる。

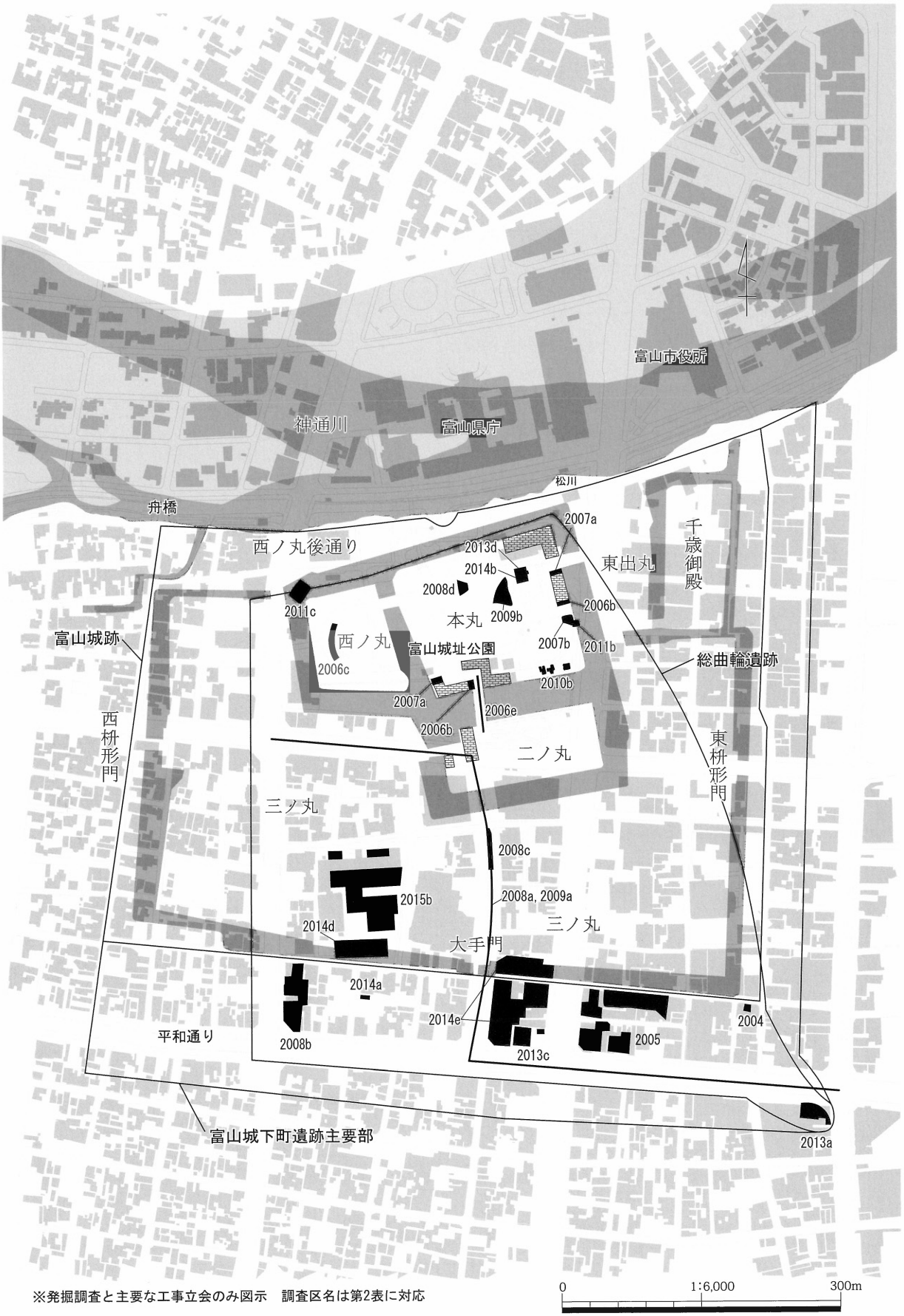
本丸では断片的ではあるが、縄文土器・弥生土器が採集・出土している。城址公園の旧西ノ丸の工事立会（2010a 調査区）では、「宅持」と墨書された奈良時代後期の須恵器が出土し、付近に官衙関連施設が存在した可能性がある。本丸東部の 2007b 調査では、土塁直下から刀装具（笄）や漆器椀、陶磁器が出土し、室町時代の武家居館に関わる遺構の存在が推測された（第４章）。さらにその下層では平安時代の湿地の存在が明らかになり、築城前の微地形が明らかになった。三ノ丸にあたる 2015b 調査区では、室町時代頃から富山藩政期までの遺構を検出した。室町時代後期から区画溝が形成されはじめ、同じ地割が中世富山城、近世富山城段階にも踏襲されていることが明らかになった。「吉見詮頼寄進状」にある室町期の「富山郷」にかかわる遺構とみられている。このほか、近世城下町にあたる外堀南東側の 2004 調査区ではで奈良・平安時代の遺構を検出している（富山市教委 2005）。

室町時代以前の遺構・遺物は、現在のところ点的な確認にとどまるが、当地が築城前から役所施設・荘園等が形成される重要な位置を占めていたことが推測できる。

(2) 中世富山城

中世富山城の概要　富山城は、越中守護代神保長職により築城されたのをはじまりとし、その時期は天文 12 年（1543）頃とみられている。ここから前田氏の居城となるまでのおよそ 60 年間を中世富山城と呼称する。中世富山城は、これまで城址公園から１kmほど南の星井町付近にあったとする説が有力であったが、2002 年度から行った城址公園整備に伴う試掘確認調査によって、中世富山城に関わる遺構が良好に残っていることが明らかになり、近世富山城と同じ場所に存在していたことがほぼ確実となった。

中世富山城は城主の入れ替わりが頻繁に生じた。神保長職は、富山平野南部の太田保への進出の足がかりとして富山城を築いたが、永禄３年（1560）に上杉謙信が神保長職を追い、富山城を攻略した。その後、反上杉勢力である一向一揆による占拠などがあったが、天正４年（1576）、謙信は一揆勢を富山周辺から排除し、越中全域をほぼ支配下におさめた。謙信の死後、織田信長勢力が越中への進出を強めた。その中心となったのが信長に仕える神保長住とその支援のため越中に派遣された佐々成政である。佐々成政は、本能寺の変後、豊臣秀吉から越中支配を認められたものの、後に徳川家康・織田信雄に味方するなどして秀吉と対立した。天正 13 年、佐々成政は秀吉に降伏し、富山城は破却さ



※発掘調査と主要な工事立会のみ図示　調査区名は第2表に対応

第３図　富山城・城下町の調査位置図

第２表　富山城・城下町における調査一覧

調査年度	調査箇所	調査原因	調査区分	調査面積（㎡）	主な文献
2004	城下町（総曲輪）	西町・総曲輪地区市街地再開発	発掘調査	130	富山城跡発掘調査概要2005
2005	城下町（一番町・総曲輪）	総曲輪通り南地区第一種市街地再開発	発掘調査	2,811	富山城跡発掘調査報告書2006
2006a	本丸、二ノ丸内堀	城址公園整備（堀改修）	工事立会	－	
2006b	本丸鉄門西石垣、搦手南石垣	城址公園整備（石垣解体修理）	工事立会、石垣石材調査	－	富山市の遺跡物語№8　2007
2006c	西ノ丸	城址公園整備（ステージ建設）	発掘調査	278	富山市の遺跡物語№8　2007
2006d	城下町（総曲輪）	グランドプラザ建設工事	工事立会	－	富山市の遺跡物語№9　2008
2006e	本丸土橋	城址公園整備（電線管工事）	工事立会	－	本書
2006f	本丸東辺土塁	千歳御門移築	工事立会	－	
2007a	本丸鉄門西石垣、搦手南石垣	城址公園整備（石垣解体修理）	工事立会、石垣石材調査	－	富山市の遺跡物語№9　2008
2007b	本丸東辺土塁	城址公園整備（石垣新設）	発掘調査	112	本書
2008a	二ノ丸、三ノ丸、城下町（一番町・越前町・総曲輪）	市内電車敷設工事	工事立会	－	富山城跡発掘調査報告書2009
2008b	城下町（旅籠町・総曲輪）	総曲輪四丁目・旅籠町地区優良建築物等整備	発掘調査	1,300	富山城跡発掘調査報告書2010
2008c	三ノ丸	市内電車敷設工事	発掘調査	187	富山城跡発掘調査報告書2009
2008d	本丸	城址公園整備（池泉整備）	発掘調査	118	本書
2009a	二ノ丸、三ノ丸、城下町（一番町・越前町・総曲輪）	市内電車敷設工事	工事立会	－	富山市の遺跡物語№11　2010
2009b	本丸	城址公園整備（池泉整備）	発掘調査	370	
2010a	西ノ丸	城址公園整備（下水管工事等）	工事立会	－	富山市の遺跡物語№12　2011
2010b	本丸南辺土塁	城址公園整備（石垣改修）	発掘調査	87	本書
2011a	本丸東辺土塁	城址公園整備（石垣改修）	工事立会	－	
2011b	本丸東辺土塁	城址公園整備（石垣新設）	発掘調査	25	本書
2011c	西ノ丸内堀	公共下水道松川処理分区雨水貯留施設工事	発掘調査	134	富山城跡発掘調査報告書2012
2012a	二ノ丸、三ノ丸、城下町	水道工事	工事立会	－	富山市の遺跡物語№14　2013
2012b	本丸、西ノ丸	城址公園整備（電線管工事等）	工事立会	－	
2013a	城下町（西町）	西町南地区市街地再開発	発掘調査	380	富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書2014a
2013b	二ノ丸、東出丸、二ノ丸内堀	水道工事	工事立会	－	富山市の遺跡物語№15　2014
2013c	城下町（一番町・総曲輪）	一番町共同ビル（仮称）新築工事	発掘調査	423	富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書2014b
2013d	本丸	城址公園整備（池泉整備）	発掘調査	66	
2014a	城下町（総曲輪）	レーベン富山総曲輪レジデンス建設	発掘調査	96	富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書2014c
2014b	本丸	城址公園整備（池泉整備）	発掘調査	64	富山市の遺跡物語№16　2015
2014c	本丸	城址公園整備（下水管工事等）	工事立会	－	富山市の遺跡物語№16　2015
2014d	三ノ丸外堀	旧総曲輪小学校跡地（第1期）	発掘調査	1,562	富山市の遺跡物語№16　2015
2014e	城下町（一番町・総曲輪）、三ノ丸外堀	総曲輪西地区第一種市街地再開発	発掘調査	3,960	富山城跡　富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書2015
2015a	三ノ丸	青葉幼稚園移転新築工事	工事立会	473	
2015b	三ノ丸	旧総曲輪小学校跡地（第2期）	発掘調査	3,565.5	富山市の遺跡物語№17　2016

れた。

発掘調査の成果　城址公園では、曲輪を東西に分ける堀が確認され、標高差から東側が主郭、西側が副郭と推定されている（富山市教委 2004）。また、これに直交する東西方向の薬研堀も検出している。こうした堀の配置から推定される縄張りは、近世富山城とは異なると推測されている。

このほか、本丸東部で土採り跡とみられる鍬先の凹凸面（富山市教委 2006a・2008）、北東部で井戸（富山市教委 2009）を検出した。西ノ丸では鍛冶遺構とみられる焼土が見つかり、周辺から羽口、鍛造剥片、鉄滓、土壁片が出土した。砥石や刃物の表面の仕上げに使う雲母も見つかり、研磨までの工程を行っていたことが推定できる（富山市教委 2004）。また、透彫銅製品もあり鋳造も行っていたことがわかる（富山市教委 2006a）。

三ノ丸では、2008c 調査で堀の可能性がある大規模な落ち込みを検出した（富山市教委 2010）ほか、2015b 調査で幅約 11.5 m、深さ 2.4 mの堀や区画溝を検出した。

城下町にあたる旅籠町では、2008b 調査区で 15 世紀後葉から 16 世紀後葉の溝・土坑を検出した（富山市教委 2010）。溝は直交し、中世富山城下町の区画溝の可能性がある。

中世富山城の遺構も部分的な確認にとどまり、城の全体構造を把握するまでに至っていない。

(3) 近世富山城

近世富山城の概要　慶長 2 年（1597）、前田利長が富山城に入城した。翌年家督相続のため金沢に移るが、慶長 10 年、隠居により再び富山城に戻った。このとき城と城下町の整備が行われ、近世城郭として整備された。ところが、慶長 14 年に大火で焼失し、その後は再建されず、元和元年（1615）、一国一城令により廃城となった。

寛永 16 年（1639）、加賀藩から 10 万石を分与され富山藩が成立する。初代藩主となった前田利次は、当初神通川対岸の百塚に新城を建設する予定であったが断念し、廃城となっていた富山城を居城にすることとなった。寛文元年（1661）から改修を行い、幕府から新たな天守のほか、櫓 3 ヶ所、櫓門 3 ヶ所などの新築が許可されたものの、最終的に天守や櫓は建てられず、櫓門も 1 ヶ所にとどまった。城下町は全体のおよそ 8 割にあたる範囲を囲郭し惣構を新設するとともに、東西に外町を置いて拡張した。また、神通川対岸の城の北側を通っていた北陸街道を城下に引き込み、南東部で飛騨街道と結節させた。慶長期に西側におかれていた大手は南側へ変更された。

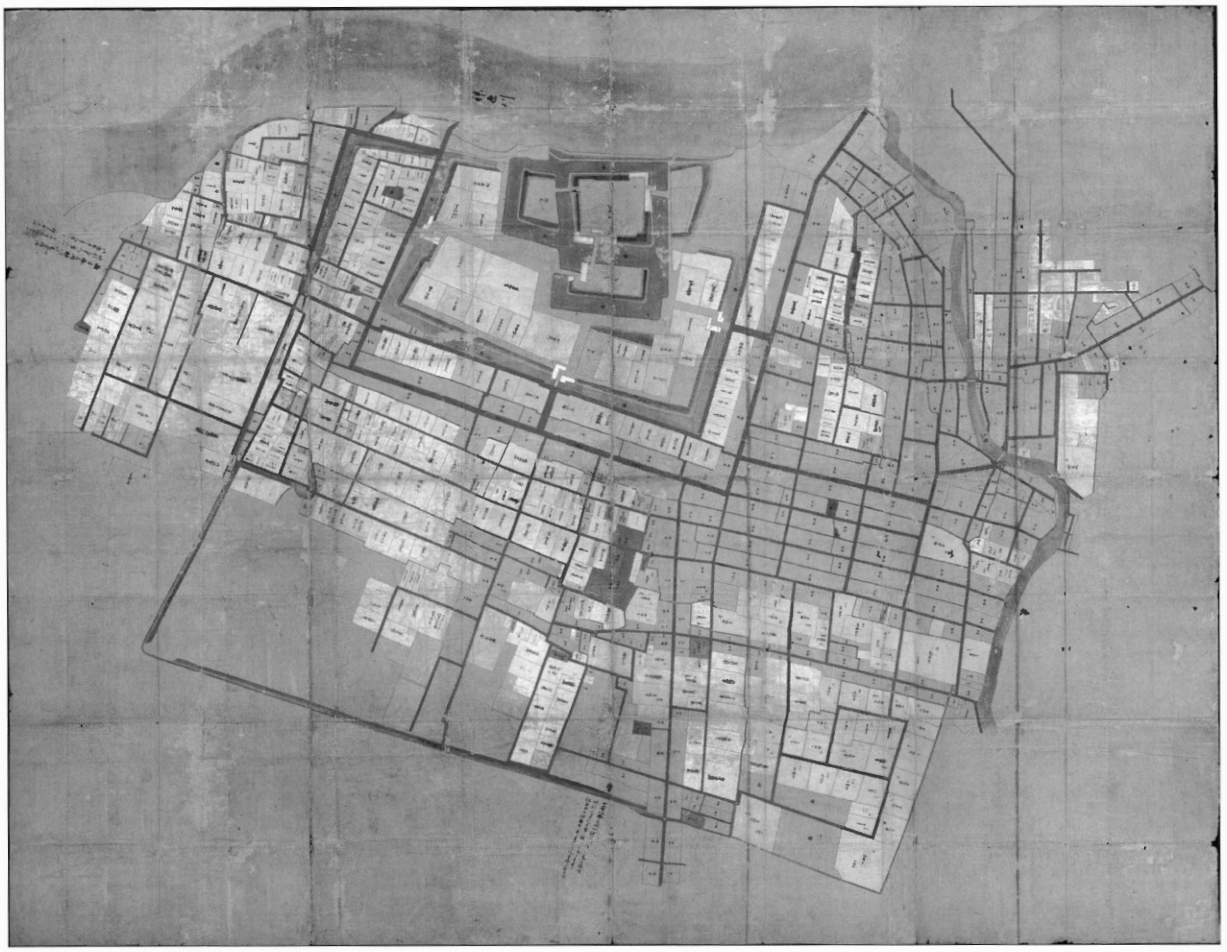
なお、寛文期以降の内郭（本丸・西ノ丸・二ノ丸）の縄張りは、絵図にみえる慶長期の内郭と規模が異なることなどから、承応 3 年（1654）の神通川氾濫に伴う修復で、方位をずらして造り直されたとする指摘がある（古川 2006）。

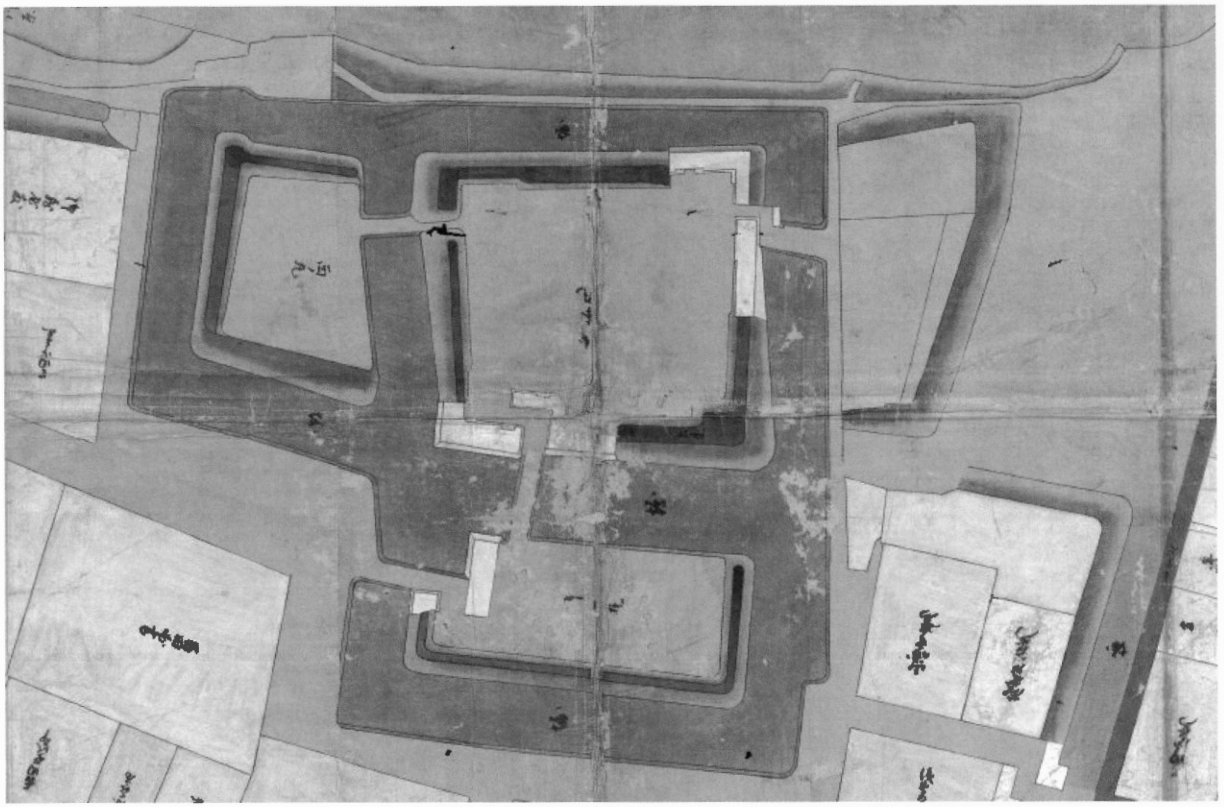
本丸・西ノ丸・二ノ丸・三ノ丸の発掘調査　近世富山城の構造については、城址公園整備や市街地再開発に伴う調査で多くの成果が得られている。

2002 年度から継続して行った城址公園整備に伴う本丸・西ノ丸の調査では、井戸・石組溝・廃棄土坑など多くの遺構が見つかった。2009b 調査では、寛文元年に建てられた本丸御殿の縁側に置かれた踏み石とみられる石材を確認した。また、本丸の鉄門石垣・搦手石垣の解体修理に伴う調査では石垣の内部構造等が明らかになった（2006b・2007a 調査）。

本丸土塁の調査（2007b・2010b・2011b 調査）では、40°前後の傾斜をもつことや盛土の構築方法が明らかになった（第 4・6・7 章）。

西ノ丸内堀で行った雨水貯留施設設置に伴う 2011c 調査では、現地表面から約 5.8m 下で堀底を確認した（富山市教委 2012）。





第４図　万治年間富山旧市街図（上：全体、下：内郭部分）（富山県立図書館蔵）

二ノ丸・三ノ丸は、2008・2009年度の路面電車敷設工事に伴う発掘調査・工事立会の成果がある。二ノ丸二階櫓門や三ノ丸大手門では地下に遺存した石垣が検出され、位置や規模が判明した（富山市教委・富山市路面電車推進室2009）。また、三ノ丸南辺の外堀の調査（2014d）では、深さ約5ｍで二段掘りとなる構造が明らかになった。

城下町の発掘調査　民間開発に伴う発掘調査が近年相次ぎ、旧北陸街道沿いを中心とする城下町主要部の様相が明らかになっている。

一番町の2005調査では、19世紀前半から幕末期を中心とする背割下水、廃棄土坑、井戸等を検出した（富山市教委2006b）。背割下水は、素掘りから石組みへ造り替えられ、流水方向も変えるなどの変遷が明らかになった。背割下水北側の惣曲輪の武家屋敷地は、絵図との照合から家老クラスの「戸田式部屋敷」と判明した。廃棄土坑から大量の木製品や陶磁器とともに、絵図との記載を裏付ける「戸田式部」と書かれた木札が出土している。背割下水南側の町屋敷では、幕末期の鞴羽口や鍛冶滓が多く出土し、小鍛冶を行っていたことが明らかになった。同じ一番町地内の2013c調査でも良好な状態で背割下水を検出し、3時期の変遷があることを確認した（富山市教委2014b）。旅籠町地内の2008b調査区で検出した背割下水は、上下2層で造り替えが行われていた（富山市教委2010）。背割下水北側の惣曲輪の武家屋敷地側は、井戸や土坑が密集しており、裏庭に相当すると考えられている。町屋敷側は、密度の高い遺構が複雑に切り合う状況が認められた。18世紀後葉以降が主体である。

外堀南東沿いの2004調査では、1640～50年代の井戸・溝と1663～90年代の井戸・溝・廃棄土坑を確認した。絵図との対比から、前者の遺構は町屋敷に伴い、後者は惣曲輪の岩田宇兵衛屋敷の遺構とみられている（富山市教委2005）。

北陸街道南側に位置する2013a調査区では、町屋敷の井戸・便所等の遺構を検出した。建物跡の検出がなかったことから庭にあたると考えられる。また、木製品の素材や端材が大量に出土し、付近に木材加工場が存在したことが推測されている（富山市教委・西町南地区市街地再開発組合2014a）。

(4) 近代以降の富山城

近代以降の富山城の概要　明治4年（1871）の廃藩置県により旧藩庁（本丸御殿）に富山県庁が置かれた。明治6年（1873）には明治政府から廃城令が出され、富山城は廃城となった。同19年に浄土真宗門徒の奉仕により外堀の一部が埋め立てられた。さらに、戦後にかけて他の堀の埋め立てや土塁の取り壊しも進み、城址公園となった本丸と西ノ丸を除いて市街地化が進んだ。2014d調査では、外堀の埋土から、明治16年に解体された二ノ丸二階櫓門石垣の石材58石が出土した。

昭和29年（1954）の富山産業大博覧会の際、犬山城や彦根城を参考に本丸石垣上に模擬天守が建設された。博覧会終了後、模擬天守は郷土博物館として開館し、以来中心市街地のランドマークとして市民に親しまれている。平成16年（2004）には国登録有形文化財に登録された。

発掘調査の成果　近代以降の遺構は原則として調査対象としていないが、重要と判断されたものについて一部調査を実施している。

城址公園整備に伴う西ノ丸の2010a調査では、明治42年に建築された県会議事堂の基礎にあたるレンガ遺構を検出した。歴史的公共建築物がほとんど残っていない富山城周辺において貴重な近代化遺産である。また、前述した城下町の背割水路は、近代に造り直され、昭和初期まで存続していたことが判明している（富山市教委2014b）。　（野垣）

第３章　2006年度工事立会（本丸土橋）

第１節　調査の方法

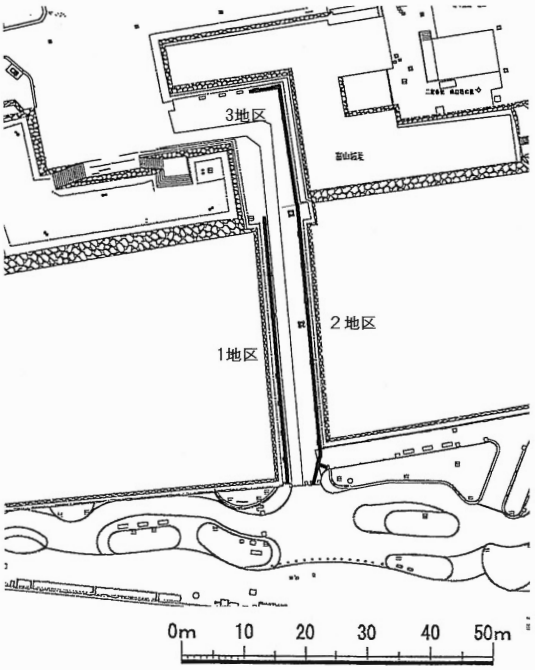
本調査区は、二ノ丸と本丸鉄門石垣を結ぶ土橋の照明塔設置及び地中電線埋設工事に伴い、工事立会を行ったものである。工事は公園緑地課が発注し、株式会社光地園が受託した。

立会は、3箇所について1地区から順次行い、工事により掘削を受ける幅80cm、深度地表下約60cm迄立会いながら掘削を行い、遺構面ごとに記録を行った。電線埋設の掘削総延長は113m、期間は、2007年1月17日から1月29日のうち6日を要した。

第２節　遺　構

（1）１，２地区

土橋の南端から石垣南端付近まで、43.5ｍについて、中央の通路をはさんだ両側に掘削溝が掘られた。西側を1地区、東側を2地区とした。内堀部分の通路面は攪乱を大きく受けており、部分的な通路面の確認にとどまった。叩き締めて硬化した砂礫層の水平な上面が通路面である。一部深く掘った土橋南部各地点では、GL－25cm、－40cm、－70cm、－110cm～100cmで硬化面を検出し、4面を確認した。南端から北へ10m地点2地区では、GL－15cm、－55cm、－70cm、－85cmで、厚さ2～5cmの4面を確認した。2地区中央北寄りでは、GL－5cm、－23cm、－42～50cmの3面を確認した。



第５図　2006年度工事立会位置図(1:1,200)

次項の3地区で6面の硬化面を確認していることからみて、1,2地区では情報の欠落がみられる。

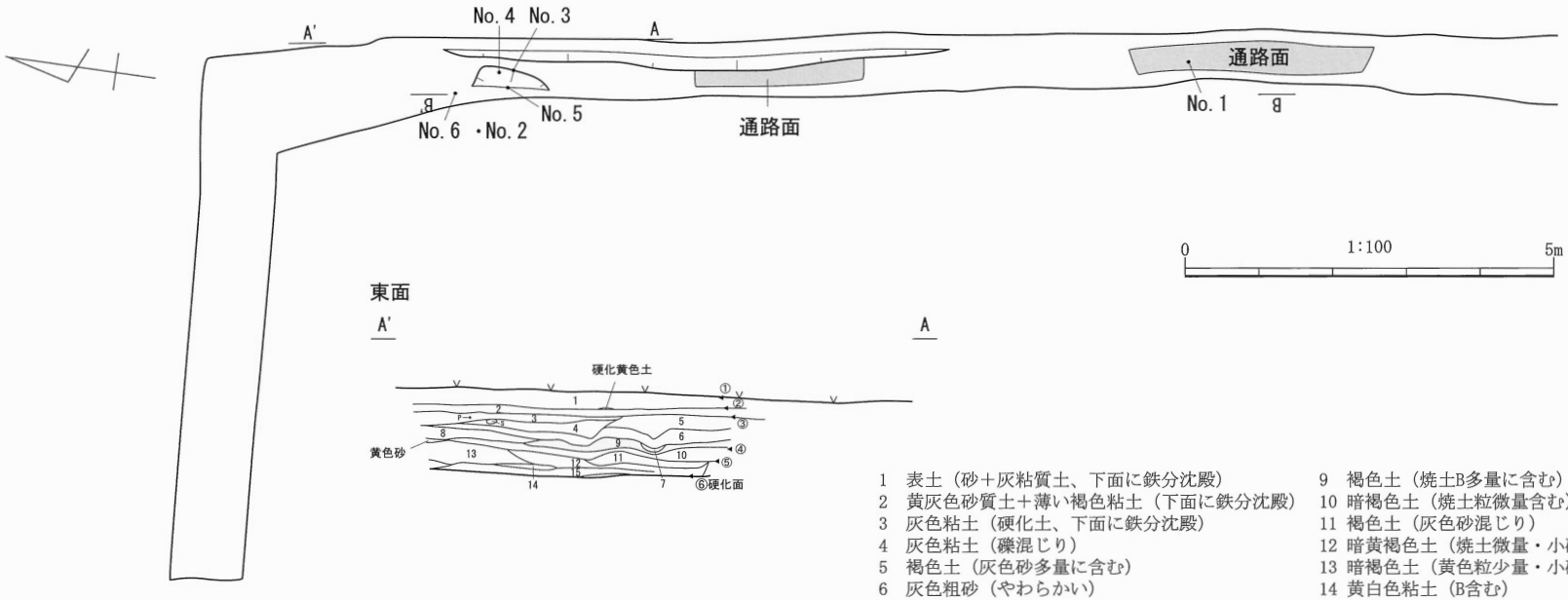
（2）３地区

石垣通路部分を3地区とした。鉄門東石垣南端から石垣前1.5ｍ付近を、北に20ｍ、そこで90度西に折れ、約6ｍ迄掘削工事立会を行った。それ以西は攪乱が著しかったため調査を行わなかった。

この地点は土橋通路のうち最も良好に遺構が残っていた（第4図）。現在通路面を含め、明治以降に3面の通路面、そしてその下に間層を介し、下に江戸時代と推定される通路面3面、計6面の通路面を確認した。通路面はいずれも砂礫を締めたもので、上面に水平な硬化面を形成する。よってこの土端通路においては江戸期以降6回以上にわたり、嵩上げを伴う通路面の改修が行われたことがわかる。間層には焼土や木炭を含む土層が存在する場所があり、城郭内部の火災後の普請に伴う造成と理解されるものの、特定の火災との同定は困難である。

1・2地区と3地区の路面の同一性の比較はただちにはできないが、3地区における硬化面の連続層準からみると、北から南方向に緩やかに傾斜しており、各期の勾配は現状とほぼ同じであった。

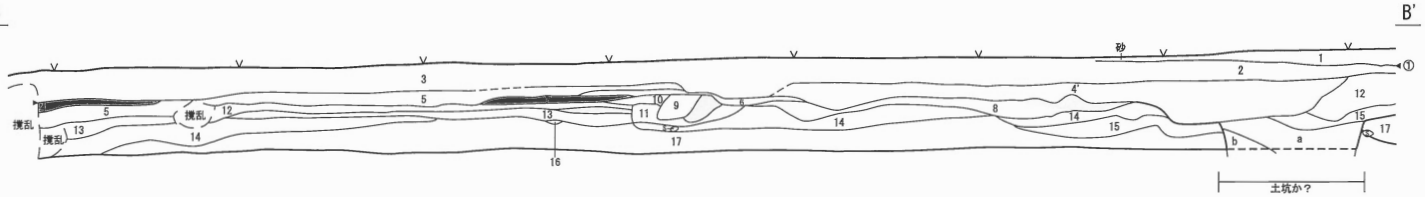
なお、本丸搦手外枡形土橋通路の石垣縁試掘調査（2006年18-3Ｔ）では、地表下2.3ｍに最初期通路面が確認されており〔富山市教委2007〕、本調査区においても地下60ｃｍより深い場所に複数の通路面の存在が推測できる。



東面

1 表土（砂＋灰粘質土、下面に鉄分沈殿）
2 黄灰色砂質土＋薄い褐色粘土（下面に鉄分沈殿）
3 灰色粘土（硬化土、下面に鉄分沈殿）
4 灰色粘土（礫混じり）
5 褐色土（灰色砂多量に含む）
6 灰色粗砂（やわらかい）
7 黄灰色砂
8 暗褐色土（焼土微量含む）
9 褐色土（焼土B多量に含む）
10 暗褐色土（焼土粒微量含む）
11 褐色土（灰色砂混じり）
12 暗黄褐色土（焼土微量・小礫含む）
13 暗褐色土（黄色粒少量・小礫多量に含む）
14 黄白色粘土（B含む）
15 暗黄色砂質土

西面



1 バラス（現代）
2 黄灰褐色粘土
3 砂利
4 灰色粘土（かたい、鉄分多量に含む、上面硬化）
4' 灰褐色粘質土（ややかたい、小礫混じり）
5 灰色粘土＋黄色粘土
6 暗褐色土（焼土少量含む）
7 黄褐色細砂＋灰色粘土（硬化、上面が路面）
8 暗褐色土（焼土B多量に含む）
9 黄灰色粗砂
10 灰色粘土（小礫含む）
11 暗褐色土（焼土B少量混じる）
12 黄灰色粗砂土
13 暗褐色土（焼土少量含む）
14 灰黄色粗砂土（焼土・木炭少量含む、小礫含む）
15 暗褐色土（粗砂、焼土含む、小礫多量に含む）
16 黄色砂（中粒砂含む）
17 灰黄色粗砂＋小礫・中礫（粘性あり）
SK？
a 暗褐色土（焼土B少量含む）
b 細かい砂
通路面・硬化土

0 1:60 2m

第６図　2006年度調査区平面図・断面図

第3節　遺　物

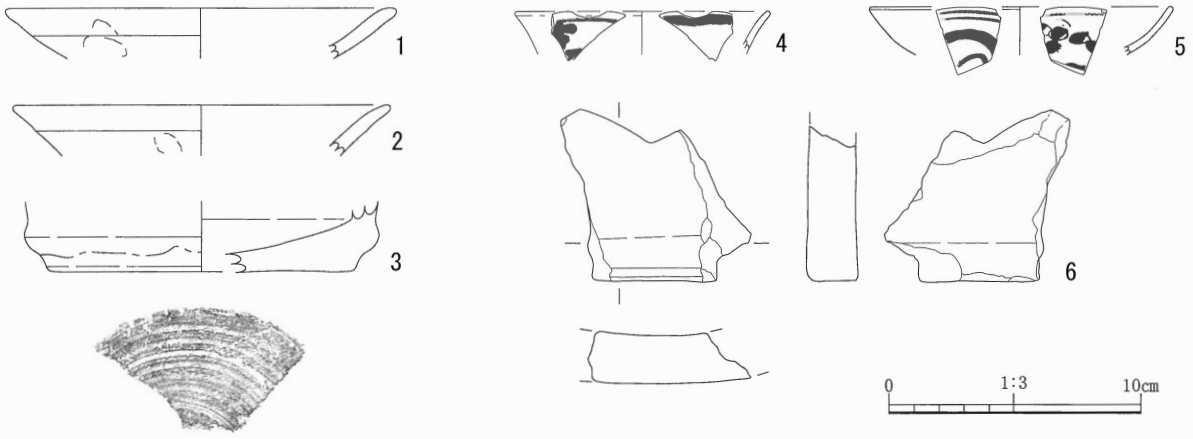
かわらけ・磁器・瓦がある（第7図、第3表）。

かわらけ　1, 2は口縁端部が丸くやや外反気味である。体部に指頭圧痕がある。富山城本丸出土C種〔富山市教委 2004〕としたもの。

越中瀬戸　3は建水様の筒形品の平底である。体部下半はロクロ整形の凹凸が大きい。体部外面は灰釉、底部は露胎である。

伊万里　4は染付碗で、口縁端は短く外反する。外面に植物をモチーフとした抽象文様を描く。5は染付皿で、外面に唐草文、内面に蔓文とみられる文様を描く。同一個体かどうか不明だが、底部破片の見込に麒麟もしくは馬とみられる四足動物の前足部分の染付文様を描くものがある。

平瓦　6は硬質の燻し瓦である。幕末頃の桟瓦の平瓦部とみられる。



第7図　2006年度調査出土遺物

第3表　2006年度調査遺物観察表

番号	種類	器種	法量（cm）			胎土	焼成	釉薬	色調		成形・調整		特記事項
			口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）				釉	胎土	内面	外面	
1	かわらけ	皿	(15.0)	－	(2.0)	良	良	－	－	浅黄橙 7.5YR8/4	ヨコナデ	ヨコナデ	端部やや外反
2	かわらけ	皿	(14.8)	－	(2.0)	良	良	－	－	にぶい黄橙 10YR7/4	ヨコナデ	ヨコナデ　ナデ	端部やや外反
3	越中瀬戸	建水？	－	(12.0)	(2.8)	良	良	灰釉	オリーブ黄 5Y6/3	浅黄 2.5Y7/3	ロクロナデ	ロクロナデ 回転糸切痕	香炉・匣鉢か
4	伊万里	染付碗	(10.0)	－	(1.7)	良	良	－	－	灰白 N8/	ロクロナデ	ロクロナデ 染付文様	外面：唐草文、内面：蔓文か？ 他に麒麟もしくは馬の絵の破片あり
5	伊万里	染付皿	(12.0)	－	(1.9)	良	良	－	－	灰白 N8/	ナデ	ナデ	外面：植物をモチーフとした抽象文か
6	燻し瓦	平瓦	縦 (6.2)	横 (2.1)	厚さ 2.0	良	硬質	－	淡黒	淡黒	ナデ	ナデ	桟瓦の平瓦部か

第4節　小　結

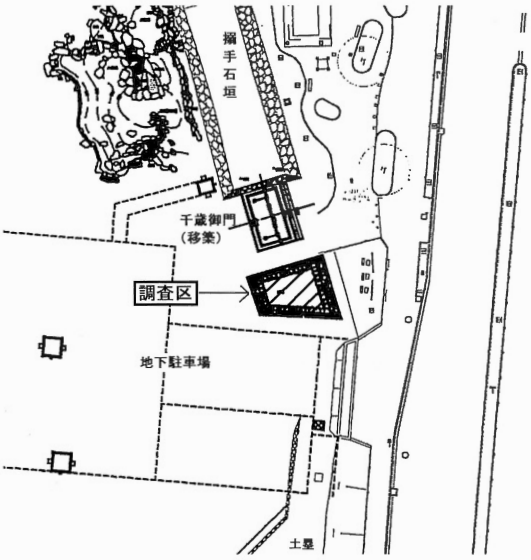
本丸土橋は、慶長10年前田利長による築城以降継続して存在したとみられる通路である。土橋に関する史料としては、安政5年（1858）年の飛越大地震に伴う地割れ、噴砂が生じていたことが『地水見聞録』により知られる。近代初期において土橋東西両斜面が垂直な玉石積石垣に改修されたが、その年代は不明である。明治中期頃撮影の古写真ではすでに玉石積となっている。

調査では、土橋通路面とみられる硬化面が各地点で認められた。3地区では近代の通路面3面、江戸期3面を確認した。江戸期の各年代は特定できないが、頻繁な修理が行われたと理解される。

第４章　2007年度調査（本丸東辺土塁）

第１節　調査の方法

本調査区は、千歳御門（市指定建造物）移築に伴い、門南側に修景のために模造石垣を新設する工事が計画されたため、発掘調査を実施することになったものである。ここは本丸東辺の中央付近で、北側に存在する搦手石垣から続く土塁が存在していた部分である。



第８図　2007年度調査区位置図(1:1,000)

石垣整備工事は2006年度に計画が立案され、2007年７月工事発注担当の市公園緑地課・設計コンサル・埋蔵文化財センターで協議を行った。石垣基礎工事は標高7.7ｍ以下に及ぶため、周辺の試掘結果で検出されている遺跡地山面以下に工事が及ぶことが予想された。このため、発掘調査を行い記録保存措置を講じることとした。調査着手前には公園緑地課において公園施設（樹木・石積・トイレ）の撤去を行った。調査範囲の南限は、市営地下駐車場工事で損壊した部分の手前までとした。他の三方は石垣基底部の外周から50ｃｍ外側に設定した。調査は公園緑地課が発注し、株式会社アールタチバナが受託した。現地調査は古川知明、伊集守道が担当した。

現地調査期間は、2007年10月16日から11月27日である。小型バックホウにより表土・攪乱土を除去後、人力で遺構検出・遺構掘削を行った。土塁構成土の掘削、及び室町期地山の一部は、小型バックホウで掘削し、遺物出土の確認を行いながら掘り下げた。室町期の遺構の完掘段階に至った11月23日に現地説明会を実施し、120人が参加した。その後平安期の窪地の完掘をもって調査を完了した。

なお、調査後に築造された模造石垣は、アンカー式空石積工法により、高さ６ｍ、天端東西幅8.8ｍ、基底部東西幅12.45ｍ、天端南北長最大8.5ｍ、基底部最大11.6ｍである。石積は、本丸石垣の大部分で見られる割石積とし、石材は江戸期石垣の丁場と同じ富山県東部の早月川上流部から調達したものである。工事は佐藤工業株式会社北陸支店が請負い、石積は中村石材工業株式会社（本社大阪市）が実施した。

現地説明会

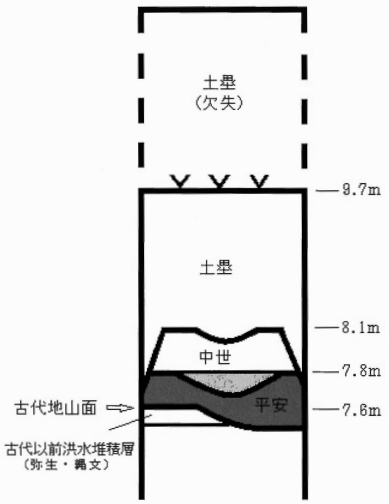
第２節　基本層序

調査区は、前述のとおり、富山藩期において土塁が築造されていたため、標高約 8.0 m付近より上は土塁構築土、それ以下が中世以前の堆積土に大別される（第９図）。

調査区北部では標高 7.4 m前後で安定した水平地山が構築されており、これが古代面の地山である。調査区南部で同レベルでは湿地環境となっており、やや異なる。湿地基底面の自然堆積層の最下面は、標高 7.3 mである。

土塁基底面は古代からのくぼ地の影響を受けたと思われ、その部分が浅く陥没している。この間中世期の遺構もその地質的影響を受けて陥没し、中世１期ではそこにゴミ廃棄を行っている。上層ほど陥没の度合いは小さくなる。

古代の地山は、表層部に縄文土器・弥生土器を包含している。このことから、古代地山は、弥生後期以降平安前期以前に発生した神通川洪水によって、付近の集落遺跡が破壊され再堆積した場所が安定化し、９世紀以降に人々が再び集落を形成した。



第９図　基本層序概念図

第３節　遺　構

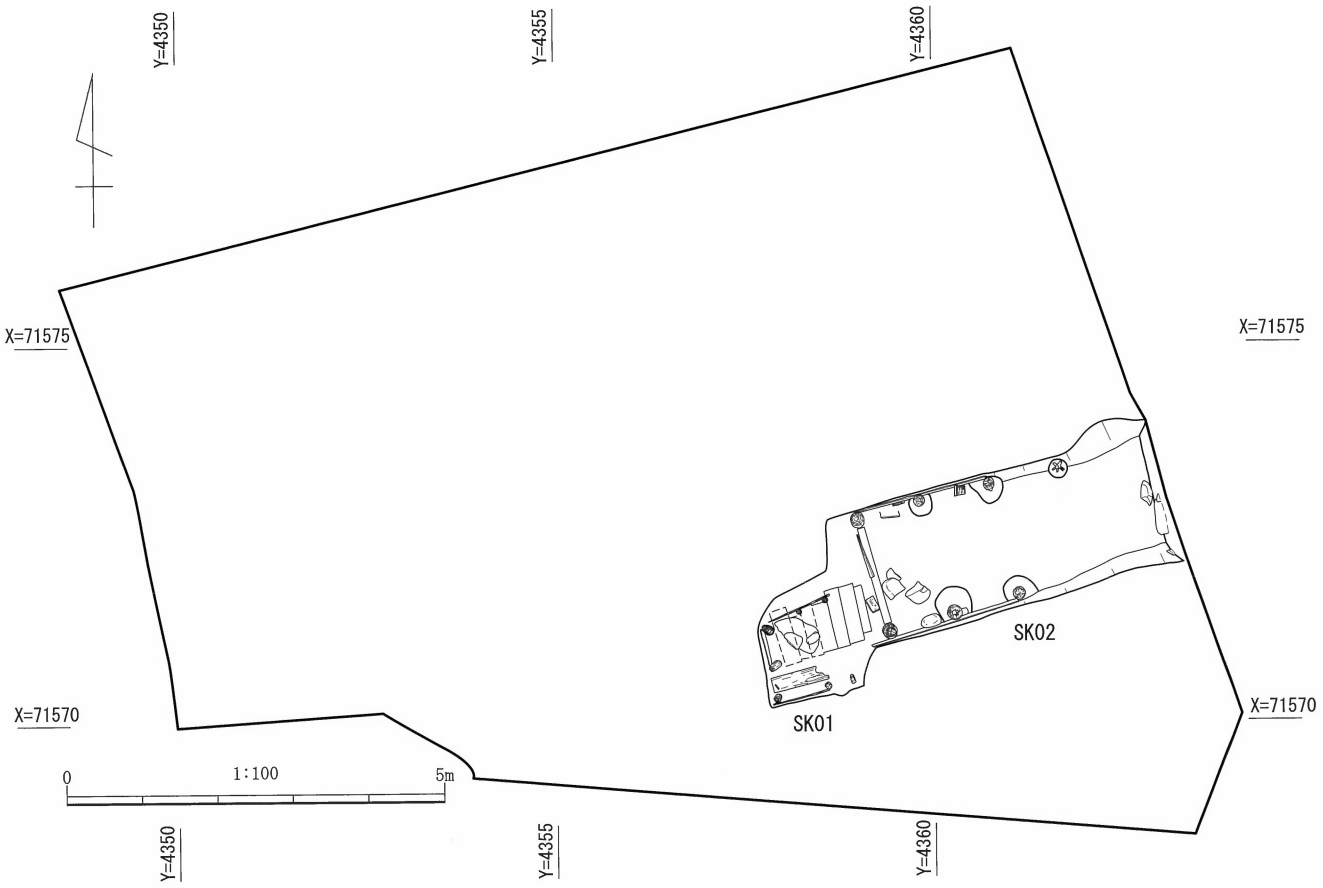
発掘調査区は全体が富山藩期土塁の残存部である。土塁内部には近代に掘り込まれた遺構が存在する。土塁下には中世以前の遺構が残っていた。これらは概ね５期に区分され、４面の遺構面として把握できる。ここでは年代の新しいものから説明を行う。

（1）　近代（第 10 図）

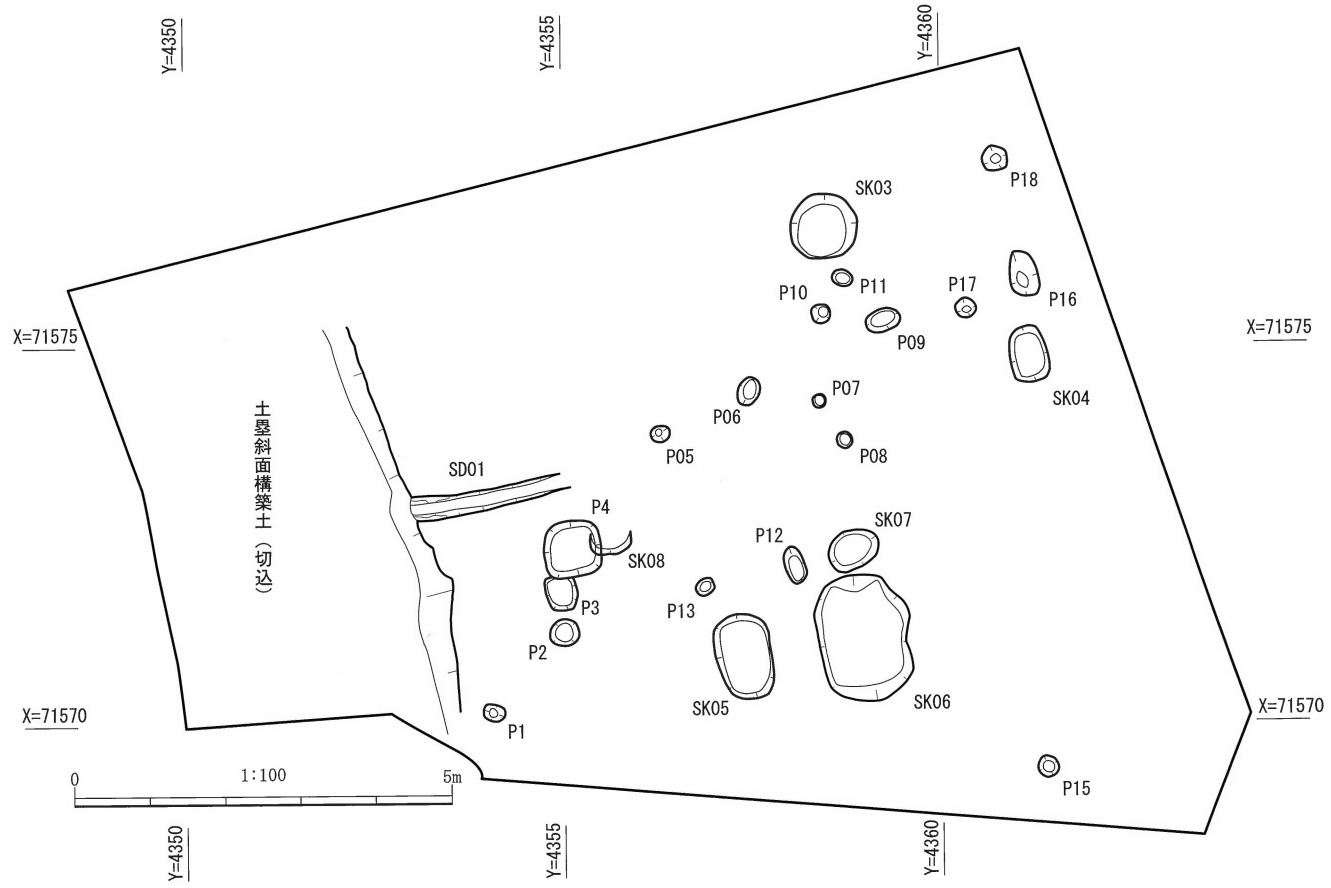
富山藩期土塁の中に板組遺構２基が構築されていた。

ＳＫ01（第 17 図）　調査区東部において検出した。東側がＳＫ 02 と重複する。方形の掘り方をもち、その規模は東西 150 ㎝、南北 160 ㎝で、北壁は斜め広がる。深さは検出面から 60 ㎝である。内側は、北･西･南の三面を板張とし､その内側に木杭を打ち留めている。板材内側による施設規模は､南北 1.05 ～ 1.25 m、東西は、東の敷板端まで 1.4 mである。壁板材は各辺３尺長の横板３枚によるが、西面･南面では２枚が剥された。杭は径８～ 12 ㎝の計７本で、先端を尖らせて隅角と辺中央に打ち込んでいる。床面には、板材を敷き詰めている。北側は短い板材を南北方向に計７枚、南側は長い板材を東西方向に置いたが１枚のみ残存していた。杭材はヒノキ・マツ・スギ・広葉樹・カラマツまたはトウヒ属の種類があり、マツが多い。板材はスギ・マツ材が用いられた。遺構内部には、ガラス破片・いぶし瓦片・軟質施釉陶器・蓄電池とみられる金属加工品のほか、60 ㎝を超える大きな割玉石が投げ込まれていた。廃絶時に入れたものとみられる。

ＳＫ 02（第 17 図）　ＳＫ 01 の東に接して、東西方向に長い長方形の掘り方を持つ。主軸はN-73°-E である。東側は調査区東壁面まで検出したが､さらに東へ続いている。規模は､東西 4.4 m以上、南北 1,8 ～ 2.0 m、深さ 75 ㎝である。内壁には、ＳＫ 01 と同様、横板張が認められた。この板壁



第 10 図　2007 年度調査区遺構平面図（１）近代



第 11 図　2007 年度調査区遺構平面図（２）中世２期

が存在するのは、全体の西半分の範囲である。北面においては4枚が確認された。板材は1間以上の長尺板を用いている。西辺のみ135㎝の短い板である。杭は北壁と南壁の壁板を留めるように約90㎝間隔で3本づつ立つ。北壁のみさらに90㎝東に1本が加わり4本である。杭材は径15～20㎝で、ＳＫ01より太い。また底面は平坦に加工され、杭というより柱形状である。これを立てるに当たり、径40～50㎝、深さ40㎝の大きな掘り方を掘り、柱を立てて埋め戻している。中には中礫を入れ高さを調整した柱もある。柱材下部は黒くなっているものがあり、腐食防止に焼きが入れられたとみられる。柱材は、スギ・マツ・カラマツまたはトウヒ属、板材はマツである。底面に床板はない、床面は叩き土間で、水平である。

内部からは伊万里・曲物片のほか、古代から近世の陶磁器片が出土した。これは廃絶後土塁の土が埋めるために用いられ、混入したものである。

（2）富山藩期

土塁築造土を検出した。

土塁（第14図）　土塁上部は城址公園工事等で削り取られ失われていた。残存部分は、土塁基底部から高さ約1.7ｍ分のみである。

調査区南壁土層断面において、土塁の全体構造が把握できた。概観すると、土塁内部となる中央部分においては、概ね水平堆積が見られる。その東西側は、土塁斜面部の斜めの土層である。

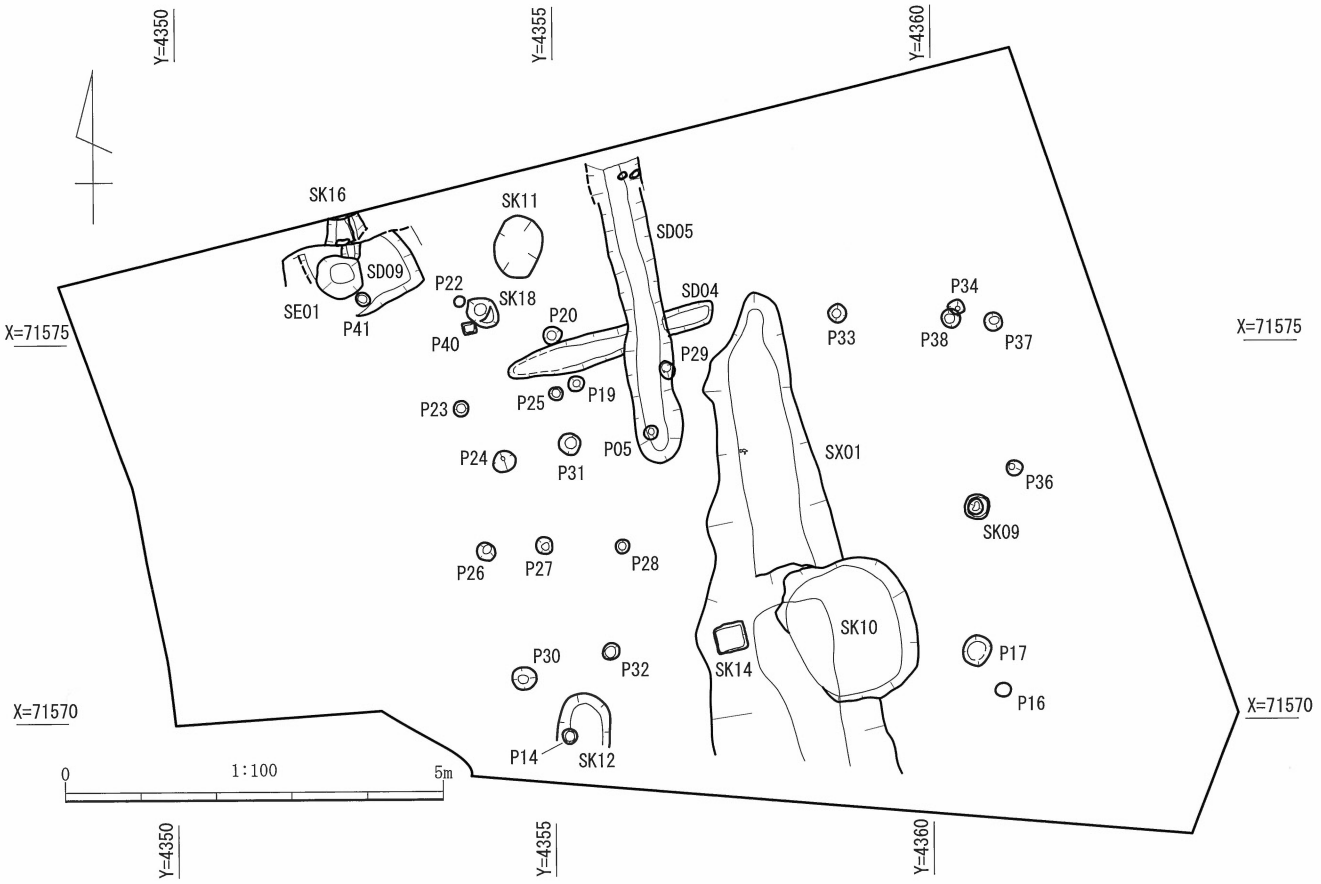
基底部は、中世2期の遺物包含層より上部の堆積土を削り取り、その上に1ｍ程の盛土を行った。基底部の盛土は55層～113層である。西側では10層以上の薄い盛土を水平に累積しており、典型的な版築技法による。中央部は西側の版築部へ重ねるようにして構築しており、作業はやや大ぶりとなる部分も見られる。東側では2層程度の厚い層堆積によっている。基底部の上部にあたる109層～112層は、基底部下の中世2期のくぼ地ＳＸ01の影響を受けて、その上部にあたる部分がくぼんだ形状を示す。このくぼみは104層～107層により修正が行われている。上部においては所々に薄い酸化鉄層が形成されており（70層上面、84層上面、97層上面など）、水締めの結果と推測される。

基底部の上にある水平部は、34層～54層である。概ね西から東に向かって斜めに下がっており、西側からの土砂搬入により築造が進んだとみられる。基底部同様、東部においては、厚い土層堆積としている。

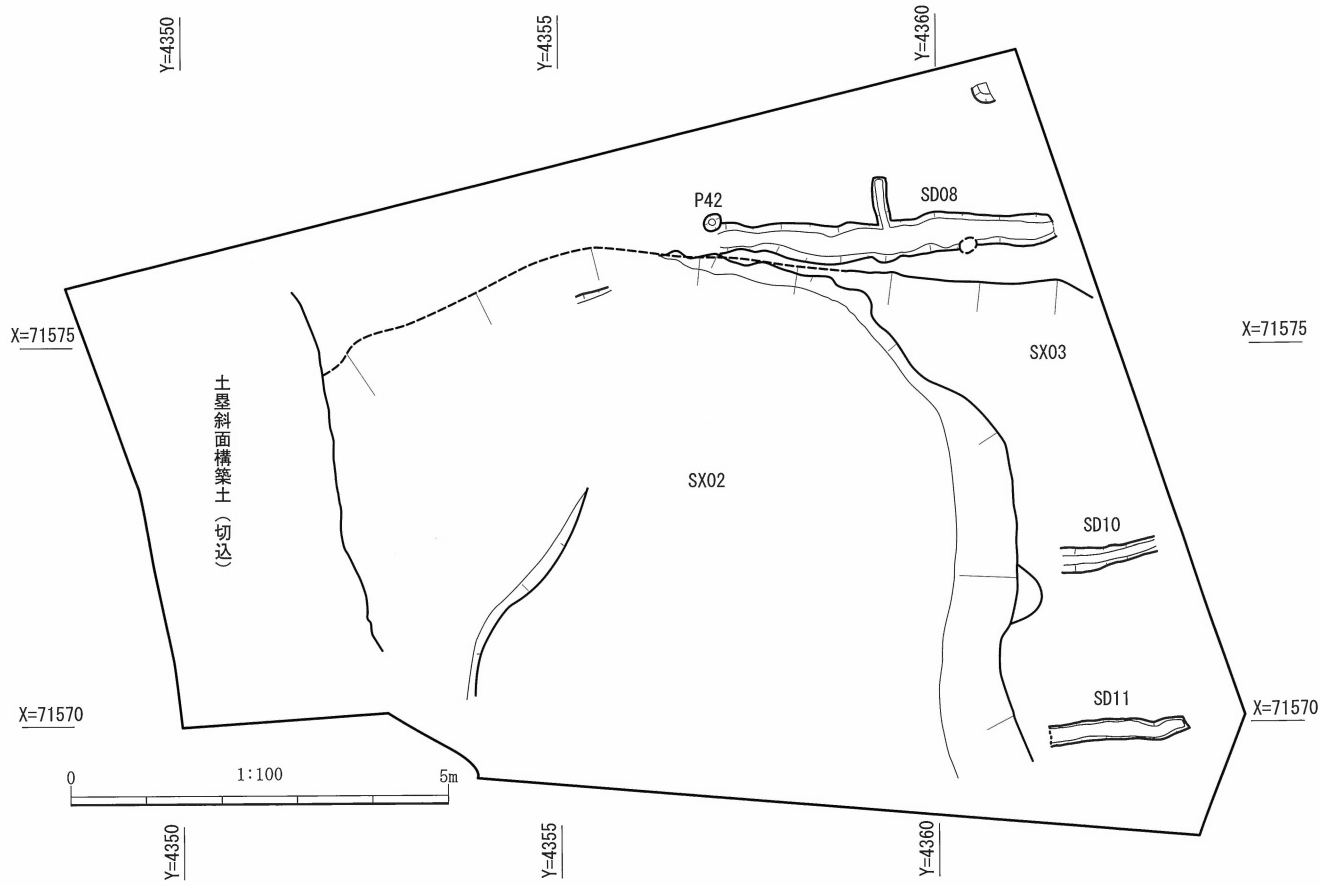
土塁斜面部の構成土は、堀側となる東側斜面が1層～8層、曲輪側となる西側斜面が9層～33層である。東斜面は一部のみの確認のため全容を把握しづらいが、2011年度調査においてこの東側を調査しており（第7章）、その成果を踏まえると、約30～40°の傾斜で盛土が行われている。西斜面においては、同様な斜面盛土によるが、その基部は、平安期地山よりさらに下位まで掘削を行い、そこから立ち上げている。調査区外となるためどの深さまで掘削をしているのか把握はできなかった。西斜面においても30～40°になるよう盛土しており、内部側が角度が緩い傾向にある。盛土厚さは全体で2.8ｍ以上が確認されている。約1ｍを単位として作業工程が推定できる。15層上面・18層上面・21層上面・23層上面には中央基底部同様薄い酸化鉄層の形成が認められ、斜面部においても水締めを行ったと思われる。このように斜面部では、厚みをもたせ、水平部同様水締めを伴う版築的工法を用い、さらに基底部を深く掘り込んで築造するといった施行がなされており、雨水で崩落することがないよう工夫がされていることが明らかとなった。

これまで土塁斜面部の構造は調査例がなく把握できなかったが、今回調査により土塁本体の築造過程が把握できた意義は大きいといえる。

基底部下面は酸化鉄の析出・沈着により、広域にわたり硬化しており、土塁構築にあたり水締めに



第 12 図　2007 年度調査区遺構平面図（３）中世１期



第 13 図　2007 年度調査区遺構平面図（４）平安時代

よる版築が全体に行われた可能性を示唆する。

なお、土塁基底面あるいはそれ以下において、柱根・柱痕を残す柱穴、柱穴と推定されるピットが多数検出されている。一部を除き、それらは、土塁中からの打ち込みの可能性がある。

これらは、ランダムで密な分布を示し、建物柱穴とは考えられない。これらは土塁構築時に打ち込まれた乱杭と推定できる。杭材の多くはマツが使われていた。この乱杭とみられるものは基底部の範囲において密度が高いことから、地盤固めの意味を持つものと推定しておきたい。

（3）中世２期（第11図）

土塁基底面直下で検出した遺構群である。溝・土坑・ピットがある。

ＳＤ01　調査区西部で検出した東西方向の溝である。確認した規模は、延長2.1ｍ、幅32㎝、深さ17㎝である。溝の主方向は、西半N―84°―E、東半はN―80°―Eとやや異なり、全体としては、南に張り出した緩い弧を描く。西端は、土塁斜面部がこれより下位まで掘削を行ったため欠失した。溝底面は、東から西に向かい低くなる。西端から50㎝の範囲を中心に、溝側面が焼けて赤化していた。赤化部分は表面から3㎝に及び、高温の被熱であったことを示す。覆土には木炭・焼土を多く含み、中世かわらけが出土した。廃滓等は検出していないが、鍛冶に伴うものか。

ＳＫ06　調査区南部において検出した。この時期の土坑中最も大形の土坑である。南北に長い隅丸方形で、長軸175㎝、短軸125㎝、深さ35㎝である。覆土には木炭が混じる。出土遺物には古代土器があるが混入である。土坑の性格は不明である。

その他小規模土坑が多い、これらの性格は不明である。

この時期の遺構群は、上部が土塁構築時に削り取られ欠失したと理解できる。

（4）中世１期（第12図）

この時期の遺構には、くぼ地ＳＸ01、井戸・溝・土坑がある。

ＳＸ01（第19図）　調査区中央で検出した南北方向のくぼ地遺構で、始まりの北端は、調査区北壁から約2ｍ南の地点である。東西横断面は浅い皿状を呈し、南北縦断面も北から南へ緩やかに傾斜する。確認した規模は、南北6.2ｍで、さらに南へ延びる。北から南に向かい、幅が広くなるとともに、深くなっていく。中央付近では傾斜が強くなる部分がある。南壁での最大東西幅240㎝、深さは32㎝である。

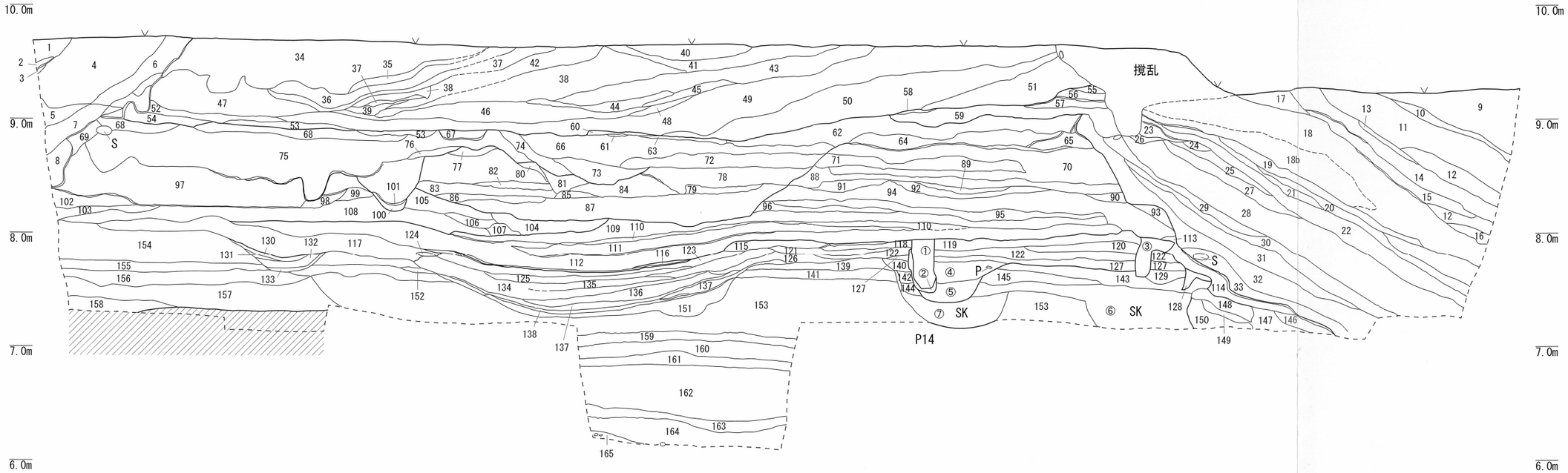
このくぼ地の覆土上層には、部分的に硬い明褐色土の小ブロックが認められたが、性格は不明である。覆土中層には炭化物層（木炭層・灰層・木質層）が最大5㎝の厚さで広く分布していた。間層を挟んで底面直上には、北側を中心に広さ70㎝大の2箇所の小ブロックを成した炭化物の広がりを認めた（第19図）。これらの炭化物層は、炭化木材を主体とするが、木の葉・昆虫・魚類（タイ科歯）・炭化穀類（イネ・オオムギ・コムギ・ヒエ・マメ科（ダイズ・アズキ・エンドウ等）の植物種子）、板、自然木が含まれていた（本章第5節）。内容からみて雑多な廃棄ゴミであるといえる。最初に廃棄されたゴミの中には、笄・高級漆器・輸入陶磁があり、廃棄した主体者が有力武家であったことを示唆する。このような状況から、このくぼ地には、最初北側からごみが廃棄され、その後順次南へ廃棄行為が広がっていったことがわかる。

ＳＸ01のくぼみ地形は、下層の平安時代のくぼ地地形ＳＸ02・03に影響を受けて生成したものと思われる。

SE01（第16図）　調査区北西端において安定した地山部分に構築されている。調査区北壁と重なっ

X=71570.000
Y=4363.850

南面



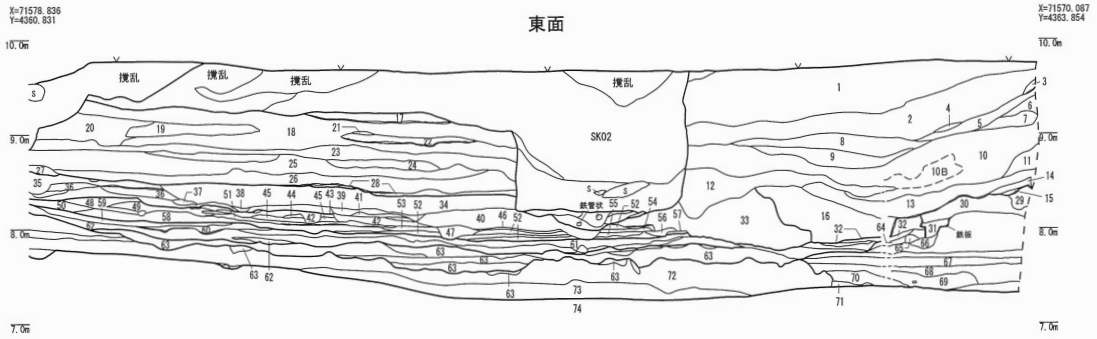
1 褐色土　小礫少し含む　黄色粒含む
2 灰色中粒砂
3 灰褐色土　焼土粒少し含む
4 灰褐色土　鉄分多い
5 灰色土　下部に砂礫少し含む
6 暗褐色土　小礫少し含む
7 暗褐色腐食土
8 灰褐色土　小礫少し含む
9 灰褐色土　小礫・灰色粘土ブロック含む
10 灰色砂質土
11 暗褐色土　灰白色粘土ブロック多く含む
木炭・小さな層状の灰色土含む
12 褐色粘質土　鉄分多い　粘土小ブロック少し含む
13 褐色土、灰色粘土小B含む
14 灰褐色土、灰色粘土B多く含む
15 黄灰色粘質土
16 暗褐色土　鉄分多い　木炭含む　灰色粘土ブロック少し含む
17 灰色土　礫少し含む
18 灰色粘土＋細礫・小礫＋細砂（部分的）混合層
鉄サビ多い（層状・ブロック状）
18B 粗砂多い
19 褐色粗砂
20 灰黄色粗砂＋灰色粘土混合層
21 褐色粗砂
22 灰色粘質土　小礫・粗砂少し含む
23 灰色粘質土　固い
24 黄色砂質土
25 灰色細砂＋細礫混合層
26 灰色砂＋小礫混合層
27 褐色土　灰色粘土ブロック・小礫含む
28 灰褐色粘土ブロック多い　上部小礫少し含む
29 赤褐色粗砂
30 灰色粘質土
31 灰褐色粗砂＋小礫混合層
32 灰褐色粗砂＋小礫混合層　しまり少ない
33 灰色粗砂
34 砂礫
35 黄灰色土
36 灰色土
37 黒褐色土　木炭少し含む
38 黄灰色粘土・黄色土
39 黄灰色シルト
40 褐色土　黄色ブロック含む
41 褐色土
42 黄色土　黒色ブロック含む
43 灰色土　明灰色粘土ブロック多く含む
44 淡黄褐色土　粗砂少し含む
45 褐色土　木炭含む
46 暗褐色土
47 黒色土・灰褐色土　黄色土ブロック状・帯状に含む
48 灰褐色土
49 灰色粘質土　小礫まばらに含む　黄色土・黄色砂帯状に入る
50 灰褐色粘質土
51 灰褐色粘質土　小礫まばらに含む
52 灰黄色土
53 褐色土　木炭含む
54 灰色粘質土
55 褐色粘質土
56 灰色粘質土　黄色ブロック・小礫含む
57 砂礫層
58 灰色粘土　固い
59 灰褐色砂礫土　粗砂＋小礫多い
60 暗褐色土
61 黄色粗砂
62 褐色砂礫土
63 黄色粒多く含む
64 灰色粘質土　木炭多い
65 灰褐色土　鉄分多い
66 灰色土　木炭含む
67 灰色土　小礫少し含む
68 明灰色土　きめ細かい　木炭含む
69 鉄分層
70 灰色粘質土、中小礫少し混じる
71 粗砂＋黄色細礫混合層
72 暗赤褐色粗砂＋小礫　固い　鉄分多い
73 灰色土　粗砂層状に混じる　礫含む
74 灰褐色土
75 褐色土　中小礫まばらに含む　木炭含む
76 灰色砂
77 黄灰色細粒砂、木炭含む
78 灰色シルトに中小礫多く含む
79 黄灰色粗砂
80 灰色細粒砂
81 灰色土に灰色粗砂・細礫多く含む
82 灰色粒砂
83 黄褐色砂礫
84 灰色シルト質土　上部に小礫多い
85 灰色粘質土
86 灰白色粘土
87 礫層　灰色土に灰白色粘土ブロック少し含む
88 灰色粘土　中～小礫多い
89 黄褐色粗砂
90 灰色粘土
91 灰褐色、木炭含む
92 灰黄色粗砂多い
93 灰色粘土
94 暗灰色粘質土　細・小礫少し含む　木炭多い
95 暗灰色粗砂
96 暗褐色砂礫
97 灰色土　やや粘質　中小礫少し含む
98 灰褐色粘質土
99 褐色土
100 灰褐色土
101 木炭層
102 黄灰褐色粗砂
103 黄灰色粘土
104 褐色砂礫土
105 灰色砂礫土
106 明灰色粗砂
107 褐色砂礫
108 灰褐色砂礫　少し粘土含む
109 暗灰色～黒褐色粘土　淡黄色粘土ブロック含む
110 灰色粗砂
111 淡オリーブ色シルト質粘土～明灰色粘土
112 灰黄褐色砂礫（粗砂主体、中小礫含む）　上部鉄分著しい
113 黄色砂礫
114 灰色粘質土
115 灰色粘質土
116 灰色粘土
117 褐色粘質土　粗砂小礫所々に含む、
灰色粘土ブロックわずかに含む
118 灰色粘土
119 灰色粘土　黄色・黄白色ブロック含む
120 暗灰色土　黄白色粘土ブロックまばらに含む
121 灰色粘土　木炭含む
122 灰色土　白色粘土ブロック多く含む
123 灰色～暗灰色粘土　淡黄色粘土ブロック含む
124 灰色粘土ブロック主体
125 淡黄色粘土ブロック＋灰色砂混合層
126 暗灰色粘土　木炭多く含む
127 灰色土　黄色粒多く含む
128 明灰色粘質土
129 灰色土
130 木炭層
131 黄褐色粘土
132 灰色シルト＋砂＋粗砂混合層
133 褐色土　鉄分多い
134 灰色粘質土　淡黄色粒少し含む
135 暗灰色シルト　下部粘土化
136 灰色土　黄白色粘土ブロックを多く含む
137 木炭層
138 灰色粘土
139 灰色シルト（水田耕土）
140 灰色粘質土
141 灰黄色粘質土（水田床土）
142 褐色粘質土
143 灰褐色土（水田床土）
144 灰色粘質土　淡黄色粒多く含む
145 灰黄褐色粘質土
146 灰色土　砂礫やや多く含む
147 暗青灰色土
148 明灰色砂礫
149 黒色土　木炭含む
150 暗灰色砂質
151 灰色シルト質土　木炭・木質少し含む
152 灰色シルト
153 暗灰褐色粘土　木炭・礫含む
154 灰色シルト
155 暗黄褐色粘質土
156 灰褐色粘質土　粘性大
157 暗灰褐色粘質土
158 黒灰色粘質土　やや粘性あり
159 黒褐色粘土
160 暗黄灰色粘土　黒灰色粘土ブロック含む
161 明青灰色粘土
162 青灰色シルト質粘土　下半木質を含む
163 木質層粘土
164 灰色粘土　粘性きわめて大
165 灰色シルト　木質層

遺構覆土

P14
① 灰褐色土　下部に粗砂小礫含む
② 鉄分
P
③ 灰色土（杭跡）
SK
④ 褐色粘質土
⑤ 灰色粘質土
SK
⑥ 灰色粘質土
SK12
⑦ 灰色粘質土

0　1:40　2m

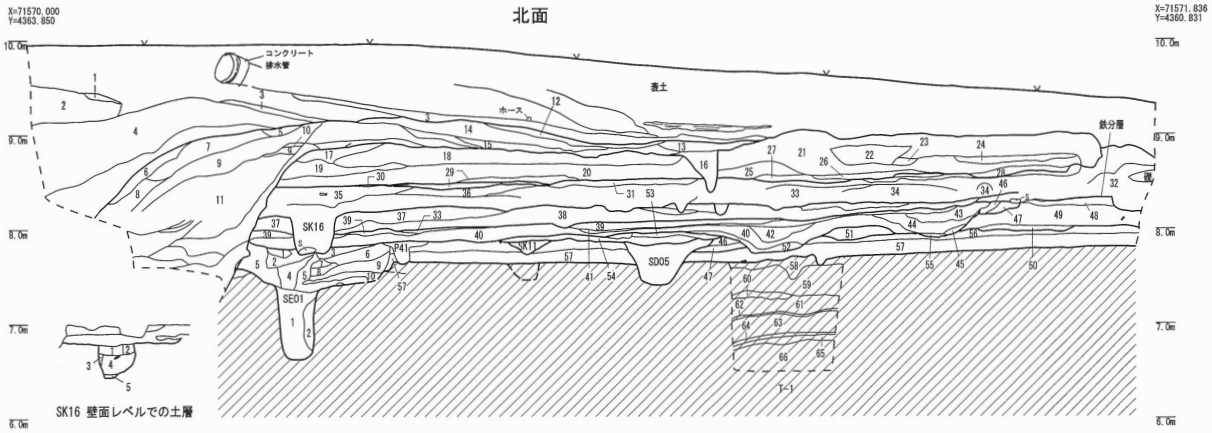
第14図　2007年度調査区南壁断面図



1　褐色土（近代盛土）　黄色土大ブロック帯状に含む
2　暗褐色土　礫混じり　焼土粒含む
3　灰色中粒砂
4　灰色土
5　灰褐色土　焼土粒少し含む
6　灰褐色土　鉄分析出多い
7　灰色粗砂主体　小礫・灰色粘土ブロック含む
8　褐色土　焼土粒・黄色粒含む
9　褐色土　木炭粒少し含む
10　灰色土　下部に砂礫少し含む
10B　鉄分析出顕著
11　暗褐色腐食土
12　褐色土　砂礫主体　鉄分析出
13　灰褐色土　小礫少し含む
14　灰色粘質土
15　暗灰色土
16　灰色土　砂礫主体
17　褐色粗砂土　黄色ブロック少し含む
18　褐色　砂礫少し含む
19　褐色土　小礫・砂多い　灰白色粘土ブロック多く含む
20　褐色土　小礫・砂多い
21　褐色土
22　褐色粗砂
23　灰色土　灰色粘土ブロック多く含む
24　褐色粗砂＋小礫
25　褐色砂礫土
26　灰色砂礫質土　細礫多く含む
27　灰色砂礫
28　灰色粘土
29　灰色土　木炭含む
30　灰色砂礫土、木炭含む
31　灰色粘質土　木炭含む
32　木炭層
33　褐色土　砂礫主体
34　灰褐色土　小～中礫まばらに含む
35　灰色粘土
36　黄褐色～灰色粗砂
37　灰色粗砂
38　褐色粗砂
39　灰色中粒砂
40　灰褐色砂礫
41　暗灰色土　木炭多い
42　灰色中粒砂＋小礫
43　黄色粗砂
44　黄褐色粗砂
45　灰色粘土
46　灰色中粒砂
47　暗褐色、礫含む
48　褐色粗砂
49　黄色中粒砂
50　灰色土
51　黄色粗砂
52　灰色粘土
53　黄灰色粗砂
54　灰色粗砂
55　褐色粗砂
56　灰色粘質土
57　黄色粗砂
58　灰褐色粗砂
59　灰色粘質土
60　灰色細粒砂
61　淡黄色粗砂＋粘土ブロック
62　暗灰色シルト　木炭多い
63　明灰褐色土　木炭多い
黄灰色粗砂＋細粒砂帯状に堆積
64　灰色土　木炭含む
65　黄灰色細粒砂
66　灰色土＋黒色土
67　明灰色粘土
68　暗灰色粘土
69　褐色粘性土
70　灰色粘土
71　黒色土
72　暗褐色粘質土、鉄分析出多い
73　黒灰色粘質土（平安包含層）
74　黒褐色粘土（平安地山）

0　1:80　4m

第 15 図　2007年度調査区東壁断面図



北壁
1　暗褐色土　黄色粘土ブロック・粗砂を含む
2　灰褐色粘質土　礫を含む
3　灰色シルト質砂　灰白色粘質土を薄い層状に含む
4　褐色土　黄白色粘土ブロック多く含む　小礫含む
5　赤褐色砂礫
6　灰色中粒砂
7　黄褐色砂礫
8　灰色中粒砂～粗砂
9　灰色粘土ブロック＋褐色粗砂＋中礫混合層
10　褐色粗砂
11　黄褐色粗砂　小礫含む
12　明灰白土　灰色砂・黄灰色粘土ブロック含む
13　黄灰色粘質土
14　黄褐色砂礫土
15　灰色粘質土
16　灰色シルト　細礫含む
17　灰色粘土＋小礫＋砂混合層
18　黄灰色粗砂＋中礫混合層
19　灰色粘土　中礫少量含む
20　砂礫層
21　淡灰色シルト質粘土　木炭含む　鉄分析出
22　灰色シルト質粘土　小礫少し含む
23　灰褐色粘土　粗砂含む
24　灰色粘土　黄白色小粘土ブロック多く含む
25　黒灰色土　小礫少し含む
26　灰褐色粘質土　木炭粒多く含む
27　黄色粘土ブロック主体
28　黄褐色粗砂＋小礫混合層
29　灰色土　薄い木炭層が連続して堆積
30　木炭層
31　灰褐色粗砂
32　暗灰色粘質土　小礫少し含む
33　灰色粘土ブロック主体
34　褐色土　小礫含む
35　灰褐色土　灰白色粘土ブロック混じる
37　灰色中粒砂　しまり少ない
38　灰色砂礫＋黄褐色粗砂混合層
39　黄灰色粘土主体　灰色砂混じる
40　暗灰褐色土　灰色小ブロック含む　木炭含む
41　灰色粗砂　下面に集中して鉄分析出
42　灰色土に黄色砂混じる
43　灰色砂質シルト　締まりがあり固い
44　暗灰色・黄白色粘土ブロック主体
45　灰色シルト質粘土
46　灰色土
47　灰褐色土　黄色粒多く含む
48　灰褐色粘質シルト
49　灰色シルト（中世水田耕土）
50　灰褐色シルト
51　褐色土　鉄分きわめて多く析出
52　灰黄褐色土　鉄分多く析出
53　灰色粘土　木炭含む
54　暗灰色シルト　木炭含む
55　黄色土
56　褐色粘質土（中世水田耕土）
57　暗褐色粘質土（古代包含層）
58　黄色シルト地山（弥生土器含む　再堆積土）
59　黄灰色砂質土　鉄分析出
60　黄灰色土　鉄分多く析出
61　黄灰色細粒砂質土　緻密
62　黄白色粘土　薄層
63　灰色シルト質粘土
64　灰色細粒砂
65　黄灰色粘土＋黄色細粒砂混合層
66　灰色シルト質砂　下部鉄分斑状に析出し硬化

SK16
1　暗黄色土
2　灰色土
3　灰色粘土＋粗砂混合層
4　暗黄色土
5　灰白色粘土ブロック
SD05
1　灰褐色土　木炭含む
SE01掘り方
1　黄褐色粗砂
2　灰褐色粘質土
3　灰褐色土　鉄分析出
4　灰褐色粘質土　灰色粒多い
5　灰褐色粘質土　木炭含む
6　灰色土　木炭含む
7　灰色土　黄色ブロック多く含む
8　褐色粘質土　鉄分析出
9　灰褐色土　黄色小粒多く含む
10　黄色土　灰色土含む
SE01
1　灰色土　黄白色粘土小ブロック多く含む
2　灰褐色粘質土

0　1:80　4m

第 16 図　2007年度調査区北壁断面図

て検出したため、断面記録後、調査区を拡張して全体形状を確認した。直径56㎝、平面円形の素掘り井戸である。深さは90㎝で、断面はU字形である。覆土は地山小ブロックを多数含む層で、廃絶後一気に埋められたと思われる。覆土から白色のかわらけ、古代土器が出土した。後者は混入である。井戸の上部には、計2ｍの掘り方とみられるが付属するが、掘込み面は中世2期レベルであり、井戸SE01とは直接関係がない可能性もある。

ＳＤ04　調査区中央で東西方向に延長 2.9ｍを検出した。主軸方向はN-73°-Eである。幅45㎝、深さ6㎝である。西から東へ向かい深くなる。ＳＤ05と交差し、ＳＤ05が新しい構築である。覆土から中世かわらけ、古代土器が出土し、後者は混入である。主軸直交方向に換算するとN-17°-Wとなり、下層の平安時代の溝の同方向（N-2～2.5°-W）より15°程度西側へ傾く。

ＳＤ05　調査区中央で南北方向に延長4.15ｍを検出した。主軸方向はN-10.5°-Wである。幅70㎝と広く、深さ20～26㎝である。北から南へ向かい深くなる。ＳＤ04と交差し、ＳＤ05が新しい構築である。覆土から中世かわらけ、古代土器が出土し、後者は混入である。北部では拳大の中礫数個が含まれていた。

ＳＫ10（第18図）　調査区中央南部において、ＳＸ01と重複して検出した。ＳＸ01より新しい構築である。楕円形平面を示し、長軸180㎝と大形の土坑である。断面は碗状である。比較的早く埋まったか意図的に埋められたものと推定される。出土遺物はかわらけ、古代土器があるが、後者は混入である。土坑の性格は不明である。

ＳＫ11（第18図）調査区中央北部において検出した。平面楕円形で、長さ90㎝幅70㎝深さ22㎝である。天端から5㎝下に薄い木炭層が皿状に全面に認められた。その下には木炭ブロックが部分的に存在し、底面の北寄りに45㎝×35㎝の焼土ブロックが薄く堆積していた。木炭には炭化したマメ類が多く含まれており、くぼ地ＳＸ01の炭化物構成とやや異なる。

ＳＫ14（第18図）　調査区中央南北部においてＳＸ01と重複して検出した。ＳＫ14が新しい。平面方形で、一辺長さ45㎝×35㎝、深さ22㎝以上である。廃絶後一気に埋められた。

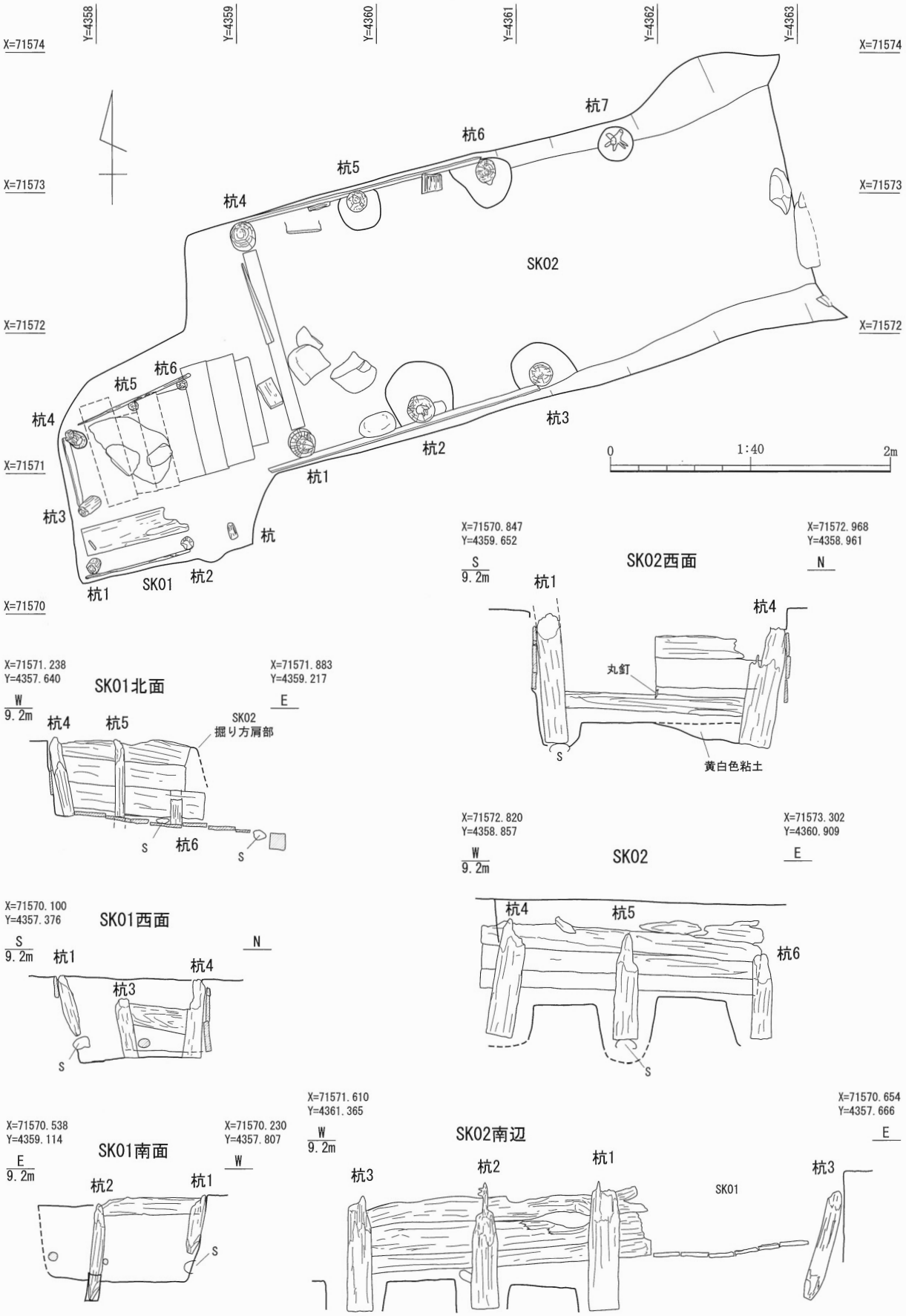
（5）平安時代（第13図）

くぼ地2箇所と溝がある。

ＳＸ02（第18図）　調査区の北端には、わずかな範囲であるが、安定した黄色シルトの地山平坦面が存在する。調査区北壁から1ｍ南に離れたところから、くぼ地ＳＸ02がはじまり南に向かって傾斜する。東岸辺は、調査区東壁から2ｍ西にあり、東から北へ円弧を描くようなくぼ地形状となる。西端は、土塁西斜面が地山より下まで切り込んで構築されているため、広がりの範囲は不明である。くぼ地はさらに南へ広がるが、市営地下駐車場工事により欠失しており、規模は把握できない。現状で把握した規模は、東西8.5ｍ南北6.7ｍである。

岸辺から幅1ｍほど緩やかな傾斜地があり、底面に至る。底面までの深さは約40㎝である。底面は概ね平坦であるが、微視的に見れば、東西方向に対し微小な凹凸が存在する。この凹凸は水流を左右する作用はなく、滞留的である。また、底面域の西部においては、南北方向に高さ13㎝の大きな段差が存在する。覆土は暗灰褐色粘土の単層で、覆土中からは、9世紀代の須恵器・土師器・製塩土器が出土したことから、平安前期の構築である。

以上の状況から、このくぼ地は、自然地形による湿地環境ではなく、人為的な掘削が行われた部分と理解される。このことは、これより古いＳＸ03に伴う水田耕作層がＳＸ02の範囲内においては欠失していることからも裏付けられる。



第 17 図　2007年度調査ＳＫ01･02実測図

ＳＸ03　ＳＸ02の東側において、東西4.2ｍ南北7,2ｍを検出した。ＳＸ02より古い。北岸はＳＸ02とほぼ等しい。東は調査区東壁より広がるが、土塁東斜面の構築により削られているとみられ、旧状は把握できない。南側への傾斜はＳＸ02よりも緩やかである。この覆土を構成している土は、水田特有の灰色のシルト質の土（耕作土、第14図154層・156層）と鉄分の多い褐色土（床土、第14図155層・157層）とみられ、このくぼ地では2層の水田が累積形成されていたと推定できる。

ＳＤ08　調査区北端部の地山平坦面上において、東西方向の溝を検出した。延長4.5ｍ、幅55㎝、深さ5㎝で、東から西へ傾斜する。西端はＳＸ02、ＳＸ03と重なる。主軸の直交方向はN―2.5°―Wで、後述するＳＤ10・11の方向に近似するが、それより幅が大きい。溝内からは須恵器・土師器が出土しており、平安前期の形成である。高台とくぼ地の境界において、それを仕切る方向で存在することから、近接して北側の高台部に存在した集落とくぼ地とを分ける役割があったかもしれない。

ＳＤ09　井戸SE01の北側で延長わずか15㎝を検出した。南北方向に延び、底面は北から南に向かい深くなる。幅25㎝、深さ14㎝で、平安時代の構築である。

ＳＤ10・11　調査区東南隅において、ほぼ同規模・同方向の2条の溝を検出した。検出長さは130～185㎝、幅25～30㎝で、深さ5㎝程度の浅い溝であり、規模が似ている。溝の主軸直交方向はＮ－2°　Ｗで、前記ＳＤ08と近似するが、それに比べ規模が小さいため、同時性は考えにくい。ＳＤ10・11の間隔は2.3ｍである。このような平行する溝は畑の畝跡と推定される。ＳＸ03埋没後に形成された。

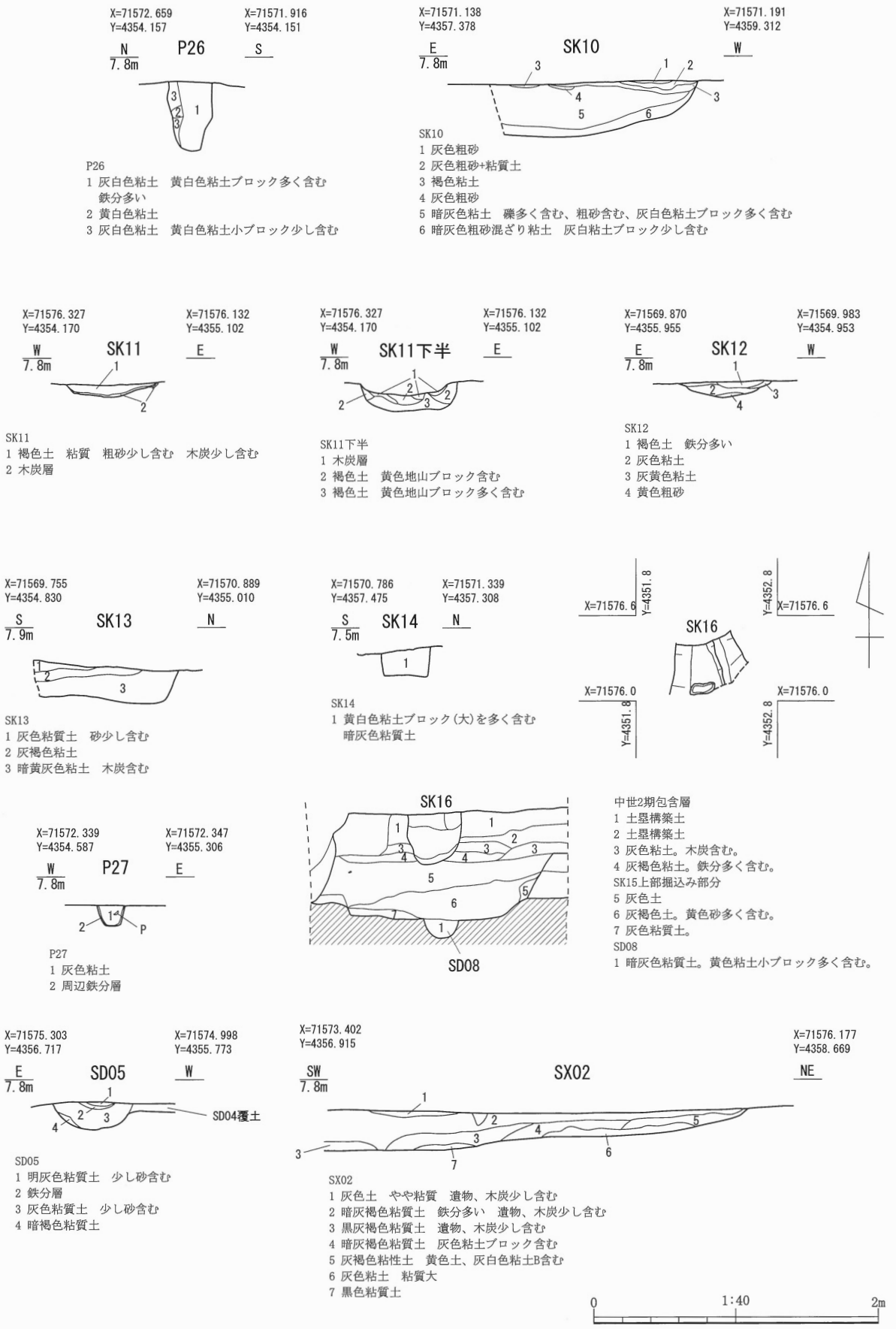
これら平安前期9世紀代の遺構群については、次のとおり推移したと理解される。当初ＳＸ03のくぼ地が存在し湿地環境にあった。この湿地は、川自然堤防の後背湿地（ラグーン）としての性格を推定できる。この湿地環境を利用して水田耕作が行われたとみられる。その後北側岸辺付近が円形に掘り込まれた。その目的は明確ではない。岸辺の北側高台部には東西方向の溝ＳＤ08が構築された。ＳＤ08の西端はＳＸ02(ＳＸ03)に結合し、東側から水流が入り込むため、ＳＸ02またＳＸ03への導水を目的としたものと推定される。構築時期についてはどちらに伴うものかは不明である。ＳＸ02は短期間で埋まり、畑の畝跡と推定されるＳＤ10・11が構築された。これは水辺が陸化したことを示す。ＳＤ08はちょうど高台と湿地の境界に存在し、これを分ける意味を有していたと推定される。

以上のような平安前期における変遷は、後輩湿地の水田利用から、陸化して畑地に転化する過程として理解される。この開発の母体となった平安集落は、北側の高台部に形成されていたと推定されるが、これまでの本丸地内の試掘においてその年代の遺構は確認されていない。この不在状況は、本調査区から約50ｍ北の2004年度調査16-4T地点で検出された、近世初期における造成土獲得のための高台部地山上層部の掘削行為〔富山市教委2006〕によって、平安期の遺構が失われたものと解する。

出土した遺物は、須恵器・土師器・製塩土器・土錘がある。それらから推定される集落の様相は、神通川辺に営まれ、川漁撈を行う一般的集落である。転用硯の可能性のある須恵器杯蓋が1点存在するが、その判定は現在のところ曖昧であり、識字層の存在を積極的に評価することはまだできない。

（6）平安時代地山

調査区北部において安定した地山が形成されており、その上部数㎝に食い込んで弥生後期甕（第20図2)、縄文土器（第20図1）が出土した。このことはこの地山土が、弥生後期以前の遺構を壊して再堆積した河川洪水層であることを示唆する。調査区北壁での地山部分の土層断面観察によれば、土器を含む層は濁りがあり、また厚さ8～24㎝で下面は凹凸が著しい。それより下位の層位では西方向への傾斜がみられる。



P26
1 灰白色粘土　黄白色粘土ブロック多く含む
　鉄分多い
2 黄白色粘土
3 灰白色粘土　黄白色粘土小ブロック少し含む

SK10
1 灰色粗砂
2 灰色粗砂+粘質土
3 褐色粘土
4 灰色粗砂
5 暗灰色粘土　礫多く含む、粗砂含む、灰白色粘土ブロック多く含む
6 暗灰色粗砂混ざり粘土　灰白粘土ブロック少し含む

SK11
1 褐色土　粘質　粗砂少し含む　木炭少し含む
2 木炭層

SK11下半
1 木炭層
2 褐色土　黄色地山ブロック含む
3 褐色土　黄色地山ブロック多く含む

SK12
1 褐色土　鉄分多い
2 灰色粘土
3 灰黄色粘土
4 黄色粗砂

SK13
1 灰色粘質土　砂少し含む
2 灰褐色粘土
3 暗黄灰色粘土　木炭含む

SK14
1 黄白色粘土ブロック(大)を多く含む
　暗灰色粘質土

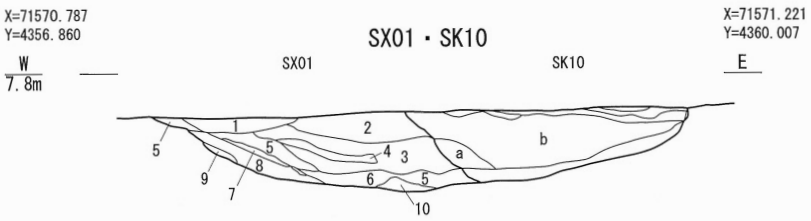
P27
1 灰色粘土
2 周辺鉄分層

中世2期包含層
1 土塁構築土
2 土塁構築土
3 灰色粘土。木炭含む。
4 灰褐色粘土。鉄分多く含む。
SK15上部掘込み部分
5 灰色土
6 灰褐色土。黄色砂多く含む。
7 灰色粘質土。
SD08
1 暗灰色粘質土。黄色粘土小ブロック多く含む。

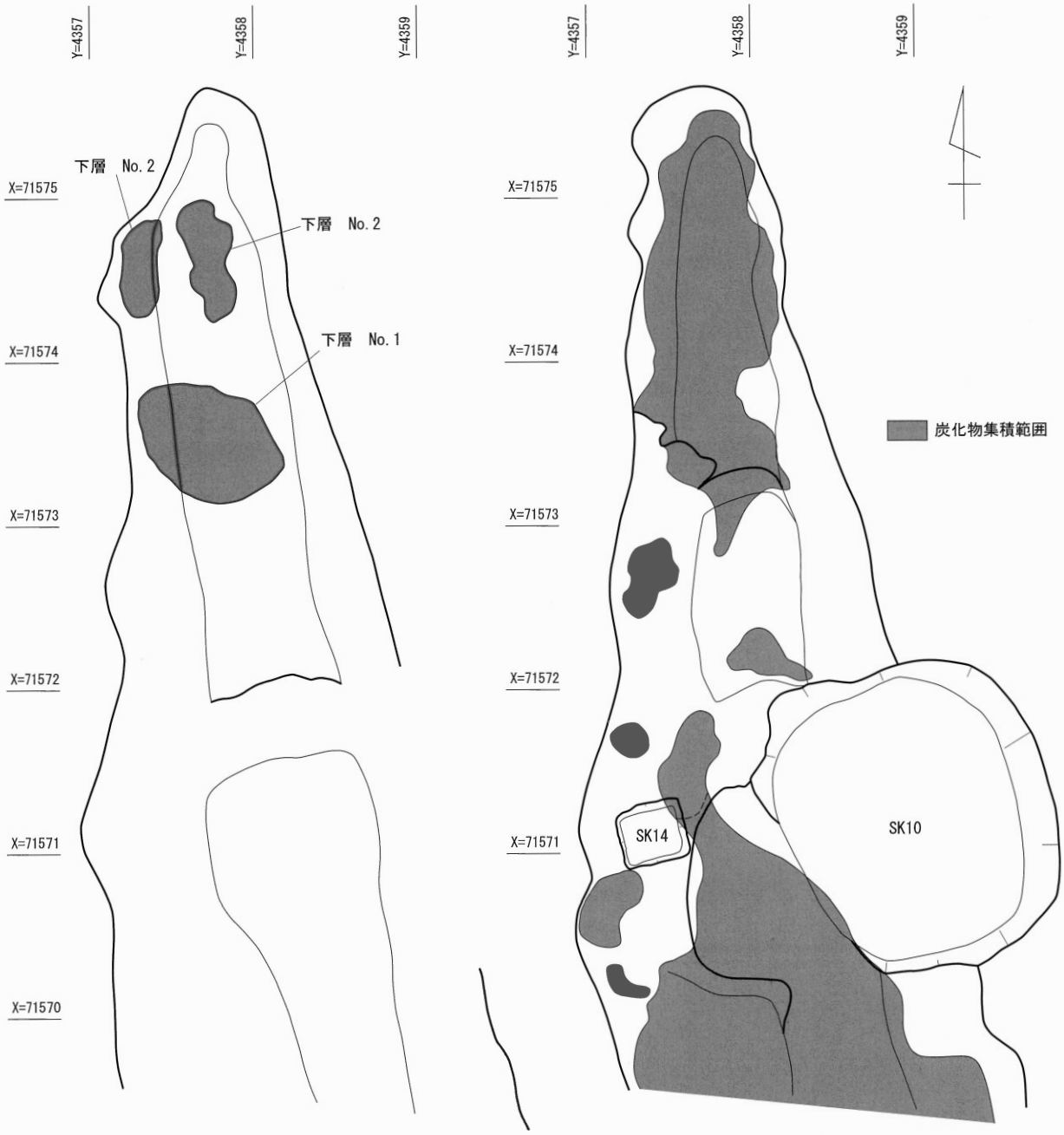
SD05
1 明灰色粘質土　少し砂含む
2 鉄分層
3 灰色粘質土　少し砂含む
4 暗褐色粘質土

SX02
1 灰色土　やや粘質　遺物、木炭少し含む
2 暗灰褐色粘質土　鉄分多い　遺物、木炭少し含む
3 黒灰褐色粘質土　遺物、木炭少し含む
4 暗灰褐色粘質土　灰色粘土ブロック含む
5 灰褐色粘性土　黄色土、灰白色粘土B含む
6 灰色粘土　粘質大
7 黒色粘質土

第18図　2007年度調査遺構断面図



SX01
1 黄褐色粗砂　細礫含む
2 灰色粘土大ブロックを含む　暗灰色粘土
3 暗灰褐色粘質土
4 灰白色粘土
5 暗灰色土　灰白色粘土小ブロック多く含む
6 黒灰色土　木炭含む
7 木炭層
8 暗灰褐色粘土
9 暗灰色土　木炭含む
10 黄色砂礫
SK10
a 暗褐色土　灰色粘土小ブロック多く含む
b やや砂質土



底面　　中～上層

第19図　2007年度調査ＳＸ01断面図・炭化物分布図

0　(1/40)　2m

第４表　2007年度調査遺構一覧表

遺構番号	年代	種類	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	構造等	覆土	出土遺物(番号は実測図番号)	備考
SE01	中世1期	井戸	56	56	90	素掘り	灰色土	かわらけ(白色)、古代土師器(甕、椀)	上部に掘り方幅2.0m以上
SK01	近代	地下土坑	150	160	60	長方形板組、内側杭留、方形床面板敷	褐色土	ガラス・燻し瓦・赤漆椀破片・陶磁器(112)、蓄電池様金属製品	大正期
SK02	近代	地下土坑	440以上	181～200	75	長方形板組、内側杭留	褐色土	伊万里、古代土器、中世陶磁器	大正期　古代・中・近世遺物混入
SK03	中世2期	土坑	105	105		円形	黒色泥質土	かわらけ(79)	土塁直下で確認
SK04	中世2期	土坑	66以上	50	28	楕円形		かわらけ(白色)	
SK05	中世2期	廃棄土坑	112	75	35	楕円形	骨片・木炭含む	焼けた礫片、かわらけ、古代須恵器、古代土師器(椀)	くぼ地やや上の青灰色粘土上面から掘込み
SK06	中世2期	土坑	170	125	35	隅丸方形	木炭含む	古代土師器(椀)	
SK08	中世2期	土坑	50	30	3	方形	木炭含む		
SK09	中世1期	柱穴	32	32	15	円形、2段掘り	中央に柱状に木炭	古代土師器(椀)	木炭は柱根とみられる
SK10	中世1期	土坑	180	165	40	楕円形		かわらけ？古代土師器(椀・甕)	SX01と重複、SK10が新
SK11	中世1期	土坑	90	70	22	楕円形			壁から底面に焼土堆積
SK12	中世1期	土坑	65以上	70	35	楕円形		かわらけ(白色)、古代土師器(椀)	
SK13	中世1期							古代土師器(赤彩椀・赤彩皿・甕)	
SK14	中世1期	土坑	40	35	22以上	方形		かわらけ(白色)	SX01と重複、SK14が新
SK16	中世1期	土坑or溝	35	60	33	東底2段掘り　底面に礫		古代土師器(甕)	SE01より新
SK18	中世1期	柱穴	50	35	46	楕円形　掘り方あり	黄白色粘土ブロック混じる	かわらけ(71)	
P01	中世2期	ピット	20	20	5	円形	黒色土　骨片含む		
P02	中世2期	ピット	40	36	6	円形	黒色土　木炭・焼土粒含む		
P03	中世2期	ピット	48	42	4	隅丸方形	黒色土　木炭・焼土粒含む		P04と重複
P04	中世2期	ピット	77	76	14	隅丸方形	黒色土　骨片・木炭・焼土粒含む		P03と重複
P05	中世2期or江戸	ピット	25	25	52	円形	褐色土		
P06	中世2期or江戸	ピット	40	28	25	楕円形	褐色土(しまりなし)		
P07	中世2期or江戸	ピット	18	18	15	円形	灰褐色粘質土		
P08	中世2期or江戸	ピット	20	20	18	円形	灰褐色粘質土		
P09	中世2期or江戸	ピット	45	30	10	楕円形	灰褐色砂質土		
P10	中世2期or江戸	ピット	25	25	25	円形	黄褐色粗砂		
P11	中世2期or江戸	ピット	27	22	12	楕円形	灰色粘質土		
P12	中世2期or江戸	ピット	45	25	6	楕円形	暗灰色粘質土		
P13	中世2期or江戸	ピット	25	25	20	円形	暗灰色粘質土		
P14	中世2期or江戸	柱穴	19	19	47		灰褐色土　周囲鉄分析出		
P15	中世1期or江戸	ピット	66	40	7				
P16	中世1期or江戸	ピット	60	40	11				
P17	中世1期or江戸	柱穴	20	20	50				
P18	中世1期or江戸	ピット	35	30	17				
P19	中世1期or江戸	ピット	21	21	12		灰色土		
P20	中世1期or江戸	ピット	25	25	18		灰色粘土		
P22	中世1期or江戸	ピット	13	13			灰色土		
P23	中世1期or江戸	ピット	19	19	26		灰色土　周囲鉄分析出	古代土師器(甕)	
P24	中世1期or江戸	柱穴	28	28	25		灰色土・黒褐色土　周囲鉄分析出	かわらけ(白色)	かわらけは底面出土
P25	中世1期or江戸	ピット	16	16	26		灰色土		
P26	中世1期or江戸	柱穴	25	25	51		灰色土・黒褐色土　周囲鉄分析出	古代土師器(椀・甕)	
P27	中世1期or江戸	ピット	22	22	11	柱根残る	黒褐色土　周囲鉄分析出	かわらけ(白色)	
P28	中世1期or江戸	柱穴	16	16	27		赤茶色土	かわらけ or　古代土師器(椀)	
P29	中世1期or江戸	ピット	24	17	31			かわらけ	
P30	中世1期or江戸	ピット	32	25	19				
P31	中世1期or江戸	ピット	18	18	17				
P32	中世1期or江戸	ピット	20	20					
P32	中世1期or江戸	ピット	20	20					
P33	中世1期or江戸	ピット	20	20					
P34	中世1期or江戸	ピット	20	20					
P35	中世1期or江戸	ピット	20	20					
P36	中世1期or江戸	ピット	20	20	37			古代土師器(椀)	
P37	中世1期or江戸	ピット	25	25	20				
P38	中世1期or江戸	ピット	25	25	20				
P39	中世1期or江戸	ピット	38	38	14		褐色粘質土　周囲鉄分析出		SX02掘り方中に検出
P40	中世1期	ピット	15	15	27	方形	黄白色粘土ブロック混じる	かわらけ	
P41	中世1期	ピット	180	180	22	二段掘り	灰褐色土		SE01掘り方より新しい
P42	中世1期	ピット							
SD01	中世2期	溝	210	32	17	西側壁面焼けて赤化	黒色土　焼土・木炭含む	かわらけ(70)	西側土塁構築土により削平。東→西方向
SD02	中世2期							珠洲(97)、瀬戸美濃(108)	
SD03	中世2期		540	30	5		灰色砂　木炭含む	かわらけ	SD07と重複、SD07より古い、東壁断面で確認
SD04	中世1期		290	45	6			古代土師器甕(32)、かわらけ(白色)	SD05と重複、SD05より古い。
SD05	中世1期		415	70	20～26			かわらけ(白色)、古代須恵器(杯)、古代土師器(椀)	SD04と重複、SD04より新しい
SD06	平安							かわらけ(白色)、古代土師器(椀・甕)	
SD07	平安	自然流路?	180	20	10		粗砂・シルト質砂		SD03と重複、SD07が新、東壁断面で確認
SD08	平安	溝	450	55	5	東→西へ傾斜、中ほど北側に北→南の短い溝が結合			
SD09	平安	溝	15	25	14	北→南へ	暗灰色粘質土		SE01と重複
SD10	平安	溝	(130)	30	4	東→西へわずかに傾斜			畝跡？
SD11	平安	溝	(185)	25	5	東→西へわずかに傾斜			畝跡？
SX01	中世1期	くぼ地(廃棄場)	620以上	240	32以上	底面に3箇所木炭ブロックあり	黒色土・木炭層・木質層	漆椀(114)・笄(115)・かわらけ(88,89)・珠洲(94,99)・須恵器(16,19)	湿潤環境　SK10より古い　SX02より新しい
SX02	平安	くぼ地	850以上	650以上	40以上			古代須恵器(15,22,23)、古代土師器(椀)、製塩土器(60)	SX03より新
SX03	平安	くぼ地	720以上	420以上		水田層形成			SX02より古い

第4節　遺　物

縄文時代・弥生時代・平安時代・中世・近世のものがある。

（1）縄文時代（第20図）

縄文土器　(1)　高台付深鉢の高台部である。縄文中期後葉か。

（2）弥生時代（第20図）

弥生土器（2～4）　2は弥生後期天王山式土器の甕口縁部である。地文を縄文とし連弧文を施す。連弧は2本が上下に離れて引かれる。口唇部は短く横線で区切り、口縁内外面に縦の短い沈線で刻む。もう1点同一個体の小破片がある（図版11右上）。3,4は甕底部で、内面櫛歯状工具で整形する。

（3）古代

須恵器（第20・21図）

杯蓋5は、小さなつまみと蓋の間が連続している。内面は若干摩耗するが、墨痕はない。杯蓋6,7は上面屈曲部を削る。

杯身8～17は体部がまっすぐ外傾するもので、11～15無台、16,17は有台である。17は底部から体部の立ち上がりは強く屈曲する。15はＳＸ02出土。

壺19は広口壺の口縁で、口唇上端を面取りする。20は頸部から体部の屈曲部で、頸部はまっすぐ立ち上がる。

双耳瓶22は肩部の突帯である。突帯先端面を強くくぼませている。体部の器壁は薄い。ＳＸ02出土。

甕23・24は口縁で、先端は嘴状に横に突出する。23はＳＸ02出土。25・26は頸部である。27～34は体部で、外面は平行叩き痕、内面は34が扇状叩き痕、それ以外は同心円叩き痕である。

これらの年代は9世紀代で、中頃を主体とする。

土師器（第21図）

椀は底面に回転糸切痕を残すロクロ土師器である。36,37は口縁が短く外反し、内面側に稜をもつ。38は口縁が薄く別器種の可能性がある。39は底部に厚みがあり、体部下半に指頭圧痕を残す。40,41,43,44,47～50は底部脇に段をつける。47,49,50は厚底で、底部脇の段は鋭角に切込みが入る。49は静止糸切底である。このほか図示しないが内黒椀口縁小片がある。43はＳＸ02出土。

高台付椀53は底径が小さく、中央がぶ厚くなり糸切痕は見えない。54は底面回転糸切痕を残し、底部に厚みがある。

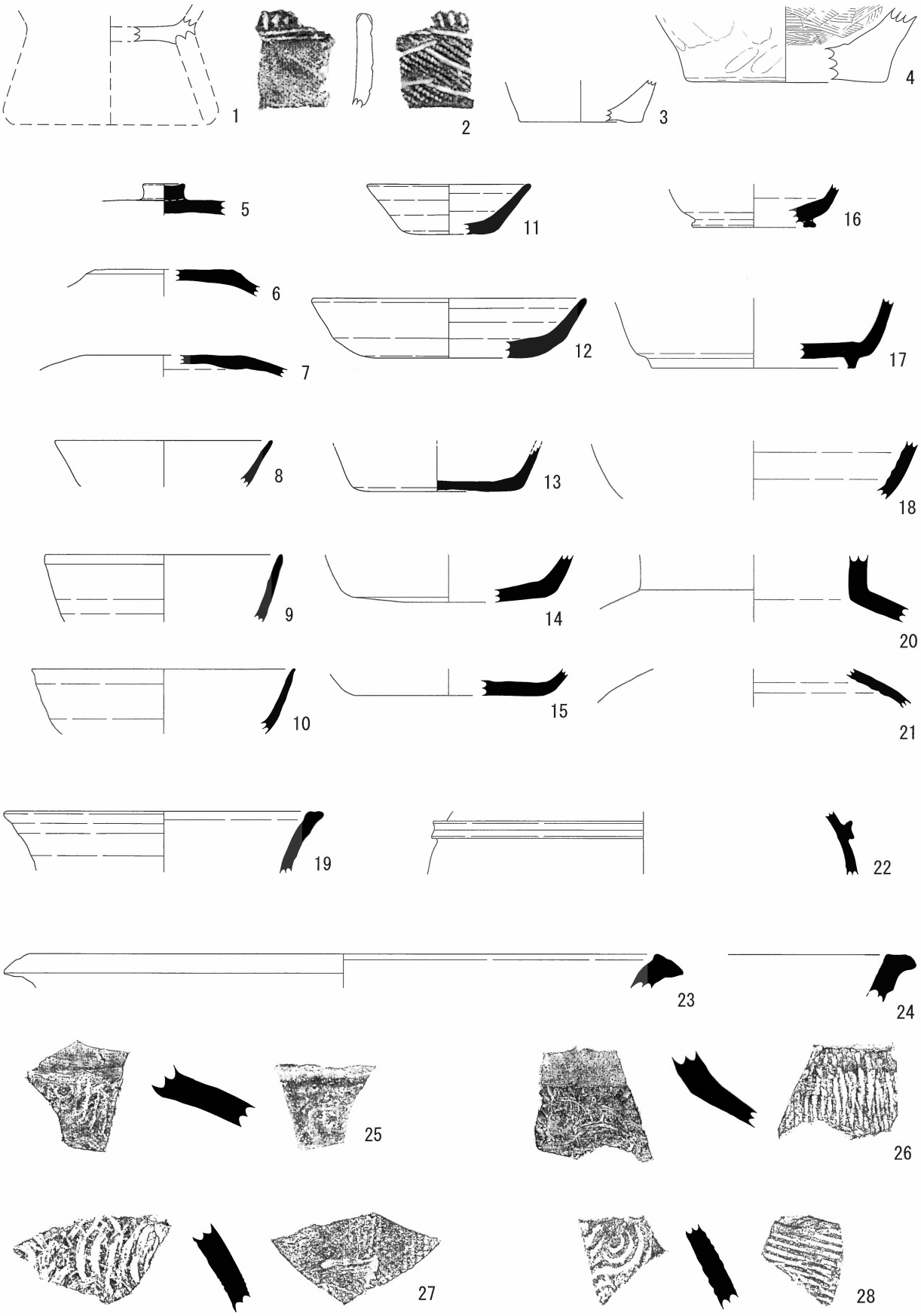
皿は高台付である。51は高台厚が薄い。52は底面回転糸切痕を残し内外面は赤彩される。55は胎土全体が赤い。

小形甕56は、口径12.8㎝の小形甕である。口縁は受け口状に広がり、端部を短く立てる。口唇部内側に稜がつく。57は小形甕の平底で、外面及び底面を広くケズリ仕上げとする。

長胴甕58は、外傾する口縁部の先端面上部を上に摘み上げ、丸く仕上げる。59はやや厚くした口縁部外側をくぼませる。口縁内面には小さく段をつける。これらの長胴甕の口縁形態は9世紀中葉頃の特徴である。

これらは9世紀中頃から10世紀頃を主体とする。このうち49,53は後出的である。

製塩土器（第22図）　60は外面に手捏ね痕が顕著に残る。ぶ厚くバケツ形の製塩土器体部と思わ



第 20 図　2007年度調査出土遺物（１）

れる。古代に属する。ＳＸ 02 出土。

土錘(第 22 図)　62 は樽形を呈する管状土錘で、全面に指頭圧痕を残し、磨滅劣化が著しい。径 1.0cm の貫通孔がある。古代に属する。

(4) 中世 (第 22・23 図)

かわらけ　すべて非ロクロ成形の土師器である。精製された白色胎土の一群と (62 ～ 68, 72, 73, 77, 78, 87) と、雲母・長石・ベンガラ粒等混入物のある褐色系胎土の一群に大別できる。前者の口径は、87 が 14 ｃｍと大きく、それ以外は 8.4 ～ 10.6 ｃｍで 9 ～ 10 ｃｍが多い。後者の口径は、7cm 台の小形品 1 点 (71) の他は全て 9 ～ 13 ｃｍの中形品である。

器形は、器高が低く皿型となる 66, 67 が 14 世紀後半から 15 世紀前半、器壁が薄く、口縁が内湾または外傾する 62 ～ 65, 68 ～ 78, 85 ～ 87 は 15 世紀中頃、口縁端部を短く面取りする 79, 80 は 15 世紀後半、口縁上面を浅くくぼませる 81 ～ 84、口縁部が短く外反する 88 ～ 91 は 16 世紀前半である。16 世紀前半の一群のうち口縁上面のくぼみが大きい 81 は、15 世紀末から 16 世紀初め頃の古相を示す[注1]。

灯明皿への転用は 5 点がある。74・89 は口縁内外面に斑点状に緑青様物質が付着している。

珠洲　92 ～ 95 は片口鉢。92 は 12 本単位の卸し目を四方に引く。93 ～ 95 は卸し目が密である。吉岡康暢による珠洲編年第Ⅳ期頃〔吉岡 1994〕である。96 ～ 102 は大甕。96 は珠洲編年Ⅰ 3 期からⅡ期頃。

白磁　103 は平底で、中国製香炉類か。

青磁　104 は碗の底部で、高台付である。底面も釉が掛かる。釉薬は深緑色で細かいヒビがあることから肥前系とみておく。

瀬戸美濃　105 は口縁が大きくくびれる天目茶碗である。鉄錆釉が掛る。藤澤良祐による古瀬戸編年の中期様式第Ⅲ期頃〔藤澤 2008〕。106 も類似した口縁形態の天目で、口径は一回り大きい。黒味の強い鉄釉で、105 と同時期である。108 は卸皿口縁部である。上端部を摘み上げる。口縁は灰釉が掛る。藤澤編年の中期様式第Ⅲ期、14 世紀前半とみられる。ＳＤ 02 出土。

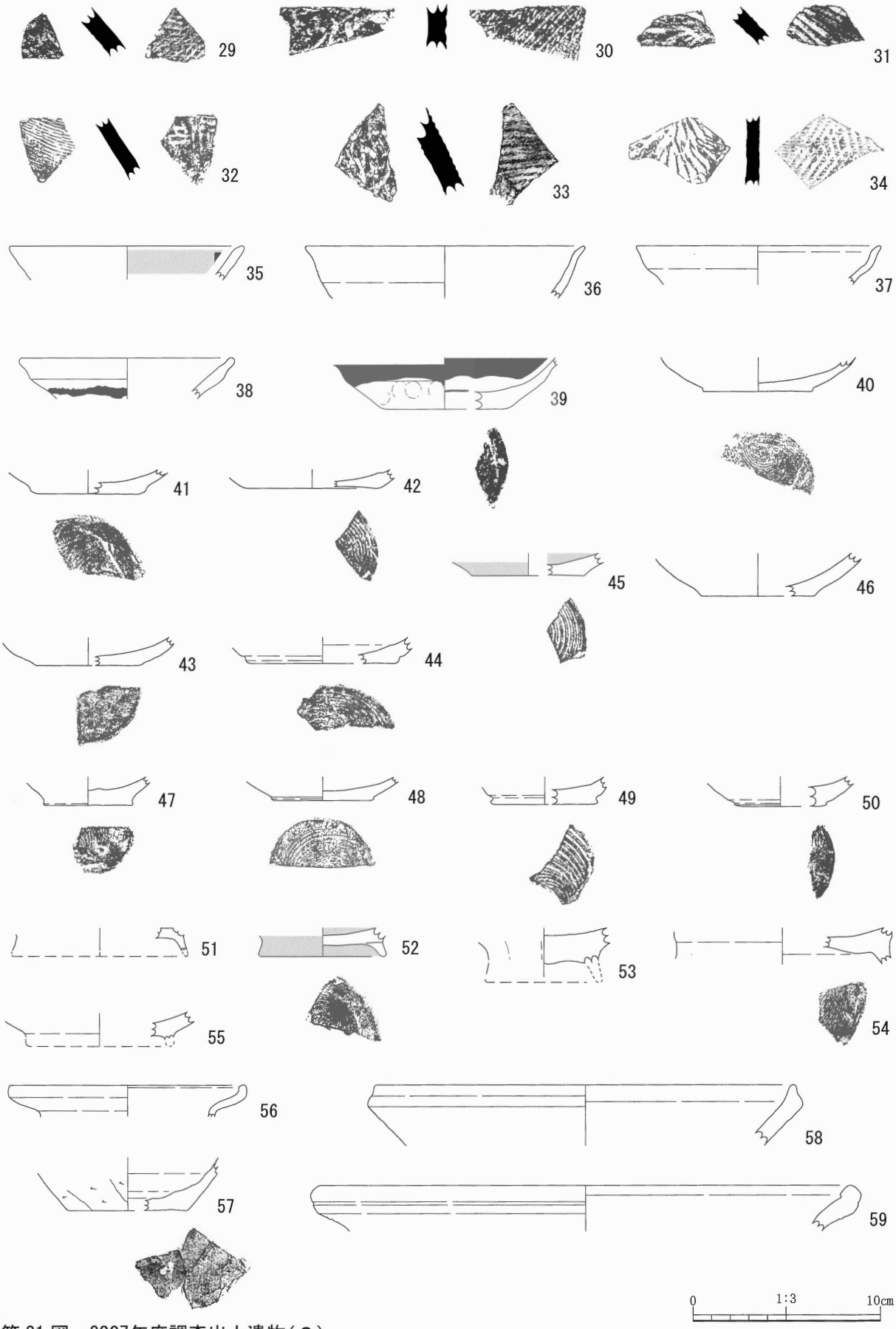
施釉陶器　109 は台付碗の底部か。灰色胎土に灰オリーブ色を呈する灰釉が内・外・底面にも掛る。

漆器　114 は赤漆の椀形品。推定復元径 18cm の中形品である。黒褐色の木地の上に黒色下地層があり、赤漆で仕上げる。口縁は赤漆がはげ落ちている。器壁は 1.5mm と薄く、硬質で高級漆器である。ＳＸ 01 底面出土。

笄　115 は長さ 15.4cm、幅 1.2cm、最大厚 3.5mm、重量 20g、銅製である。竿部は手前に反る。頭部の耳掻はやや内湾する。胴は額を一段彫込み、頭側は眉形、竿側は木瓜形となる。地文は微小な点が連続する魚子地とみられる。胴中央には紋が浮彫される。紋は、丸に三葉の花葉文 2 つを少し重ねている。中央には小さな丸があり、湾曲した線などから三つ柏文とみられる。頭側の紋はつぶれて不鮮明であるが同じ花文と思われる。胴側面の小べりの断面は三角形でシャープである。ＳＸ 01 底面出土。

砥石　116 は肌理の細かい凝灰岩製中砥である。先端面 (実測図の上部) は自然礫面を残す。下底面は折れたままとしている。側面 4 面ともに使用され、実測図正面が最も使用頻度が高く、目減りして中央がくぼみ湾曲している。表面の一部は被熱して黒化している。117 は断面平行四辺形の凝灰岩製仕上砥である。主使用面は中央がややくぼむ。他の 3 面には大ぶりな刃物傷がある。

墨書土器　118 はかわらけの外底面縁部に墨書の一部が残る。隷書体風の漢字の一部とみられるが、解読は困難である。P3 出土。



第 21 図　2007年度調査出土遺物（２）

（5）近世・近代（第23図）

軟質施釉陶器　110は手捏ねの小型壺。内面に指頭痕が薄く残る。内外面明灰緑釉で底部は露胎である。ＳＫ02出土。近代とみられる。

越中瀬戸　111は内禿の鉄釉丸皿である。口縁は短く外反する。外底面を浅く削り小さな高台を残す。

伊万里　112は赤絵皿底部で、見込に牡丹柄を描く。ＳＫ02出土。113は染付皿口縁部で、口縁部に圏線と、外面に唐草を描く。

注

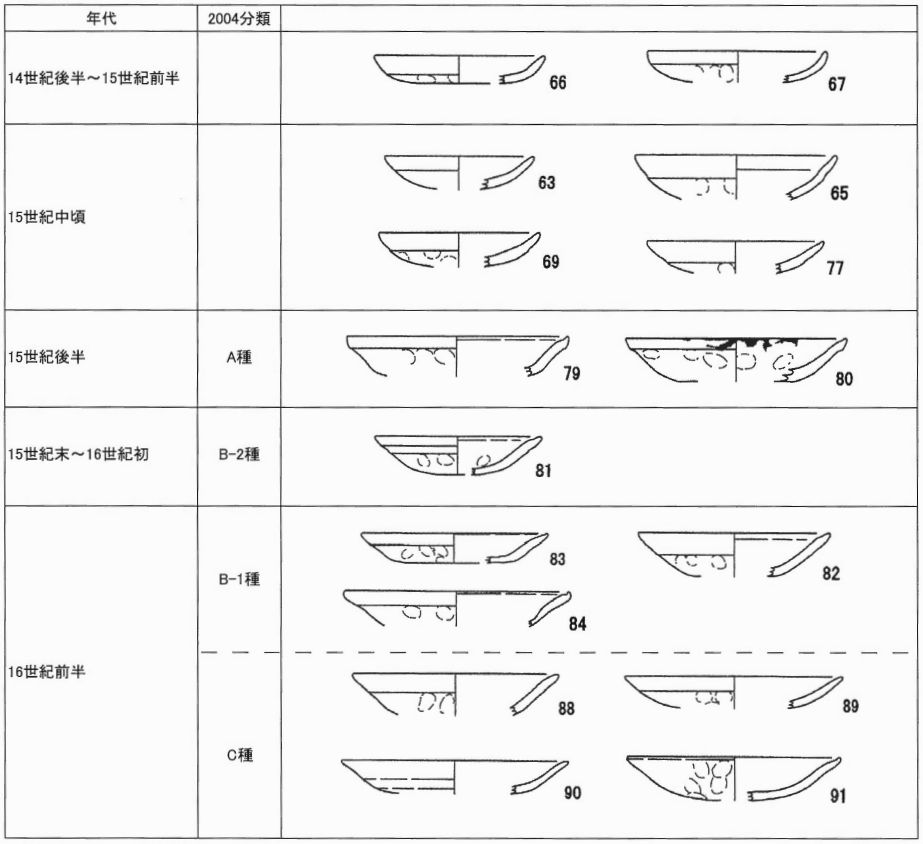
1　富山城本丸出土の17世紀より前のかわらけの分類については、口縁の形態から、Ａ種～Ｄ種に4分類し、Ｂ種を2細分した〔富山市教育委員会2004〕。この分類内容と年代観は以下のとおりである。

Ａ種：端部を短く面取りし、ナデ幅が狭いもの／16世紀第2四半期～第3四半期
Ｂ-1種：端部を上につまみ上げるもの／16世紀第2四半期～第3四半期
Ｂ-2種：端部内面を浅くくぼませるもの／16世紀第2四半期～第3四半期
Ｃ種：端部が丸く、外反気味のもの／16世紀第3四半期～第4四半期
Ｄ種：二段ナデを行うもの／16世紀代

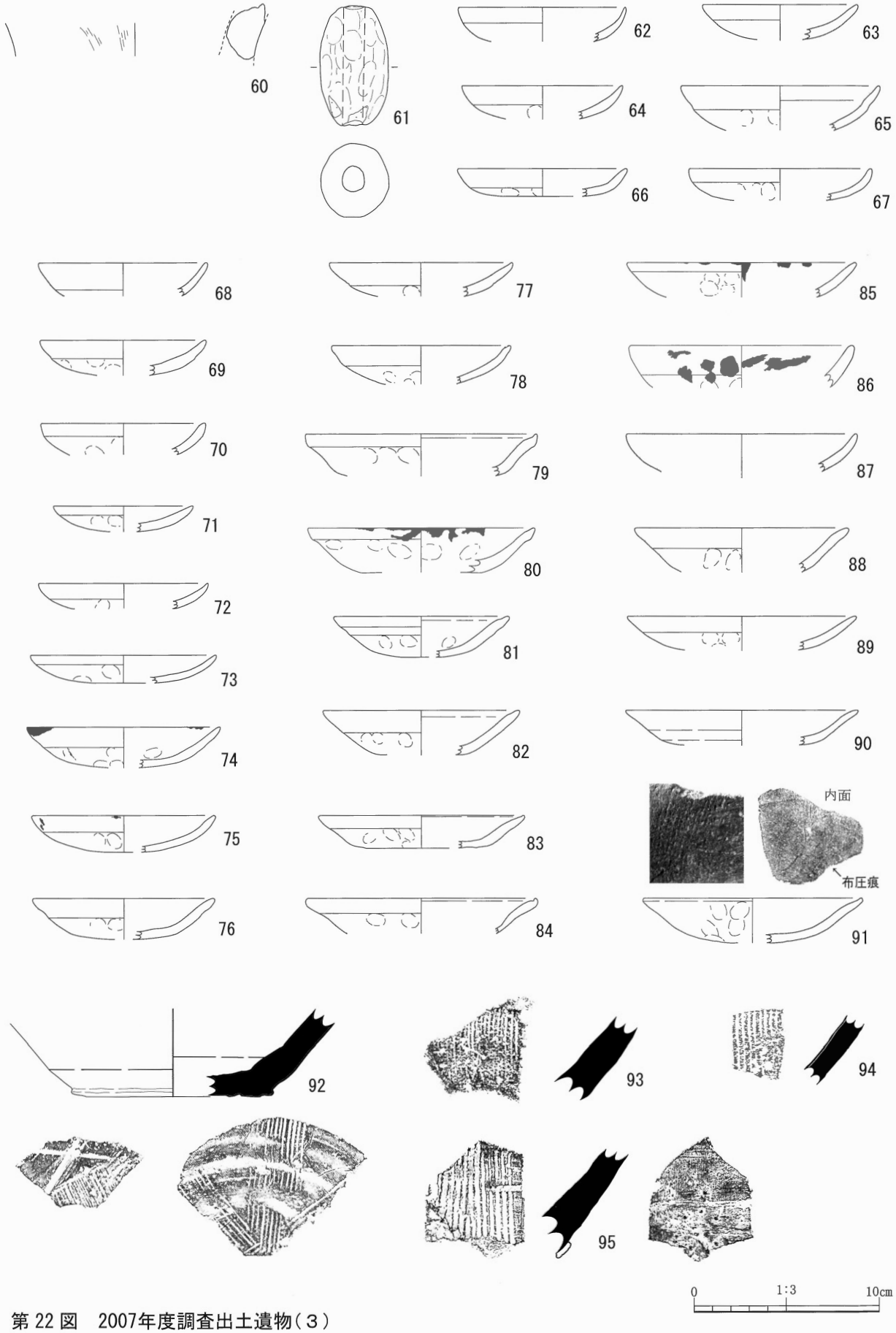
本稿では、この分類を踏襲した上で、中井淳史による京都系土師器の年代観〔中井2004〕と対比し、宮田進一〔宮田1998〕・森隆〔森2000〕・高梨清志〔高梨2006〕らの編年研究に基づいて、年代を見直したものである。

本文で示した年代観を先の分類と対比し、以下のとおり修正する。

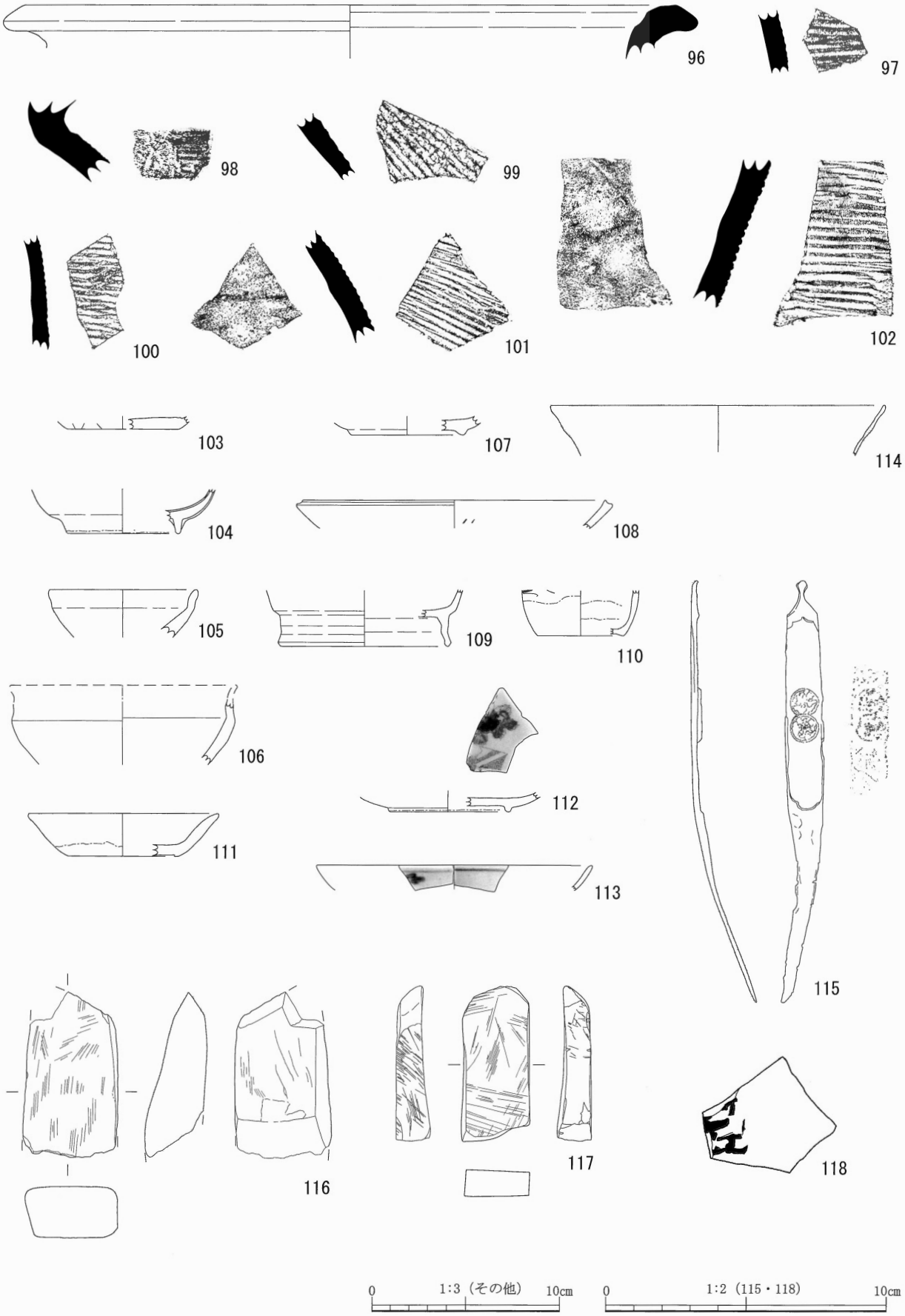
Ａ種：15世紀後半
Ｂ-1種：16世紀前半
Ｂ-2種：15世紀末から16世紀初め
Ｃ種；16世紀前半



中世後期富山城かわらけ編年案(1:4)



第 22 図　2007年度調査出土遺物（３）



第 23 図　2007年度調査出土遺物（４）

第５表（1）　2007年度調査遺物観察表　土器・陶磁器・土製品

番号	出土遺構	種類	器種	法量（cm）			胎土	焼成	釉薬	色調		成形・調整		特記事項
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）				釉	胎土	内面	外面	
1	No. 495	縄文土器	台付深鉢	－	－	(1.5)	良	良			にぶい黄橙 10YR6/3	ナデ	ナデ	台部径（8.8 cm） 1 mm以下の白色・黒色砂粒を多く含む
2	No. 903	弥生土器	甕	－	－	(3.2)	良	良			褐色 10YR4/4	ナデ	ナデ	縄文原体 RL 横方向施文　天王山式
3	地山上部 No. 908	弥生土器	甕	－	6.4	(2.2)	良	良			浅黄橙 10YR8/4	指頭による整形有	指頭による整形有	
4	No. 868	弥生土器	甕		6.7	2.7	良	良			浅黄橙 10YR8/4	斜め方向のハケ	ナデ　指頭押圧	外面やや磨滅
5	No. 691	須恵器	杯蓋		つまみ径 2.2		良	良			灰白色 2.5Y7/1	ロクロナデ	ヘラ切り　つまみ貼付のちロクロナデ	転用硯か？
6	SK02 No. 183	須恵器	杯蓋	－	－	(1.4)	良	良			灰 N6/	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ	ツマミ欠損
7	No. 525	須恵器	杯蓋	－	7.2	(1.1)	良	良	自然釉（外面）	灰 N6/	灰 5Y5/1	ロクロナデ	ロクロナデ	
8	下層包 No. 916	須恵器	蓋身	11.4	－	(2.4)	良	良			灰 N5/	ロクロナデ	ロクロナデ	
9	下層包 No. 947	須恵器	坏身	12.4	－	(3.5)	良	良			灰 N6/	ロクロナデ	ロクロナデ	
10	No. 775	須恵器	杯身	13.9	－	(3.4)	良	良			灰 N6/	ロクロナデ	ロクロナデ	
11	No. 823	須恵器	杯身	8.5	4.9	2.6	良	良			灰白 5Y7/1	ロクロナデ	ロクロナデ	
12	No. 544	須恵器	杯身	14.4	9.0	3.2	不良	不良			灰白 10YR7/1	ロクロナデ	ロクロナデ	底部ヘラ切り
13	No. 694	須恵器	杯身	－	8.6	2.3	良	良			灰 N6/	ロクロナデ	ロクロナデ	底部ヘラ切り
14	下層包 No. 987	須恵器	杯身	－	10.1	(2.5)	良	良			灰 7.5Y6/1	ロクロナデ	ロクロナデ	
15	SX02 No. 929	須恵器	杯身	－	10.0	(1.4)	良	良			灰白 5Y8/1	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	
16	SX01 No. 617	須恵器	杯身	－	6.5	(2.3)	良	良			灰 N5/	ロクロナデ	ロクロナデ	
17	下層包 971	須恵器	杯身	－	10.8	(3.7)	良	良			灰 N6/	ロクロナデ	ロクロナデ	
18	No. 845	須恵器	壺	－	－	(3.1)	良	良			灰 N6/	ロクロナデ	ロクロナデ	
19	SX01 No. 601	須恵器	甕	16.8	－	(3.1)	良	良			灰白 5Y8/1	ロクロナデ	ロクロナデ	
20	P25 No. 689	須恵器	壺	－	－	(3.5)	良	良			青灰 N5/1	ロクロナデ	ロクロナデ	頸部径 10.2 cm
21	No. 839	須恵器	壺	－	－	(2.0)	良	良	自然釉	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	ロクロナデ	ロクロナデ	
22	SX02 No. 945	須恵器	双耳瓶	－	－	(3.3)	良	良			灰 N6/	ロクロナデ	ロクロナデ	
23	SX02 No. 936	須恵器	甕	33.0	－	(1.8)	良	良			灰白 N7/	ロクロナデ	ロクロナデ	
24	No. 402	須恵器	甕	－	－	－	良	良			灰白 5Y7/1	ロクロナデ	ロクロナデ	降灰
25	No. 482	須恵器	甕	－	－	(3.2)	良	良	自然釉（外面）	褐灰 10YR6/1	褐灰 10YR6/1	同心円文当て具痕	平行タタキ	
26	No. 487	須恵器	甕	－	－	(4.0)	良	良	自然釉（外面）	灰白 2.5Y7/1	灰 7.5Y6/1	回転ナデ、同心円文当て具痕	平行タタキ	
27	下層包 No. 779	須恵器	甕	－	－	(4.7)	良	不良			灰黄 2.5Y7/2	同心円文当て具痕	格子タタキ	
28	No. 312	須恵器	甕	－	－	(4.5)	良	不良			灰白 5Y8/1	同心円文当て具痕	タタキ	酸化による白色化
29	SK02 No. 211	須恵器	甕	－	－	(2.6)	良	良			灰 N4/	同心円文当て具痕	平行タタキ	
30	No. 967	須恵器	甕	－	－	(2.4)	良	良			灰 N6/	同心円文当て具痕	平行タタキ	
31	No. 827	須恵器	甕	－	－	(2.0)	良	良			灰 N4/	同心円文当て具痕	平行タタキ	
32	SD04 No. 582	土師器	甕	－	－	(3.3)	良	良			にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	平行タタキ	
33	No. 506	須恵器	甕	－	－	(4.7)	良	良			黄灰 2.5Y5/1	同心円文当て具痕	タタキ	
34	No. 815	須恵器	甕	－	－	－	良	良			灰 N5/	扇状文当て具痕	平行タタキ	
35	No. 854	土師器	椀	12.6	－	(1.8)	良	良			にぶい黄橙 10YR6/4	ロクロナデ	ロクロナデ	内面 赤彩
36	排土中	土師器	椀	15.0	－	(2.8)	良	良			橙 5YR7/6	ロクロナデ	ロクロナデ	
37	No. 853	土師器	椀	13.0	－	(2.1)	良	良			灰白 10YR8/2	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面 赤彩
38	No. 412	土師器	かわらけ	11.4	－	(2.2)	良	良			浅黄橙 10YR8/3	ヨコナデ	ヨコナデ	1mm 前後の長石含む 外面 煤付着
39	下層包 No. 795	土師器（ロクロ成形）	かわらけ（灯明皿）	－	6.2	(2.8)	良	良			にぶい黄 2.5Y6/3	ロクロナデ	ロクロナデ、指頭圧痕	内外面 油煙付着 底部 回転糸切痕
40	下層包 東部	土師器	椀	－	5.8	(1.8)	良	良			にぶい黄橙 7.5YR7/4	ロクロナデ	ロクロナデ	底部 回転糸切痕 44 と同一個体
41	下層包 No. 778	土師器	椀	－	6.1	(1.3)	良	良			浅黄橙 10YR8/4	ロクロナデ	ロクロナデ	底部 回転糸切痕

番号	出土遺構	種類	器種	法量（cm）			胎土	焼成	釉薬	色調		成形・調整		特記事項
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）				釉	胎土	内面	外面	
42	SK12 No. 670	土師器	椀	－	7.0	(1.0)	良	不良			にぶい橙 7.5YR7/4	ロクロナデ	ロクロナデ	底部 回転糸切痕
43	SX02 No. 800	土師器	椀	－	5.6	(1.5)	良	良			橙 5YR6/6	ヘラミガキ	ロクロナデ	底部 回転糸切痕
44	SX01	土師器	椀	－	5.0	(1.3)	良	良			橙 7.5YR7/6	ロクロナデ	ロクロナデ	底部 回転糸切痕 40と同一個体
45	No. 841	土師器	椀	－	6.0	(1.2)	良	良			にぶい橙 10YR7/3	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面 赤彩 底部 回転糸切痕
46	下層包 No. 913	土師器	椀	－	6.1	(2.3)	良	良			浅黄橙 7.5YR8/4	ロクロナデ	ロクロナデ	底面 回転糸切痕 被熱により赤化
47	No. 859	土師器	椀	－	4.8	(1.5)	良	良			灰白 10YR8/2	ロクロナデ	ロクロナデ	底部 回転糸切痕
48	No. 723	土師器	椀	－	8.0	(1.4)	良	良			にぶい黄橙 10YR7/3	ロクロナデ	ロクロナデ	底部 回転糸切痕
49	下層包 No. 727	土師器	椀	－	5.7	(1.5)	良	良			浅黄 2.5Y7/3	ロクロナデ ナデのちヘラミガキ	ロクロナデ	底部 回転糸切痕
50	下層包 No. 905	土師器	椀	－	5.0	(1.6)	良	良			淡黄 2.5Y8/3	ロクロナデ	ロクロナデ	底部 回転糸切痕
51	No. 880	土師器	台付皿	－	9.4	(1.5)	良	良			灰白 10YR8/2	ロクロナデ	ロクロナデ	実測番号 箱 10－No. 199と同一
52	下層包 No. 911	土師器	台付皿	－	6.8	(1.5)	良	良			浅黄橙 10YR8/3	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面 赤彩 底部 回転糸切痕
53	No. 171	土師器	台付椀	－	－	(1.9)	良	良			灰白 10YR8/2	ナデ	ケズリ	1㎜前後の白色砂粒
54	No. 023	土師器	台付椀	－	11.5	(1.9)	良	良			にぶい黄橙 10YR7/4	ロクロナデ	ロクロナデ	底部 回転糸切痕
55	No. 591	土師器	台付皿	－	8.0	(1.9)	良	良			橙 5YR7/6	摩滅のため不明	摩滅のため不明	
56	No. 428	土師器	小型甕	12.8	－	(1.7)	良	良			橙 7.5YR6/6	ヨコナデ	ヨコナデ	
57	No. 834	土師器	小型甕	－	6.4	(2.9)	良	良			にぶい黄橙 10YR6/3	ロクロナデ	ケズリ	ロクロ成形 底面 ヘラ切り
58	No. 710	土師器	長胴甕	22.2	－	(3.3)	良	良			灰白 2.5Y8/2	ロクロナデ	ロクロナデ	
59	No. 846	土師器	長胴甕	29.6	－	(2.4)	良	良			にぶい黄橙 10YR7/3	ロクロナデ	ロクロナデ	
60	SX02 No. 830	製塩土器	－	－	－	(1.8)	良	良			明赤褐 5YR5/8	－	ハケメ	5㎜以下の長石、石英多く含む
61	No. 858	土錘	管状	6.5	4.0	3.7	不良	不良			浅黄橙 10YR8/3	－	指頭圧痕	外面磨滅
62	No. 540	土師器	かわらけ	9.2	－	(1.9)	良	良			浅黄橙 10YR8/3	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	白色
63	No. 535	土師器	かわらけ	8.4	－	(1.9)	良	良			灰白 10YR8/1	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	白色
64	No. 310	土師器	かわらけ	8.8	－	(1.8)	良	良			灰白 10YR8/2	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	白色
65	No. 768	土師器	かわらけ	10.6	－	(2.4)	良	良			灰白 10YR8/1	ヨコナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	白色 やや軟質
66	No. 526	土師器	かわらけ	9.2	4.3	1.5	良	良			灰白 10YR8/1	ヨコナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	白色 やや軟質
67	下層包 No. 765	土師器	かわらけ	9.9	－	(1.7)	良	良			灰白 10YR8/1	ヨコナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	白色系
68	No. 285	土師器	かわらけ	9.2	－	(1.8)	良	良			灰白 10YR8/1	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	白色系
69	No. 300	土師器	かわらけ	9.0	－	(1.9)	良	良			灰白 10YR8/2	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	
70	SD01 No. 199	土師器	かわらけ	9.0	－	(1.7)	良	良			にぶい橙 7.5YR7/4	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	
71	SK18 No. 927	土師器	かわらけ	7.6	－	(1.4)	良	良			浅黄橙 7.5YR8/6	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	
72	No. 324	土師器	かわらけ	9.2	－	1.8	良				灰白 10YR8/1	ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	白色 やや軟質
73	No. 379	土師器	かわらけ	10.0	3.4	1.5	良				灰白 10YR8/1	ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	白色 やや軟質
74	No. 640	土師器	かわらけ（灯明皿）	10.2	－	2.2	良	良			暗灰黄 2.5Y5/2	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	口縁端部 油煙付着 全体に黒化 内外面 緑色付着物有
75	No. 528	土師器	かわらけ（灯明皿）	10.0	2.6	2.0	良	良			灰白 2.5Y8/2	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	外面 油煙付着 被熱している
76	No. 398	土師器	かわらけ	9.9	－	2.2	良	良			にぶい黄橙 10YR7/3	ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	
77	No. 542	土師器	かわらけ	10.0	－	(1.8)	良	良			灰白 10YR8/2	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	
78	No. 816	土師器	かわらけ	9.8	－	(2.1)	良	良			灰白 10YR8/1	ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	
79	SK03 No. 135	土師器	かわらけ	12.6	－	(2.3)	良	良			にぶい黄橙 10YR7/2	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	
80	No. 065	土師器	かわらけ（灯明皿）	12.3	－	2.4	良	良			にぶい黄橙 10YR7/3	ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕	ヨコナデ、指頭圧痕	口縁端部 油煙付着 外面 熱剥落有
81	No. 408	土師器	かわらけ	9.5	－	2.2	良	良			にぶい橙 7.5YR7/4	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ（2段ナデ）指頭圧痕	下半 被熱している（赤化）
82	No. 637	土師器	かわらけ	10.6	－	(2.4)	良	良			にぶい黄橙 10YR7/3	ヨコナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	
83	No. 371	土師器	かわらけ	11.2	－	1.8	良	良			灰白 2.5Y7/1	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	内外面 黒斑あり（二次被熱）

番号	出土遺構	種類	器種	法量（cm）			胎土	焼成	釉薬	色調		成形・調整		特記事項
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）				釉	胎土	内面	外面	
84	No. 082	土師器	かわらけ	12.6	－	(1.9)	良	良			にぶい黄橙 10YR7/4	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	
85	No. 356	土師器	かわらけ（灯明皿）	12.4	－	(1.9)	良	良			灰白 10YR8/1	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	口唇部 油煙付着
86	No. 003	土師器	かわらけ（灯明皿）	12.2	－	(2.3)	良	良			灰白 2.5Y8/1	ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	内外面 油煙付着
87	No. 469	土師器	かわらけ	14.0	－	(2.4)	良	良			灰白 2.5Y8/2	摩滅のため不明	摩滅のため不明	白色系
88	SX01 木炭層直上 No. 636	土師器	かわらけ	11.8	－	(1.9)	良	良			灰白 2.5Y8/2	ヨコナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	
89	SX01 木炭層直上 No. 631	土師器	かわらけ	12.4	－	(1.9)	良	良			暗灰黄 2.5Y6/3	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	内外面口縁付近 銅付着？ 焼成時黒斑？
90	No. 295	土師器	かわらけ	12.6	－	(1.9)	良	良			橙 5YR7/6	ロクロナデ	ロクロナデ	被熱による赤化
91	No. 019	土師器	かわらけ	11.8	－	(2.4)	良	良			にぶい黄橙 10YR7/4	ヨコナデ 布によるナデ	ヨコナデ、指頭圧痕	内外面 黒斑、内底面に布圧痕
92	No. 395	珠洲	片口鉢（擂鉢）	－	11.0	1.3	良	良			灰 5Y6/1	ロクロナデ 卸し目 12 本×8 条	ロクロナデ	底面ヘラ切り
93	SK02 No. 219	珠洲	擂鉢	－	－	(4.6)	良	良好			黄灰 2.5Y6/1	卸し目（15 本以上、4 本／cm）	ロクロナデ	海綿骨針を含む
94	SX01 肩部 No. 634	珠洲	片口鉢（擂鉢）	－	－	(3.7)	良	良			灰 7.5Y6/1	卸し目（8 本以上、3 本／cm）	ロクロナデ	内面 煤付着（部分的）
95	No. 244	珠洲	片口鉢（擂鉢）	－	－	(5.7)	良	良好			にぶい赤褐 5YR5/4	卸し目（13 本以上、3 本／cm）	ロクロナデ	内外面全体 被熱赤化している
96	No. 576	珠洲	甕	37.2	－	(2.9)	良	良			灰 N6/	ロクロナデ	ロクロナデ	吉岡編年Ⅰ2-Ⅰ3 期
97	SD02 No. 396	珠洲	甕	－	－	(3.4)	良	良			灰 N5/	当て具痕	平行タタキ	海綿骨針を含む
98	No. 314	珠洲	甕	－	－	(4.4)	良	良			灰白 N7/	ナデ	ナデ、タタキ	被熱による破砕
99	SX01 No. 669	珠洲	甕	－	－		良	良			灰 N5/	当て具痕	平行タタキ	海綿骨針少量含む
100	No. 636	珠洲	壺 or 甕	－	－	(6.1)	良	不良			黄灰 2.5Y6/1	当て具痕	平行タタキ	
101	No. 381	珠洲	甕	－	－	(6.0)	良	良			灰 N4/	当て具痕	平行タタキ	海綿骨針を多く含む
102	No. 277	珠洲	甕	－	－	(7.0)	良	良			灰 N5/	当て具痕	平行タタキ	海綿骨針を少し含む
103	No. 503	白磁	皿	－	6.0	(0.7)	良	良		灰白 5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	ロクロナデ	ロクロナデ	
104	No. 490	青磁	碗	－	6.0	(2.4)	良	良		灰オリーブ 10Y4/2	灰白 10Y8/1	ロクロナデ	ロクロナデ	肥前？
105	No. 390	瀬戸美濃	小碗（天目）	8.0	－	(2.6)	良	良	鉄釉	黒 10YR2/1	にぶい橙 5YR6/3	ロクロナデ	ロクロナデ	
106	No. 082	瀬戸美濃	碗（天目）	12.2	－	(4.3)	良	良	鉄釉（黒釉）	黒褐 10YR2/2	灰白 5Y7/1	ロクロナデ	ロクロナデ	
107	No. 162	瀬戸美濃	碗	－	6.0	(1.0)	良	良	灰釉	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/4	ロクロナデ	ロクロナデ	
108	SD02 No. 394	瀬戸美濃	卸皿	16.0	－	(1.5)	良	良	灰釉	灰オリーブ 7.5Y6/2	にぶい黄橙 10YR7/3	ロクロナデ 卸し目あり（2 条残）	ロクロナデ	
109	No. 764	施釉陶器	台付鉢？	－	9.0	(3.0)	良	良	灰釉	灰オリーブ 5Y5/3	灰 5Y6/2	ロクロナデ	ロクロナデ	
110	SK02 No. 140 No. 043	軟質施釉陶器	小型壺	－	4.6	(2.4)	良	良	灰釉	浅黄 5Y7/3 暗赤褐 5YR3/2 明緑灰 10GY8/1	浅黄橙 10YR8/2	ロクロナデ	ロクロナデ	上面断面に一部釉ずれあり 段差有？
111	No. 093	越中瀬戸	皿	10.2	5.8	2.3	良	良	鉄釉	黒 10YR2/1	にぶい黄橙 10YR7/3	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロヘラケズリ	
112	SK02 No. 151	瀬戸系	色絵皿	－	6.5	(1.1)	良	良	色絵（手書き）	灰白 N8/	灰白 N8/	ロクロナデ	ロクロナデ	
113	No. 046	伊万里	染付皿	14.6	－	(1.3)	良	良	透明釉	灰白 N8/	灰白 7.5Y6/1	ロクロナデ	ロクロナデ	
118	No. 93	土師器	かわらけ	－	－	－	良	良			にぶい黄 2.5Y6/4	ナデ	ナデ	底外面に漢字墨書

第５表 (2)　2007年度調査遺物観察表　木器

番号	出土遺構	種 類	器 種	法量 (cm)			重量 (g)	樹種	特記事項
				長さ	幅	厚さ			
114	SX01 下層 木炭層下面 No. 713	木器	漆器			0.1			口径 17.8 cm　器高 (2.7 cm) 中世

第５表 (3)　2007年度調査遺物観察表　石器

番号	出土遺構	種 類	器 種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	特記事項
				長さ	幅	厚さ			
116	No. 641	石器	砥石	8.35	3.70	1.80	80.0	凝灰岩	3 面に煤付着　4 面砥
117	No. 865	石器	砥石	(8.8)	5.0	2.9	186.1	凝灰岩	被熱による赤化、破損

第５表 (4)　2007年度調査遺物観察表　金属器

番号	出土遺構	種 類	器 種	法量 (cm)			重量 (g)	材質	特記事項
				長さ	幅	厚さ			
115	SX01 No. 610	金属器	笄	15.4	1.3	0.3	19	銅	魚子地に三つ柏文浮彫

第５節　自然科学分析

（1）炭化種実同定

1. はじめに

室町期くぼ地ＳＸ 01 から得られた炭化種実について報告する。

2. 試料と方法

試料は、平成 19 年度調査区で検出された富山城本丸東部土塁下の細長いくぼ地（ＳＸ 01）の堆積物を水洗した 4 試料である。ＳＸ 01 は深さ約 40cm で、炭化種実は底面付近に約 5cm の厚さで堆積した多量の木炭や灰、木質遺物とともに出土した。遺構の時期は、室町期（15 世紀代）と推定されている。

試料の採取および水洗は、富山市教育委員会が行った。水洗には、約 1.5mm 目の篩が用いられた。水洗量は不明である。炭化種実の抽出および同定は、実体顕微鏡下で行った。

3. 結果

同定の結果、木本植物は含まれておらず、草本植物のダイズ炭化種子と、エンドウ属炭化種子、ササゲ属アズキ亜属炭化種子、ササゲ属ササゲ亜属炭化種子、ヒエ炭化有ふ果、イネ炭化籾・炭化種子、オオムギ炭化種子、コムギ炭化種子の 8 分類群が得られた（第 6 表）。このほかに、分類群不明の炭化冬芽が得られた。

第 6 表　炭化種実（括弧内は破片数）

	遺構名	SX01			
	試料 No.	127	128	129	130
	時期	15 世紀代			
分類群	水洗量	不明			
ダイズ	炭化種子	27 (12)		18	3 (19)
エンドウ属	炭化種子				2
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子		1	1	
ササゲ属ササゲ亜属	炭化種子		(1)	1	
ヒエ	炭化有ふ果				1
イネ	炭化籾		1		39 (3)
	炭化種子		1		445 (85)
オオムギ	炭化種子				1
コムギ	炭化種子				21 (3)
不明	炭化冬芽		1		

4 試料をあわせると、イネが最も多く、ダイズがやや多く、コムギが少量、エンドウ属とアズキ亜属、ササゲ亜属、ヒエ、オオムギがわずかに得られた。

以下、炭化種実について記載し、図版を示して同定の根拠とする。

①ダイズ　*Glycine max*（L.）Merr. subsp. max　炭化種子　マメ科

変形しているが、上面観は楕円形、側面観は長楕円形。臍は全長の 1/3 未満で、楕円形。小畑ほか（2007）に示された、中央の縦溝（hilar groove）と周囲の隆線（rim-aril）というダイズ属の特徴が認められる。長さ 9.0mm、幅 6.2mm、厚さ 5.5mm。臍の大きさは、長さ 2.65mm、幅は 1.35mm。小畑（2008）に示された現生種と大きさを比較すると、栽培種の大きさである。図版に掲載した個体以外は、発泡が著しく計測できなかった。

②エンドウ属　*Pisum* sp.　炭化種子　マメ科

上面観は楕円形、側面観は円形。腹側は角が丸い方形。臍は全長の 1/2 程度で楕円形、中央に付く。臍は小畑（2008）で分類された、中央の縦溝（hilar groove）があり、周囲に隆線（rim-aril）が認められる露出タイプである。長さ 1.7mm、幅 2.0mm、厚さ 1.8mm（図版）と、長さ 1.6mm、幅 1.6mm、厚さ 2.0mm。

③ササゲ属アズキ亜属　*Vigna* subgenus *Caratotropis*　炭化種子　マメ科

上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。臍がない個体と、小畑ほか（2007）に示

されたアズキ亜属の特徴である長楕円形の臍の内部の厚膜（Epihilum）が残存している個体がある。臍は全長の半分から2/3ほどの長さで、片側に寄る。小畑（2008）に示された現生種と大きさを比較すると、栽培種のアズキと野生種のヤブツルアズキなど双方を含む大きさである。長さ4.8mm、幅3.5mm、厚さ3.5mm（第24図）と、長さ4.8mm、幅3.2mm、厚さ2.8mm。

④ササゲ属ササゲ亜属 *Vigna* subgenus *Vigna*　炭化種子　マメ科

上面観は楕円形、側面観は腎臓形。腹面の臍は残存しておらず痕跡しかないが、長楕円形で全長の1/2未満、腹面の中心からずれて付く。長さ5.9mm、幅3.4mm、厚さ3.2mm(図版)と長さ6.0mm、幅3.8mm(半割)。

⑤ヒエ *Echinochloa esculenta*（A.Braun）H.Scholz　炭化有ふ果　イネ科

楕円形。先端と基部はやや尖り、内穎は膨らまない。縦方向に微細な筋がある。壁は薄く、光沢がある。胚は幅が広く、長さは全長の2/3程度と長い。長さ2.6mm、幅1.7mm。図版に示した個体は発泡している。

⑥イネ *Oryza sativa* L.　炭化籾・炭化種子（頴果）　イネ科

籾は側面観が長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。上半部にはふ毛の痕跡が複数ある。長さ6.5mm、幅2.9mm。種子は上面観が両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が残り、両面に縦方向の2本の浅い溝がある。計測可能な10点の種子の大きさは、長さ4.1～5.0（平均4.5±0.2）mm、幅2.4～2.8（平均2.6±0.1）mm。

⑦オオムギ *Hordeum vulgare* L.　炭化種子（頴果）　イネ科

側面観は長楕円形、腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面は楕円形である。長さ5.0mm、幅2.4mm、厚さ2.0mm。

⑧コムギ（パンコムギ）*Triticum aestivum* L.　炭化種子（頴果）　イネ科

変形により状態は悪いが、上面観・側面観共に楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸っこい形状である。断面形状は腹面側が窪み、背面側が円形となる。またコムギの場合、側面観で最も背の高い部分（幅の広い部分）が基部付近に来る。コムギ属にはパンコムギやマカロニコムギなど複数種あるが、一般的に日本産コムギと呼称しているのはパンコムギである。ここでは一般的な呼称で記載した。長さ4.0mm、幅2.7mm、厚さ2.2mm。

⑨不明　Unknown winter bud　炭化冬芽

上面観は円形、側面観は長腎形。基部は円形で厚みがある。表面は平滑。長さ7.3mm、幅2.8mm。

4. 考察

室町期の細長いくぼ地ＳＸ01から得られた炭化種実を検討した結果、多量の穀類が得られた。栽培植物では、ダイズとササゲ亜属、エンドウ属、ヒエ、イネ、オオムギ、コムギが得られた。イネの産出部位は種子が多いが、イネ種子の大多数には胚が残っており、籾の状態で保管されていた可能性がある。アズキ亜属については、栽培種か野生種かを大きさから判断はできなかった。ササゲ属とエンドウ属は現在の栽培種よりもやや小さいが、野生種は日本列島に存在しないため、栽培種のササゲとエンドウと考えられる。ササゲはアフリカで栽培化され、9世紀以前には日本に導入されていたと考えられている〔星川1981〕。現状では、遺跡でのササゲ亜属の確認例は非常に少ないため、マメ類の利用を考える上で重要である。

今回の試料は、産出数でみるとイネが多いものの、多種類の穀類を保管していた場所が熱を受け、くぼ地内に堆積した可能性や、片付けもしくは廃棄により堆積した可能性などが考えられる。ただし、

スケール 1a-b, 2a-b, 3a-c, 4-10：1mm, 1c, 2c, 3dは任意

1. ダイズ炭化種子（No. 127）、2. エンドウ属炭化種子（No. 130）、3. ササゲ属アズキ亜属炭化種子（No. 129）、4. ササゲ属ササゲ亜属炭化種子（No. 129）、5. ヒエ炭化有ふ果（No. 130）、6. イネ炭化籾（No. 130）、7. イネ炭化種子（No. 130）、8. オオムギ炭化種子（No. 130）、9. コムギ炭化種子（No. 130）、10. 不明炭化冬芽（No. 128）

第24図　炭化種実

今回水洗に用いられた篩の目の大きさは1.5mm目であったため、1.5mm以下の小さい穀類（アワなど）は検出されなかった可能性がある。

室町期（15世紀代）の試料で、一括性が高く、多種類の穀類利用が明らかに分かる例は少ない。特に複数のマメ類が検出された事例はこれまでにほとんどなく、当時の穀類利用を考える上で今回の例は重要な事例になると考えられる。

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（株式会社パレオ・ラボ）

（2）動物遺体同定

1. はじめに

室町期くぼ地ＳＸ01から得られた動物遺体の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

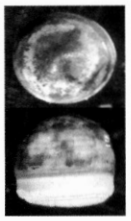
試料は、富山城本丸東部土塁下の細長いくぼ地ＳＸ01内の底面付近から多量の木炭・灰・木質とともに出土した動物遺体である。動物遺体は、1.5mmメッシュの篩による水洗で回収された。試料の同定は実体顕微鏡下で現生標本との比較により行った。

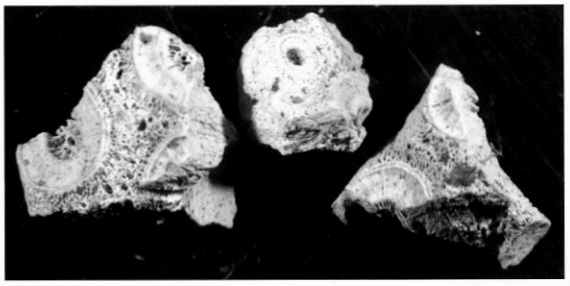
3. 結果と考察

試料のほとんどはよく焼けて白くなっていた。試料を同定した結果、硬骨魚綱（Osteichthyes）の一種、タイ科(Sparidae)の一種、昆虫綱(Insecta)の一種が同定された。その他に哺乳綱(Mammalia)の可能性がある骨片が見られた。

タイ科は、歯1点、前上顎骨あるいは歯骨の破片3点が見られた。タイ科は海産魚類で、マダイやクロダイなどがある。焼けているため、調理後の残滓と考えられ、ＳＸ01に廃棄されたのであろう。

中村賢太郎（株式会社パレオ・ラボ）


1


2

3

1mm

1. タイ科歯　2. タイ科前上顎骨／歯骨　3. 昆虫綱上翅

第25図　動物遺体

（3）昆虫同定

1. 試料

試料は、室町期くぼ地ＳＸ01から出土した昆虫遺体2試料である。

なお、1試料中に複数の昆虫遺体が確認されたTYJ　ＳＸ01底面試料については、個々に仮No.を付して扱う。

2. 分析方法

双眼実体顕微鏡等を用いて種類を同定し、分析後は、種類別に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液で液浸し、保管する。同定に関しては松本浩一氏（東京農業大学）の協力を得ている。また、植物遺体片については、試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照から、種類と部位を同定する。

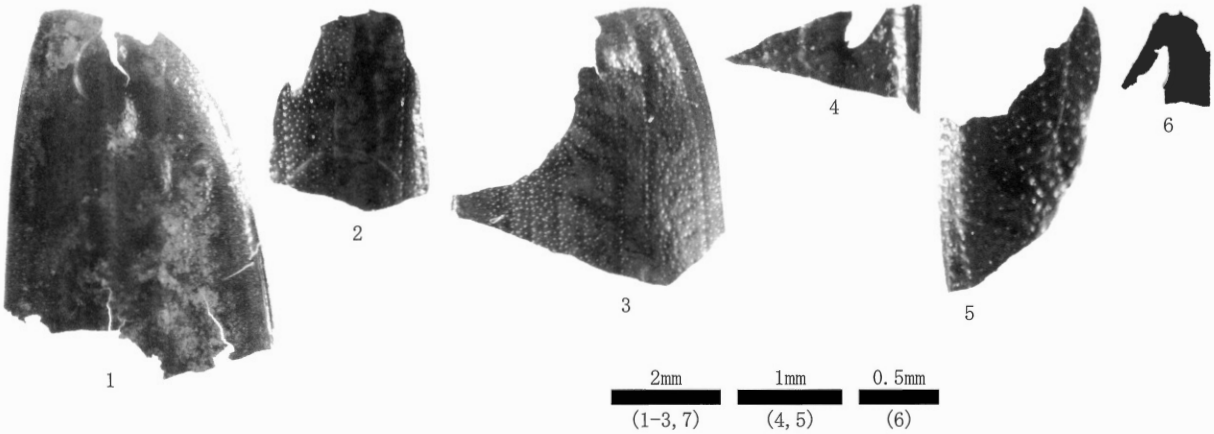
3. 結果

結果を第7表に示す。No.1～5は光沢・色彩および状線の点刻の形状と位置から、コガネムシ科サクラコガネの上翅に同定された。なお、No.4・5は小破片であったため種の特徴が見いだせなかったが、No.2-3と同一個体と推定したためこの結果となった。本種は現在では日本各地に広く分布する普通種であり、平地から低山地の森林および開墾地などに見られる。幼虫は植物の根を食べ、成虫は地上部の葉などを餌とする。仮No.7は微小な破片であったため、目および部位の同定は困難であった。

松本浩一（東京農業大学）、田中義文、高橋　敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）

第7表　昆虫同定結果

試料名	No.	目名	科名	種名	部位
TYJ SX01 071119	1	コウチュウ	コガネムシ	サクラコガネ	左上翅先端部
TYJ SX01底面	2	コウチュウ	コガネムシ	サクラコガネ	上翅会合部付近
昆虫 羽 071109	3	コウチュウ	コガネムシ	サクラコガネ	上翅の一部
	4	コウチュウ	コガネムシ	サクラコガネ	上翅の一部
	5	コウチュウ	コガネムシ	サクラコガネ	上翅の一部
	6	不明			不明



1. サクラコガネ 左上翅先端部(TYJ;SD)
2. サクラコガネ 上翅会合部付近(TYJ;SX01)
3. サクラコガネ 上翅の一部(TYJ;SX01)
4. サクラコガネ? 上翅の一部(TYJ;SX01)
5. サクラコガネ? 上翅の一部(TYJ;SX01)
6. 不明(TYJ;SX01)

第26図　昆虫

（4）木製品樹種同定

1. 試料

試料は、室町期のくぼ地ＳＸ01、近代の板組遺構ＳＫ01・02から出土した木質遺物38点である。

2. 分析方法

木製品は、形状・木取り等を観察した後、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の徒手切片を直接採取する。ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製し、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料で観察された木材組織の特徴を、現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

木材組織の名称と特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3. 結果

結果を第8表に示す。

木製品は、針葉樹5分類群（マツ属複維管束亜属・カラマツまたはトウヒ属・スギ・サワラ・ヒノキ科）と広葉樹2分類群（クリ・バラ科ナシ亜科）に同定されたほか、樹皮が多く認められた。また、№8は、道管が認められたことから広葉樹と判断されるが、保存が悪く組織配列や穿孔板の形態等が観察できなかったため、種類は不明である。以下に、同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus subgen. Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-10細胞高。

・カラマツまたはトウヒ属（*Larix kaempferi*（Lamb.）Carriere or *Picea*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。放射柔組織の垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-15細胞高。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・サワラ（*Chamaecyparis pisifera*（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～スギ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

上記サワラ、アスナロを含むヒノキ科のいずれかであるが、保存が悪く属・種の同定には至らなかった。

第 8 表　樹種同定結果

番号	地点・遺構		取上 No.	種別（形状）	木取	樹種
1	SX01	底面	703	板状	柾目	サワラ
2		木炭層上面	674	樹皮？	―	樹皮
3			611	破片	不明	マツ属複維管束亜属
4		底面	698	樹皮？	―	樹皮
5		木炭層上面	651	破片	不明	バラ科ナシ亜科
6			604	破片	不明	ヒノキ科
7			603	破片	不明	クリ
8		木炭層内	687	破片	不明	広葉樹
9				破片	不明	スギ
10	P27			杭	分割	マツ属複維管束亜属
11	SK01		75	板状	―	樹皮
12			78	樹皮？	―	樹皮
13			88	樹皮？	―	樹皮
14			84	丸木材	芯持丸木	ヒノキ科
15			84	樹皮？	―	樹皮
16			104	分割材	不定形	マツ属複維管束亜属
17			58	枝状	芯持丸木	マツ属複維管束亜属
18				枝状	芯持丸木	マツ属複維管束亜属
19				枝状	芯持丸木	マツ属複維管束亜属
20				枝状	芯持丸木	マツ属複維管束亜属
21				枝状	芯持丸木	マツ属複維管束亜属
22				枝状	半裁	マツ属複維管束亜属
23		東角		板片	板目	マツ属複維管束亜属
24		SW 木杭片		破片	分割材状	カラマツまたはトウヒ属
25		NE		枝状	芯持丸木	広葉樹
26		NE		破片	分割材状	スギ
27		NE		板状（残材？）	板目	スギ
28		NE		角棒状	分割材	スギ
29	SK02		113	分割材	不定形	カラマツまたはトウヒ属
30			127	角材片	分割（端部に樹芯）	スギ
31			160	板	ミカン割状	ヒノキ科
32			193	板片	柾目	マツ属複維管束亜属
33			192	板片	柾目	マツ属複維管束亜属
34			214	板片	追柾	マツ属複維管束亜属
35			208	板片	板目	マツ属複維管束亜属
36		東半北壁際下部		丸板状	芯持丸木	マツ属複維管束亜属
37			191	板片	柾目	マツ属複維管束亜属
38			190	曲物片（側板？）	柾目	スギ

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

木取りと保存状態から板目の切片が採取できなかった。環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性で、木口で観察した範囲では単列組織のみで構成される。

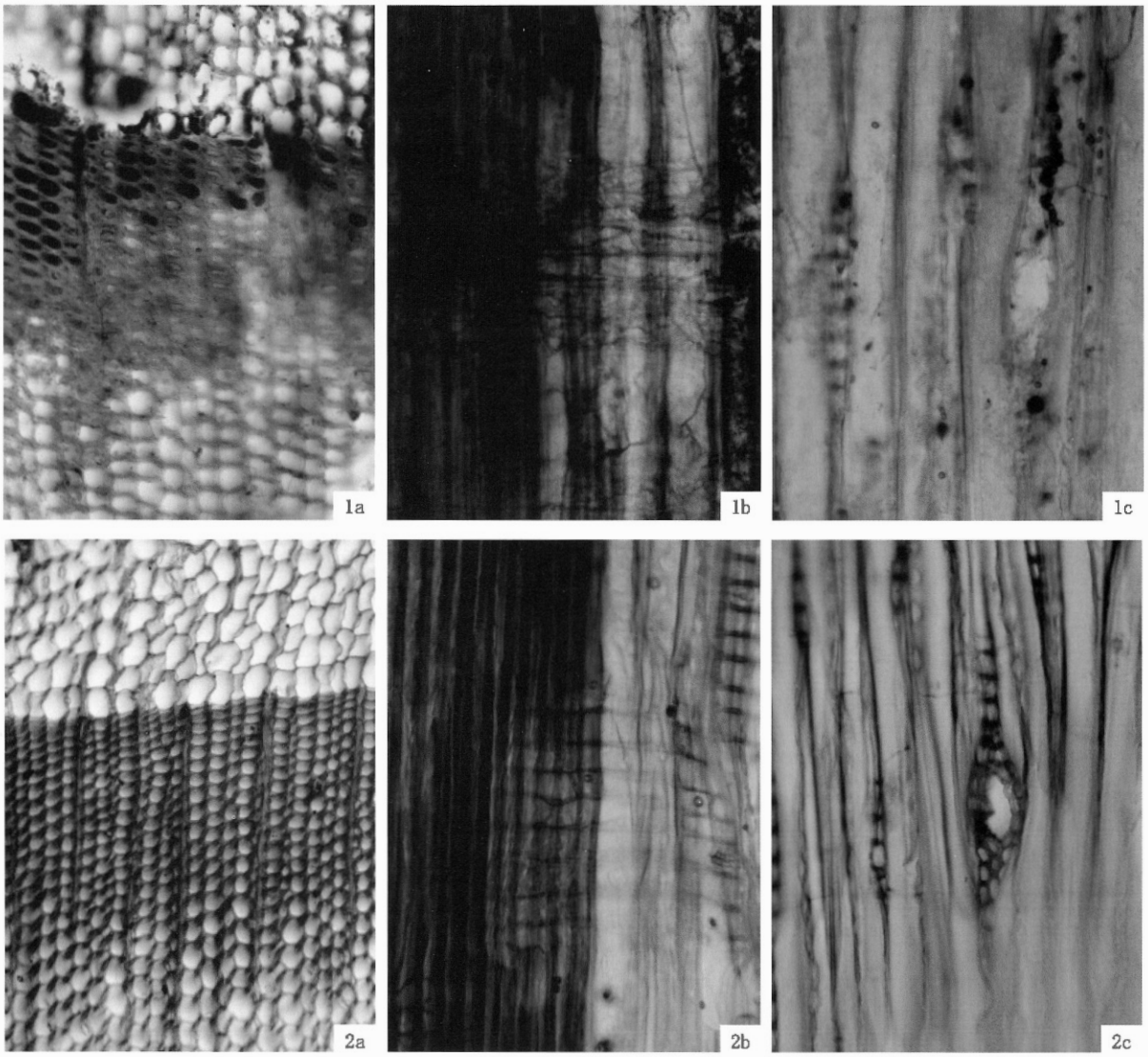
・バラ科ナシ亜科（Rosaceae subfam. Maloideae）

散孔材で、管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、単独および 2-5 個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3 細胞幅、1-20 細胞高。

4. 考察

分析対象とされた木製品には、板状および分割材を呈する破片が認められた。これらは室町期の遺構から出土した。また近代の木組遺構本体を構成する杭や板が認められたほか、内部には曲物片があった。これらの木製品は、樹種同定の結果、マツ属複維管束亜属を中心とする針葉樹主体の種類構成を示した。

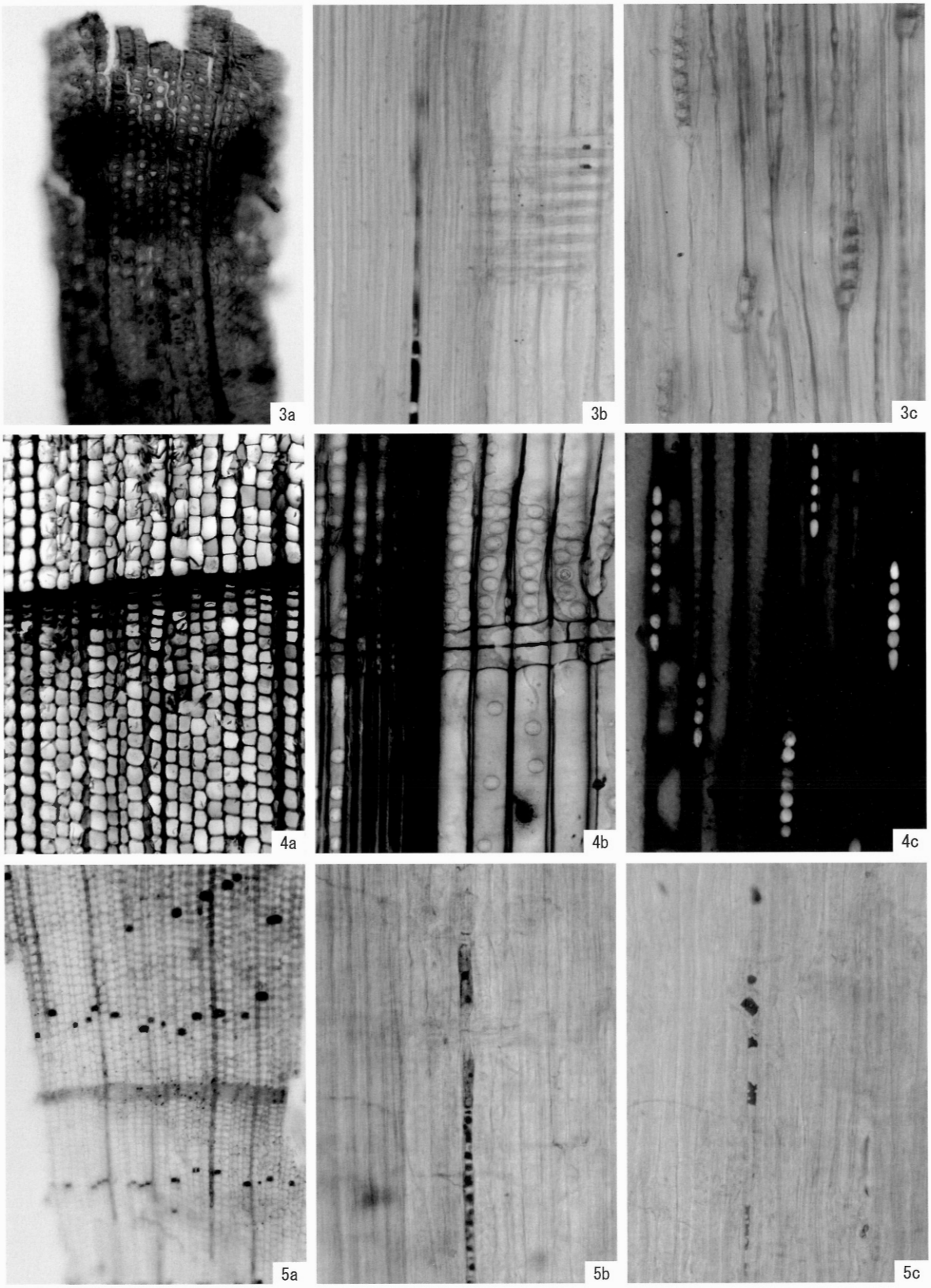
板状試料にマツ複維管束亜属、スギ、ヒノキ科等の針葉樹が確認された。広葉樹は、破片にクリやナシ亜科が認められ、重硬で強度が高い木材の利用が看取される。クリは、江尻遺跡の柱、中名Ⅴ・Ⅵ遺跡の杭、水橋金広・中馬場遺跡の柱などがある（汐見・岡田，2001；財団法人元興寺文化財研究所2003b，富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所，2005，中部日本鉱業研究所，2006）。ナシ亜科は、開酵大滝遺跡と砂子田Ⅰ遺跡の櫛に確認されているほか、田尻遺跡の井戸枠に認められたリンゴ属もナシ亜科に含まれる（長谷川・塚本，1996b；財団法人元興寺文化財研究所，2000；富山県文化振興財



1. マツ属複維管束亜属(No.7)
2. カラマツまたはトウヒ属(No.11-B)

200μm:a
100μm:b, c

第27図　木製品の顕微鏡写真（1）



3. スギ(No.19)
4. サワラ(No.1)
5. ヒノキ科(No.30-A)
　a:木口, b:柾目, c:板目

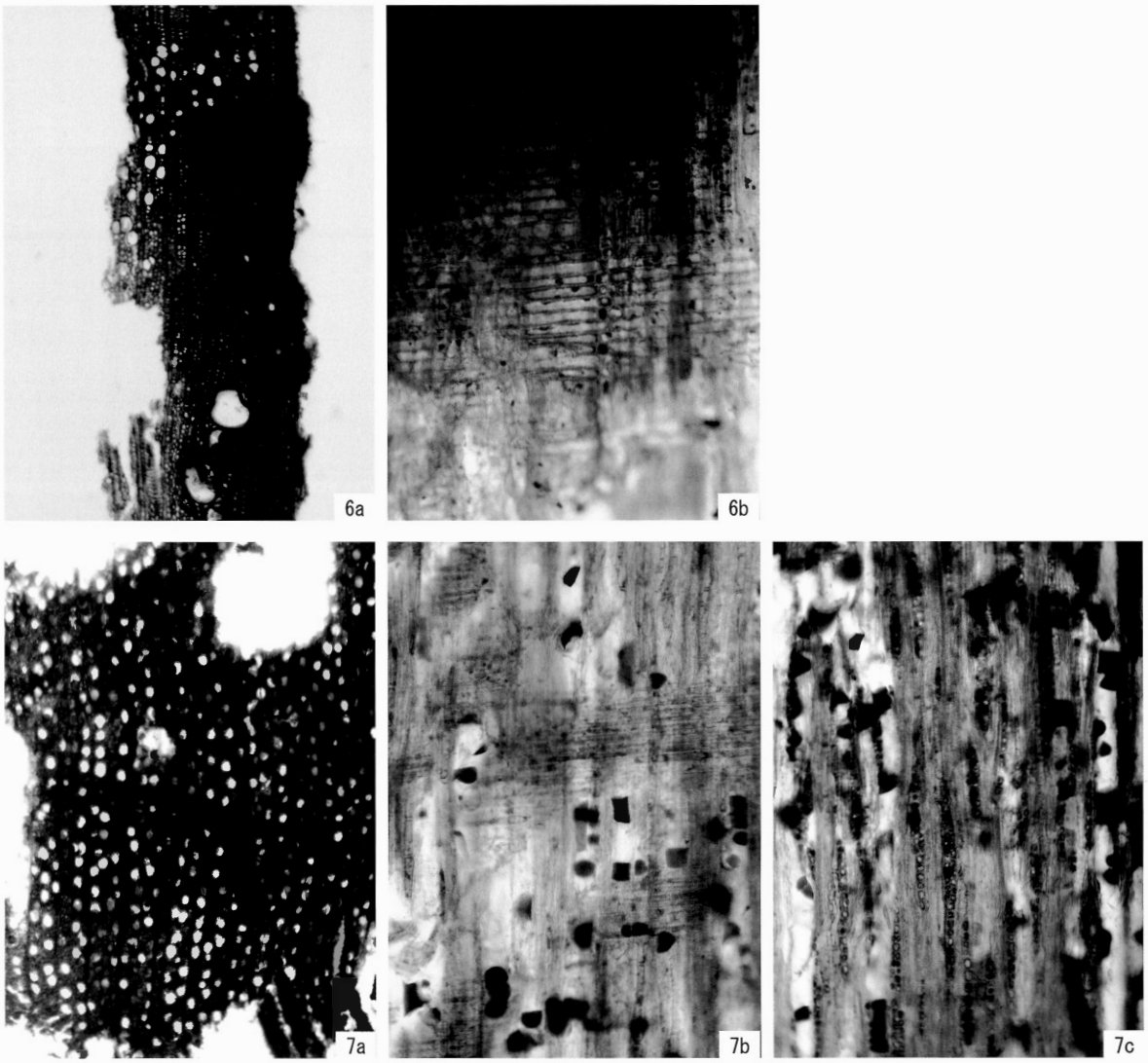
第 28 図　木製品の顕微鏡写真（２）

団埋蔵文化財調査事務所，1996)。

近代の木組遺構は、マツ複維管束亜属を主体とし、スギ、ヒノキ科等の針葉樹を使用して構築された。杭は分割材とみられ、マツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属は、比較的強度・保存性が高く、建築・土木材として適材である。

木組遺構の中にあった曲物片は、針葉樹のスギであった。スギは、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易であり、曲物の部材によく利用される樹種の一つである。

高橋　敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）



6. クリ(No.25)
7. バラ科ナシ亜科(No.22)
a:木口, b:柾目, c:板目

300μm:a
200μm:b, c

第29図　木製品の顕微鏡写真（3）

引用文献

石川茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.

伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載 I．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.

伊東隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載 II．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所．66-176.

伊東隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載 III．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201.

伊東隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166.

伊東隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載 V．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216.

小畑弘己（2008）マメ科種子同定法．小畑弘己編「極東先史古代の穀物 3」：225-252.

小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子（2007）土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培．植生史研究，15(2)，97-114.

株式会社中部日本鉱業研究所，2006，水橋金広・中馬場遺跡発掘調査自然科学的分析　－平成 14 年度（その 1）調査区の試料から－，富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書 II，富山市教育委員会，126-134.

財団法人元興寺文化財研究所，2000，樹種鑑定報告書．開酔大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告書　能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告 II，富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 11 集，富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所，82-101.

財団法人元興寺文化財研究所，2003a，樹種鑑定報告書．中名 I・V 遺跡発掘調査報告　－公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘報告 II，富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 18 集，富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所，431-454.

財団法人元興寺文化財研究所，2003b，樹種鑑定報告書．江尻遺跡・蓑島遺跡発掘調査報告書　能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告 IV，富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 17 集，富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所，215-221.

島地　謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.

汐見　真・岡田文男，2001，富山市水橋金広・中馬場遺跡出土木製品の樹種調査結果．富山市　水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書　－県営農免農道（上条南部地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）－，富山市埋蔵文化財調査報告 113，富山市教育委員会，91-93.

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所，1996，梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告　東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告 III，富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 8 集，9-23

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所，2005，中名 V・VI 遺跡・砂子田 I 遺跡発掘調査報告　－公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 IV-　第一分冊．富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 26 集，294p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642p.

長谷川益夫・塚本英子，1996b，木製品の樹種識別．梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告　東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告 III，富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 8 集，富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所，9-23.

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

Wheeler E.A.，Bass P. and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A.，Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］．

星川清親（1980）ササゲ．星川清親「新編食用作物」：475-481，養賢堂.

Richter H.G.，Grosser D.，Heinz I. and Gasson P.E.（編），2006，針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修），海青社，70p.［Richter H.G.，Grosser D.，Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］．

第6節　小　結

（1）調査地の位置と歴史

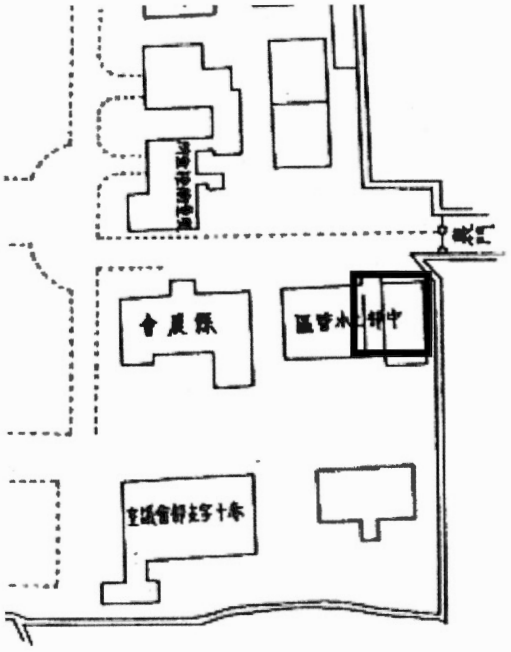
調査地は、富山城の本丸搦手石垣の南に続く土塁部分で、搦手石垣と本丸南東隅の天守台との間にあたる。

この地点は、明治16年（1883）に富山県庁が置かれた際、石垣端の土塁を崩して堀に通路を作り、県庁表門（東門）とした。大正14年頃には表門南側の現在地を整地して中部土木管区施設が建設されたことが「富山縣廳構内一覧」（富山県公文書館蔵　第29図）により確認できる。

昭和29年の富山産業大博覧会には大型パビリオンが建設された。

調査区より南側は、昭和43年頃の地下駐車場建設に伴い深く掘削され、遺構は消滅している。

今回見つかった地下式木室は、中部土木管区施設に伴うもので、蓄電池類など資材や用途不明の小壺が納められていたものと考えられる。



第30図　「富山縣廳構内一覧」（富山県史）上の発掘調査位置（図内□）

（2）土塁の構造・築造方法について

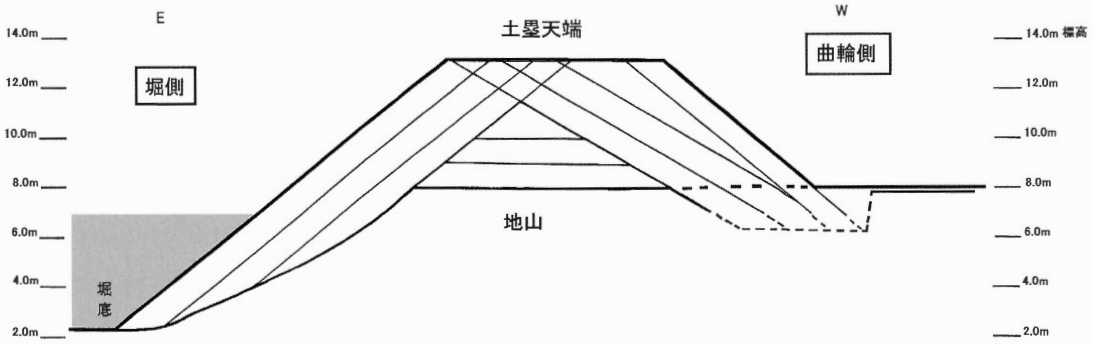
今回調査区では、土塁の基底部が検出され、土塁の断面構造と盛土の状況が明らかになった。

土塁の構造は、まず旧地表上に水平に盛土を行う。その幅は約10m、厚さ約1m単位である。1mを盛るのに10層以上で版築を行っている。その上に順次盛土を重ねていく。水平部は特に堅固な版築が行われたことは、基底部に鉄分の沈着が著しいことが示している。水を撒いて突き固めて水締めを行う典型的な版築工法によったものと思われる。

斜面部はここでは東西に存在する。斜面部の築造は、土塁中央の水平盛土部分を斜めに削り、平行に積み上げる方式である。厚みは最大2.8mを検出したが、当初はより厚かったと思われる。

曲側輪の斜面下部は、旧地表面を1m以上削り込んでいる。斜面の傾斜角は、内面側で30°、表面側で40°である。なお、堀側の斜面部は一部を確認し、傾斜角は40°である。

斜面部の盛土については、中央部の水平盛土の単位（1m）ごとに同時に築造されたのか、水平部



第31図　土塁断面復元模式図

の厚みが数mになってからまとめて整形し盛土したのかは、明らかにできなかった。

なお、40°の傾斜の強い斜面部は、雨等水の影響で崩れやすいが、盛土の厚みを厚くすることは崩落防止のための措置であったと考えられる。

本丸における土塁は、現在南辺の一部しか残されていない。ここでの調査成果（第6章）によれば、土塁上面の標高は13.5m前後に復元される。本調査区でも同じ高さであったと推定すると、基底面（旧表土）の標高は概ね8.0mであるから、土塁高さは5.5mに復元できる。

未報告であるが、本調査区の北20mの搦手南石垣の南端部での土塁高さは、標高13.2mが復元でき、土塁高さは5.2mとなる。このことは上記成果と約30cmの差が生じる。

調査成果等から復元できた土塁断面模式図は、第30図である。

土塁天端の東西幅は約9mである。図では両斜面部を延長し交差した形としたが、天端が残存しないため、水平造成などの表面部分の処理工法が存在したかどうかは不明のままであることを付言する。

東側の堀側では、斜面部の盛土状況は2011年度調査により判明している（本書第7章）。第31図では西側斜面部の調査成果をもとに、築造当初の状況を復元した図としている。堀底は標高約2.4mとなる。この付近での推定水深は4.5mと算定され、水面標高約6.9mである。土塁天端から堀斜面東端までは約13mとなる。天端から水面までは6.3mある。

西側の曲輪側では、斜面部の盛土用に地表を18m以上、深さ1.5m以上掘り下げ、斜面盛土を厚さ3m以上施工した。末端部の地下構造としては、土塁天端から約8m西まで及ぶ。その上に盛土し、曲輪面標高は8.5m～9mとなる。土塁天端から曲輪面までは5m程度である。曲輪面と堀水面の比高差は、ここでは約2mである。

なお、土塁基底面における検出遺構のうち、20cm前後の小径ピットや柱根が残っている柱穴などは、ランダムで密な打込みであり、建物柱穴とは考えられない。これらは土塁構築時に打ち込まれた乱杭と推定できる。杭材はマツであった。この乱木杭の性格は不明であるが、水平部の密度が高いことから、地盤固めの意味を持つものと推定しておく。今後の類例を待ちたい。

（3）中世の様相

土塁直下から平安時代のくぼ地埋没土上面までの間に、中世期の２枚の文化層（遺構面・遺物包含層）が存在している。本丸の他地点では戦国後期の遺構・遺物が確認されているが、ここでは明確なその年代の遺構は確認できなかった。これは土塁築造時に中世期遺構・遺物包含層の上部が削り取られたためと考えられる。

上層の中世２期は、遺物包含層が削り取られ土塁直下で検出した遺構群で、土坑・溝がある。土坑の性格は不明である。当時の地表面は、下層の中世１期及び平安時代のくぼ地の影響を受け、浅いくぼ地地形を残す。柱穴は土塁構築時の乱杭とみられ除外する。

下層の中世１期は、中央の溝状のくぼ地ＳＸ01と、北側の安定した地山部分で検出した井戸跡である。ＳＸ01は平安時代の大きなくぼ地地形に影響を受け、南へ向かい深く広くなる。浅い側から炭化物が廃棄され、次第に南へ廃棄行為が延長する。廃棄された炭化物には、炭化木材を主体とするが、木の葉・昆虫・魚類・炭化穀類なども含み、雑多な廃棄ゴミとみられる。初期の廃棄ゴミの中には、笄・高級漆器・輸入陶磁があり、廃棄した主体者が有力武家であったことを示唆する。同時代性の検証が必要ではあるが、近接して存在する井戸SE01は、ここが居館敷地内である可能性を示し、かつＳＸ01が居館外の廃棄場であるとすると、井戸とＳＸ01北端の中間、具体的にはＳＤ04がその境界を示す遺構と理解できる。ＳＤ04の主軸直交方向は、Ｎ-17°-Wであり、後述の平安時代の複数

の溝の主軸直交方向（N -2 ～ 2.5°　-W）より 15°程度西側へ傾いていることになる。これらの方向は、神通川流路に大きく影響されているのであろう。

中世 1 期のくぼ地ＳＸ 01 から出土したかわらけは、14 世紀代から 15 世紀にかけての年代が与えることができ、14 世紀代は京都系土師器の出現率が高い。

この年代は、能登の吉見詮頼（元能登守護職）が将軍足利氏から拝領した「外山郷」地頭職を京都東岩蔵寺に寄進した応永 5（1398）年、また 6 代将軍足利義教が正室の藤原尹子（瑞春院）に与えた「富山柳町」を京都二尊院に寄進した永享 2（1430）年にほぼ相当するといえる〔久保 2014〕。地名・立地を考慮すると、本調査区の範囲は「富山郷」の一部と推定することが可能であるが、具体的にそれを裏付ける資料はない状況である。これを考えるにあたっては、先に神通川流路の影響が考慮できるとした溝群が、富山郷における条里地割をも示す可能性は否定できず、富山柳町全体を含めた条里地割研究に基づき、今後評価していくべきものと理解する。

現在富山城三ノ丸南部における発掘調査において、慶長 10 年築城以前で室町期頃までの遺構群が検出されており、この調査成果が前記課題に取り組む基礎資料を提示することを期待したい。

（4）古代の様相

ＳＸ 02・03 及び古代包含層から出土土器の年代は、9 世紀代の平安前期である。遺物には須恵器・土師器のほか、製塩土器・土錘があり、それらの状況が描き出す集落の様相は、神通川辺に営まれ、漁撈を行う一般集落である。転用硯の可能性のある須恵器杯蓋が 1 点存在するが、その判定は現在のところ曖昧であり、識字層の存在を積極的に示すことはできない。

今回調査区の西方 200 m強の西ノ丸南部からは、「宅持」の人名を墨書した 8 世紀代の須恵器杯身が出土しており、官衙関連施設の存在が推定されている〔鹿島 2011〕。施設が 9 世紀代まで継続して存在するとすれば、転用硯の存在を積極的に評価できることとなろう。今後の資料の蓄積を待ちたい。

なお、調査区ではくぼ地及び水田跡と評価できる痕跡が確認され、神通川右岸自然堤防のバックヤードとしての湿潤環境が推定される。よって、集落はこれより高台となる北側に存在し、調査区北際に存在する溝ＳＤ 08 が、ちょうど居住域と湿潤環境域（水田）の境界になると推察される。平安期集落の規模についてはまだ不明である。

（5）地山の形成について

本調査区では、平安期の地山表層に食い込んで、縄文土器・弥生土器が見つかった。これは、縄文時代・弥生時代に近隣箇所で当該時期に形成されていた遺構が洪水により破壊され、土器を巻き込んで再堆積したものと推定される。この洪水が発生した時期については、本調査の結果から、弥生中期以降平安後期以前の大きな括りが可能である。

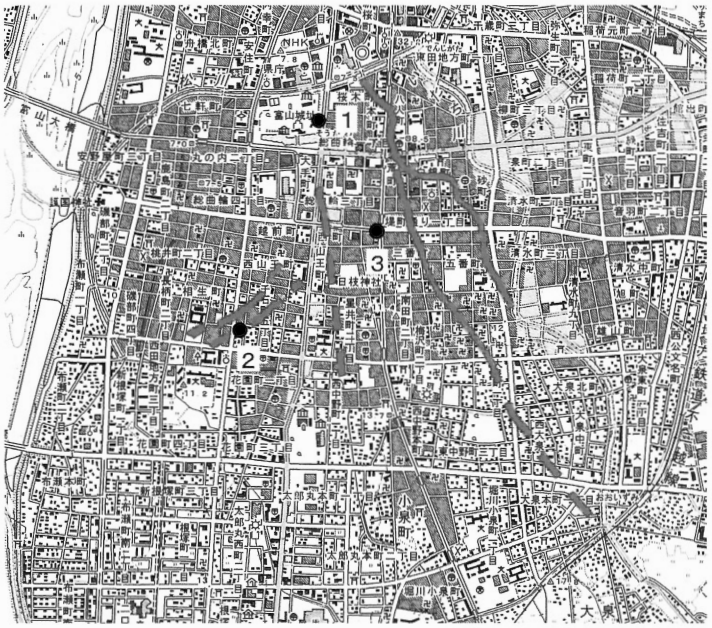
本調査区で出土した縄文土器は、縄文中期後葉（約 4,800 年前）、弥生後期前半である。それ以後に発生したものである。

近年富山城下町内において 2 例の埋没樹木の検出例が認められた。その成果とここでの調査成果を比較し、洪水が発生した詳細時期について検討する。

富山城から南へ約 1 ｋｍの富山市千石町 4 丁目地内の埋没樹木（第 32 図 2）は、建物建築に伴う地盤調査の際に地下約 6 m付近から出土したもので、地下から掘り出された樹木群は、①直径 93cm、長さ 9m　根付近を含む、 ②直径 90cm、長さ 4m　幹部、③その他径 40cm の小片多数がある。樹種同定及び放射性炭素年代測定の結果、樹種はブナ科の落葉広葉樹、クリ・コナラ属である。年代は 2,300

年前の弥生中期に、河川の洪水により死滅した。現認できた数量は、クリ４本、コナラ属２本である。地下約 6m には河川に由来する礫層があり、樹木には砂が付着していることからみて、礫を大量に含む洪水が約 2,300 年前発生し、一気に樹木群を押し倒したとみられる。樹木群がその場に生育していたか、やや上流側にあって流されたかは不明だが、根が比較的良好に残ることから、大きく離れた位置ではないと推定される。

江戸期城下町の生活面は地下約 50cm に所在することから、1,900 年余りに 5m 以上も堆積した。



第 32 図　富山城・城下町における埋没樹木出土地と河川痕跡

1 富山城本丸　　2 千石町　　3 西町

また周辺における試掘調査等の結果では、江戸時代の厚い洪水堆積層も見つかっている。それらの結果を総括すると、河川流路は、南西から北東方向への幅の広い痕跡が２本確認でき、西方向に所在する神通川の影響が大きいことを示唆する。出土地は江戸時代城下町南端にあたり、そこでの利用は室町時代頃（約 600 年前）以降で、やや遅れる〔富山市教育委員会編 2015b ほか〕。

富山城から南へ約 600m の富山市西町地内の埋没樹木（第 32 図 3）は、地下貯留管建設工事の際に地下約４～５m付近から単独で出土したもので、埋没樹木は、直径 160cm 以上、長さ 90cm の幹部である。樹種は広葉樹のクリで、放射性炭素年代測定の結果、縄文時代晩期後葉頃（cal.B.C.　774 - cal.B.C.　540）のものと判明した。本地点の倒木の年代観は、千石町４丁目地内の樹木群よりやや古いが、幹径が大径であるなどの共通点もある。また、これらの樹木群の出土地点は、土地条件図やボーリング調査結果などを参考とすると、かつての神通川や常願寺川扇状地を流下する河川の氾濫などの影響を受け易い領域であったと推定される。このことから、出土した樹木群は、おそらく集水域や調査地周辺の比較的安定した領域に分布した二次林などの森林に由来すると考えられている〔堀内ほか 2016〕。

以上のように、埋没樹木の年代からは、縄文晩期から弥生中期に少なくとも２度の洪水の発生が示唆されている。これらは本調査区での弥生後期以降の洪水の推定と符合せずそれ以前であることから、洪水は頻繁な回数で発生したことが予測されうるものの、本調査区を巻き込んだ洪水の年代を特定するには至っていない現状である。今後における地質学的な知見の蓄積を必要とする。　　（古川）